今坂遺跡第6次調査
瀬戸山Ⅱ遺跡
高田遺跡第21次調査

発掘調査報告書

2009

掛川市教育委員会

今坂遺跡第6次調査
瀬戸山Ⅱ遺跡
高田遺跡第21次調査

発掘調査報告書

2009年
掛川市教育委員会

例　言

1．本書は、平成19年度に現地調査を実施し、平成20年度に整理調査を行った、今坂遺跡第6次調査・瀬戸山Ⅱ遺跡・高田遺跡第21次調査の発掘調査報告書である。
2．調査は、茶園の改植に伴う緊急調査で、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3．発掘調査にあたっては、以下の地権者・耕作者の方々の、埋蔵文化財に対する多大なご理解とご協力を頂いた。（順不同、敬称略）
溝口務、川瀬寛、鈴木昌、鈴木文雄、鈴木まち子、鈴木光晴、村松直、山崎孝弘
4．発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。（五十音順）
渥美憲銳、池田正夫、石川昭、石貝保平、伊藤和行、井上あゆみ、大石直人、大村久美子、太田敏子、笠谷みゆき、樽松弘子、古市慶子、早乙女のぞみ、坂野咲子、嶋保夫、榛葉豊子、鈴木育子、鈴木辰江、鈴木はつ子、多賀　一美、立林好廣、寺沢巧、徳川浩、長尾秀雄、野中きみ子、萩田俊雄、葉佐英貴、長谷川勇次郎、原川武、深田重男、福田一郎、福田貞夫、藤田弘、藤田房幸、藤田理恵、松浦弘司、松浦良和、溝口玉緒、向川隆、山崎順子、山下広美、山本ユミ子
5．現地調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を頂いた。
（五十音順、敬称略）
足立順司、大谷宏治、柴田稔、白澤崇、平野吾郎、松井一明、松本一男、溝口啓彰、向坂鋼二
6．本書の執筆・編集は、掛川市教育委員会生涯教育課文化振興室文化財係の木佐森道弘と戸塚和美で行った。
7．今坂遺跡第6次調査SF06出土の鉄剣とSF11出土の小刀の実測並びに所見は、金宇大（京都大学大学院）によるものである。
8．調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　例

1．挿図における方位は、すべて座標北である。
2．本書で使用した遺構表記は、次の意味である。
SB：竪穴住居跡　SD：溝状遺構　SF：土坑　SH：掘立柱建物跡
SP：柱穴・小穴　SX：性格不明の遺構
3．本書で使用した柱間寸法は、柱穴下場の中心間の数値である。
4．遺物の番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図に関わらず、遺跡ごとの通し番号を付している。また、挿図と写真図版番号は同一である。
5．本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。

本 文 目 次

例言・凡例

Ⅰ はじめに …… 1
1. 調査に至る背景 …… 1
2. 地理的・歴史的環境 …… 1

Ⅱ 今坂遺跡第6次調査 …… 5
1. 調査に至る経緯と調査の目的 …… 7
2. 調査の方法と経過 …… 7
3. 調査の内容 …… 7
(1)遺　構 …… 7
①竪穴住居跡 …… 8
②溝状遺構 …… 12
③埋葬土坑 …… 13
④掘立柱建物跡 …… 15
⑤柱穴列 …… 15
(2)遺　物 …… 15
①縄文土器・石器 …… 16
②弥生土器・古式土師器 …… 21
③古墳時代鉄製品 …… 24
④近世鉄製品 …… 25
⑤近世陶磁器 …… 25
4. まとめ …… 26

Ⅲ 瀬戸山Ⅱ遺跡 …… 65
1. 調査に至る経緯と調査の目的 …… 67
2. 調査の方法と経過 …… 67
3. 調査の内容 …… 67
(1)遺　構 …… 68
①北調査区　竪穴住居跡 …… 68
②北調査区　土坑 …… 70
③北調査区　小穴 …… 70
④北調査区　性格不明遺構 … 71
⑤南調査区　竪穴住居跡 …… 71
⑥南調査区　掘立柱建物跡 … 73
⑦南調査区　性格不明遺構 … 73
(2)遺　物 …… 73
①縄文土器・石器 …… 73
②弥生土器・古式土師器 …… 75
4. まとめにかえて …… 78

Ⅳ 高田遺跡第21次調査 …… 115
1. 調査に至る経緯と調査の目的 … 117
2. 調査の方法と経過 …… 117
3. 調査の内容 …… 117
(1)遺　構 …… 117
①竪穴住居跡 …… 117
②掘立柱建物跡 …… 118
③溝状遺構 …… 118
④土坑 …… 119
⑤小穴 …… 120
⑥性格不明遺構 …… 121
(2)遺　物 …… 121
①弥生土器・古式土師器 … 121
②近世陶磁器 …… 121
4. まとめ …… 123

付載

瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定 …… 139

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図……3

今坂遺跡第６次調査

第２図　遺跡位置図・グリッド配置図　……29
第３図　SB01 実測図(1) …… 30
第４図　SB01 実測図(2) …… 31
第５図　SB01 実測図(3) …… 32
第６図　SB02・03・10 実測図(1) …… 33
第７図　SB02・03・10 実測図(2) …… 34
第８図　SB02・03・10 実測図(3) …… 35
第９図　SB04・05 実測図(1) …… 36
第 10 図　SB04・05 実測図(2) …… 37
第 11 図　SB06 実測図(1) …… 38
第 12 図　SB06 実測図(2) …… 39
第 13 図　SB08 実測図 …… 40
第 14 図　SB09 実測図 …… 41
第 15 図　SB13 実測図 …… 42
第 16 図　SB14 実測図 …… 43
第 17 図　SB15 実測図 …… 44
第 18 図　SB16 実測図 …… 45
第 19 図　SB17 実測図 …… 46
第 20 図　SB18 実測図 …… 47
第 21 図　SD04 実測図 …… 48
第 22 図　SF01 実測図 …… 49
第 23 図　SD06～08、SF05・10～12 実測図 … 50
第 24 図　SF06 実測図 …… 51
第 25 図　SH01 実測図 …… 52
第 26 図　SH02・柱穴列１実測図 …… 53
第 27 図　出土遺物実測図(1) …… 54
第 28 図　出土遺物実測図(2) …… 55
第 29 図　出土遺物実測図(3) …… 56
第 30 図　出土遺物実測図(4) …… 57
第 31 図　出土遺物実測図(5) …… 58
第 32 図　出土遺物実測図(6) …… 59
第 33 図　出土遺物実測図(7) …… 60
第 34 図　出土遺物実測図(8) …… 61
第 35 図　出土遺物実測図(9) …… 62
第 36 図　出土遺物実測図(10) …… 63

瀬戸山Ⅱ遺跡

第 37 図　遺跡位置図・グリッド配置図 … 79
第 38 図　北区遺構全体図 …… 80
第 39 図　南区遺構全体図 …… 81
第 40 図　北 SB01 実測図 …… 83
第 41 図　北 SB02 実測図 …… 84
第 42 図　北 SB03 実測図 …… 85
第 43 図　北 SB05・10・14 実測図(1) …… 86
第 44 図　北 SB05・10・14 実測図(2) …… 87
第 45 図　北 SB06 実測図 …… 88
第 46 図　北 SB07・08 実測図…… 89
第 47 図　北 SB09・11・15、北 SF01、
　　北 SX05 実測図(1)…… 90
第 48 図　北 SB09・11・15、北 SF01、
　　北 SX05 実測図(2)…… 91
第 49 図　北 SB15、北 SF01、北 SX05 土器
　　出土状況図 …… 92
第 50 図　南 SB01 実測図…… 93
第 51 図　南 SB02 実測図…… 94
第 52 図　南 SB03 実測図…… 95
第 53 図　南 SB04 実測図…… 96
第 54 図　南 SB05・06・07 実測図…… 97
第 55 図　南 SB09 実測図…… 98
第 56 図　南 SB13 実測図…… 99
第 57 図　南 SB14、南 SF01 実測図 ……100
第 58 図　南 SH01 実測図……101
第 59 図　南 SH02 実測図 (1)……102
第 60 図　南 SH02 実測図 (2)……103
第 61 図　北 SP103・67、南区 G16 グリッド内
　　土器出土状況図 …… 104
第 62 図　北 SX04、南 SX01 実測図 ……105
第 63 図　出土遺物実測図(1) ……106
第 64 図　出土遺物実測図(2) ……107
第 65 図　出土遺物実測図(3) ……108
第 66 図　出土遺物実測図(4) ……109
第 67 図　出土遺物実測図(5) ……110
第 68 図　出土遺物実測図(6) ……111
第 69 図　出土遺物実測図(7) ……112
第 70 図　出土遺物実測図(8) ……113

高田遺跡第 21 次調査

第 71 図　遺構全体図 ……125
第 72 図　遺跡位置図・グリッド配置図 …127
第 73 図　SB01 実測図 ……128
第 74 図　SB02・03、SH01 実測図……129
第 75 図　SD01 実測図 ……130
第 76 図　SD02 実測図 ……131
第 77 図　SD03 実測図 ……132
第 78 図　SF04 ～ 07、SX02 実測図 ……133
第 79 図　SF03、SX01、ピット実測図 ……134
第 80 図　出土遺物実測図(1) ……135
第 81 図　出土遺物実測図(2) ……136
第 82 図　出土遺物実測図(3) ……137

付載

第 83 図　北 SB06・09 炭化材出土状況図…143

付図 1　今坂遺跡第 6 次調査遺構全体図
付図 2　今坂遺跡第 6 次調査 SD01 ～ 03 実測図

図 版 目 次

カラー図版 1　今坂遺跡第 6 次調査区北半全景
カラー図版 2　今坂遺跡第 6 次調査区南半全景
カラー図版 3　瀬戸山Ⅱ遺跡調査区遠景（西から）
カラー図版 4　瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区東半全景
カラー図版 5　瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区西半全景
カラー図版 6　瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区東半全景
カラー図版 7　瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区西半全景
カラー図版 8　高田遺跡第 21 次調査区遠景（東から）
　　高田遺跡第 21 次調査区全景

今坂遺跡第 6 次調査

図版 1　今坂遺跡第 6 次調査区北半（東から）
　　今坂遺跡第 6 次調査区南半（北から）
図版 2　SB01・02・03・10・11 床面検出状況（東から）
　　SB01・02・03・10・11 完掘状況（東から）
図版 3　SB02・03・10・11 完掘状況（西から）
　　SB04・05 完掘状況（東から）
図版 4　SB06 完掘状況（北から）
　　SB09 床面検出状況（東から）
図版 5　SB09 完掘状況（東から）
　　SB13 完掘状況（東から）
図版 6　SB14 完掘状況（東から）
　　SB15 完掘状況（東から）
図版 7　SF06 完掘状況（北から）
　　SH01・02 完掘状況（南から）
図版 8　SB01 焼土・黄褐色土ブロック検出状況（北から）
　　SB02 炉跡検出状況（北から）
　　SB04 完掘状況（西から）
図版 9　SB04 土器出土状況(1)
　　SB04 土器出土状況(2)
　　SB06 土器出土状況(1)
図版 10　SB06 土器出土状況(2)
　　SB06 地下炉粘版岩ブロック出土状況
　　SB08 完掘状況（西から）
図版 11　SB08 土器出土状況
　　SB09 炉跡検出状況
　　SB09 大型石出土状況
図版 12　SB14 土器出土状況(1)
　　SB14 土器出土状況(2)
　　SP524（SB15 内）土層断面
図版 13　SB16 完掘状況（西から）
　　SB17 完掘状況（北から）
　　SB18 完掘状況（西から）
図版 14　SD01・03 完掘状況（北西から）
　　SD01・03 土層断面
図版 15　SD02 完掘状況（南西から）
　　SD04 完掘状況（南西から）
　　SP236（SH01 内）土層断面
図版 16　SF01 完掘状況（北西から）
　　SF01 土層断面・土器出土状況(1)
　　SF01 土層断面・土器出土状況(2)
図版 17　SF06 土層断面
　　SF06 鉄剣出土状況（遠景）
　　SF06 鉄剣出土状況（近景）
図版 18　SF10 ～ 12 完掘状況（西から）
　　SF11 小刀出土状況（西から）
　　柱穴列 1 完掘状況（南から）
図版 19　出土遺物(1)
図版 20　出土遺物(2)
図版 21　出土遺物(3)
図版 22　出土遺物(4)
図版 23　出土遺物(5)
図版 24　出土遺物(6)
図版 25　出土遺物(7)
図版 26　出土遺物(8)
図版 27　出土遺物(9)
図版 28　出土遺物(10)
図版 29　出土遺物(11)
図版 30　出土遺物(12)
図版 31　出土遺物(13)
図版 32　出土遺物(14)
図版 33　出土遺物(15)
図版 34　出土遺物(16)

瀬戸山Ⅱ遺跡

図版 35　瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区東半（西から）
　　瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区西半（西から）
図版 36　瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区東半（南から）
　　瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区西半（西から）
図版 37　北 SB01 床面検出状況（北から）
　　北 SB01 完掘状況（西から）
図版 38　北 SB02 完掘状況（西から）

北SB09遺物・炭化材出土状況(北から)
図版 39 北 SB09 完掘状況（北から）
北 SB14 完掘状況（南から）
図版 40 北 SB15 遺物出土状況（南から）
南 SB01 完掘状況（東から）
図版 41 南 SB13 完掘状況（北から）
南 SH01 完掘状況（東から）
図版 42 調査風景
北 SB01 炉跡検出状況（北から）
北 SB05 完掘状況（南から）
図版 43 北 SB08 完掘状況（北から）
北SB09遺物・炭化材出土状況(西から)
北 SB09 遺物出土状況（北から）
図版 44 北 SB09 遺物出土状況（南から）
北 SB09 炭化材出土状況（東から）
北 SB10 遺物出土状況(1)（北から）
図版 45 北 SB10 遺物出土状況(2)（南から）
北 SB10 遺物出土状況(3)（南から）
北 SB10 遺物出土状況(4)（北から）
図版 46 北 SF01 完掘状況（北から）
北 SP103 紡錘車出土状況（南から）
北 SX04 遺物出土状況（南から）
図版 47 北 SX04 完掘状況（北から）
南 SB01 遺物出土状況（南から）
南 SB02 遺物出土状況（南から）
図版 48 南 SB02 完掘状況（北から）
南 SB03 完掘状況（東から）
南 SB05 遺物出土状況（南から）
図版 49 南 SB05 ～ 07 完掘状況状況（南から）
南 SB09 床面検出状況（北から）
南 SB09 完掘状況（北から）
図版 50 南 SB13 遺物出土状況（東から）
南 SH02 完掘状況（南から）
南 SF01 完掘状況（東から）
図版 51 南 SX01 遺物出土状況(1)（東から）
南 SX01 遺物出土状況(2)（南から）
南調査区 G16 区遺構外（北から）
図版 52 出土遺物(1)
図版 53 出土遺物(2)
図版 54 出土遺物(3)
図版 55 出土遺物(4)
図版 56 出土遺物(5)
図版 57 出土遺物(6)
図版 58 出土遺物(7)
図版 59 出土遺物(8)
図版 60 出土遺物(9)
図版 61 出土遺物(10)
図版 62 出土遺物(11)
図版 63 出土遺物(12)

高田遺跡第 21 次調査

図版 64 高田遺跡第 21 次調査区全景（東から）
SB01 完掘状況（南から）
図版 65 SH01 完掘状況（南から）
SD01 完掘状況（東から）
図版 66 SD02 完掘状況（南から）
SD03 完掘状況（南から）
図版 67 調査風景
SB02・03 完掘状況（北から）
SD03 集石検出状況（西から）
図版 68 SF04 完掘状況（南から）
SF04 土層断面(1)
SF04 土層断面(2)
図版 69 SF05 完掘状況（南から）
SF06・07 完掘状況（西から）
SF06 完掘状況（西から）
図版 70 SB01 ～ 05 完掘状況（西から）
SP27 土層断面
SP109 土器出土状況（西から）
図版 71 SP48 ～ 50 完掘状況（南から）
SP48 ～ 50 土層断面
SX01 集石検出状況（南から）
図版 72 出土遺物(1)
図版 73 出土遺物(2)
図版 74 出土遺物(3)
図版 75 出土遺物(4)
図版 76 出土遺物(5)
図版 77 出土遺物(6)
図版 78 出土遺物(7)
図版 79 出土遺物(8)
図版 80 出土遺物(9)
図版 81 瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の
走査型電子顕微鏡写真(1)
図版 83 瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の
走査型電子顕微鏡写真(2)

Ⅰ はじめに

1. 調査に至る背景

掛川市教育委員会は、平成19年度に国および静岡県の補助金を得て実施した市内遺跡発掘調査等事業で、開発等の事業に関し3個所の本調査を行った。

本調査の3個所は、すべて茶園改植に先立つもので、いずれも市の北西部に位置する和田岡地区内において実施したものである。

和田岡地区は、茶栽培が盛んな市内でも有数の茶産地で、二級河川原野谷川により形成された段丘上に広大な茶園が展開している。この段丘上は、また、市内でも有数の遺跡分布地となっているところでもあり、茶園改植（茶の品種改良に伴い、畑地の水はけをよくするために土壌を改良する、いわゆる"天地返し"を行うことが多い）により、遺跡の一部が消滅する事態が生じている。掛川市教育委員会では、茶園改植に伴い消滅する状況となった遺跡に対し、その記録保存を目的とした発掘調査を実施している。今回調査対象となった3個所においても、茶園改植の計画を受け、発掘調査に至ったものである。

2. 地理的・歴史的環境

(1)地理的環境

掛川市は、静岡県の西部地方（大井川以西）に位置し、東経138度線上にある。南に小笠山、東に牧之原大地に続く丘陵、北には赤石山系から連なる丘陵に囲まれ、その間に、原野谷川、逆川をはじめとする中小河川が流れ、沖積平野の縁には、開析された小さな谷が無数に入り込んでいる。

今回報告する今坂遺跡・瀬戸山Ⅱ遺跡・高田遺跡は、いずれも原野谷川が形成した和田岡原と呼ばれる河岸段丘上に位置する。段丘は、原野谷川西岸を中心に発達し、流域北部の原泉、原田、原谷地区の段丘は小規模であるのに対し、和田岡地区では東西約1.2km、南北約2.2kmの広大な面積をもつ。

この段丘の形成は第四紀洪積世に遡り、砂岩、頁岩の他に一部のシルト層を挟んで形成される。黒色又は暗褐色の表土（いわゆる"黒ボク土"）の下には、粘性のある緻密な黄褐色土が堆積しており、遺構はこの黄褐色土を掘り込んで築かれている。

和田岡原の段丘は、大きく分けて標高60m前後の古岡原と呼ばれる上位段丘面と、標高40～50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘面に区分され、どちらの段丘上にも数多くの遺跡が分布している。今坂遺跡は、上位段丘面の西端に位置し、瀬戸山遺跡と高田遺跡は、下位段丘面に位置する。

(2)歴史的環境

ここでは、和田岡原での近年の発掘調査成果を盛り込みながら、考古資料から見た和田岡原の歴史を概観したい。

和田岡原の人跡は、それまで高田上ノ段遺跡出土とされる槍先形尖頭器が最古と考えられてきたが、平成9年に溝ノ口遺跡の発掘調査において旧石器時代と考えられるスクレーパーが出土したことによって、その歴史は旧石器時代まで遡ることとなった。これまで市内で確実に旧石器時代に比定される遺物は、溝ノ口遺跡出土のスクレーパーのみであったが、今回報告する瀬戸山Ⅱ遺跡の調査においても頁岩製のスクレーパーが出土し、僅かではあるが、旧石器の新資料を加えることになった。

縄文時代に入ると、遺跡は少しずつ広がりを見せる。瀬戸山Ⅰ・Ⅱ、向山、高田遺跡で押型文土器が発見されているが、未だ不明な点が多い。中期になると遺跡数も増え、最盛期を向かえるが、当該地での遺構としての調査例は少ない。中原遺跡と高田遺跡第17次調査において、石囲い炉を伴った中期の

竪穴住居跡が発見されており、今回報告する今坂遺跡の発見が3例目となった。縄文時代後晩期になると遺跡数は減少するようで、調査例もない。

弥生時代中期に比定される遺跡は散在し、発掘調査においても条痕系土器が少なからず見られるようになるが、今まで遺構を伴う調査事例は皆無で詳細は不明であった。今回報告する今坂遺跡では、山内においても希有な中期中葉の土器棺墓が発見された。

弥生時代後期になると爆発的に遺跡は増加し、段丘縁辺部では重複関係にある竪穴住居跡が至る地点で確認されている。方形周溝墓や土器棺墓などの墓跡も発見されているが、住居跡に比べ、墓跡の検出例ははるかに少なく、当時の人々の集落と墓域の関係は明かでない。

弥生時代後期の集落は古墳時代前期に継続するが、前期には段丘の内部にも集落が展開される。また、一辺7mを測る大型竪穴住居が高田遺跡・瀬戸山遺跡などで発見されており、弥生時代後期とは異なった集落展開があったと考えられる。

古墳時代中期になると丘陵縁辺部において、各和金塚古墳・吉岡大塚古墳をはじめとする全長60m級の前方後円墳、円墳から成る和田岡古墳群が造営される。これら首長墓の他に、刀子・直刀を副葬する比較的規模の大きな土坑墓が発見されている。今回の今坂遺跡の調査においても、これまでの規模を遙かに上回る規模の土坑墓が発見された。前方後円墳をはじめとする首長墓との関係等、解明すべき課題も多い。

近年まで古墳時代中期の集落の調査事例はほとんどなかったが、平成18年度に調査された女高I遺跡では竪穴住居跡が良好な一括土器資料を伴って発見された。同年に調査された高田遺跡でも、多量の中期の土器片を伴ったゴミ穴が発見された。少しずつではあるが、その資料は増えつつある。中期以降の集落動向は、和田岡古墳群の造営とも関わるだけに今後益々注目される。

古墳時代後期以降の遺跡の数は激減、後期に至っての集落動向は全く不明であるが、高田上ノ段遺跡では6世紀前半に比定される円墳の周溝が発見されていることから、後期段階でも造墓はあったようである。

古代・中世の様相については、現段階においては考古資料から窺い知ることはできない。今回調査された今坂遺跡・高田遺跡では、17世紀後半に比定される陶器が出土しており、和田岡原での近世集落の形成が17世紀後半に遡るものと考えられる。

No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	今坂遺跡	16	吉岡原古墳群
2	瀬戸山Ⅱ遺跡	17	林遺跡
3	高田遺跡	18	西村遺跡
4	東原遺跡	19	瀬戸山Ⅰ遺跡
5	溝ノ口遺跡	20	瀬戸山古墳
6	中原遺跡	21	瀬戸山Ⅲ遺跡
7	高田上ノ段遺跡	22	花ノ腰遺跡
8	吉岡大塚古墳	23	藤六古墳群
9	高田上ノ段古墳	24	東登口古墳群
10	吉岡下ノ段遺跡	25	女高Ⅰ遺跡
11	吉岡下ノ段古墳群	26	女高Ⅱ遺跡
12	春林院古墳	27	行人塚古墳
13	宮脇行人塚古墳	28	鼠塚古墳
14	大岡遺跡	29	高田古墳群
15	吉岡原遺跡	30	谷房ヶ谷古墳群

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

今坂遺跡

第6次調査

Ⅱ 今坂遺跡第6次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成18年度に茶園改植の計画があることを把握し、9月7日・8日に確認調査を実施した。その結果、地表下30～65cmから竪穴住居跡等を検出するとともに、土器が出土した。確認調査の結果を基に、遺跡の保護・保存のため、保護層を確保した状態での改植について耕作者と協議した。改植対象地の東半については、保護層を確保しての掘削によって遺構は保護されることとなった。対して西半については、改植の深耕に対して遺構面までの深度が浅いことから、保護層を確保しての改植は困難との結論に達し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成18年11月7日に記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて、県教育委員会に「埋蔵文化財発掘調査の届出書」を進達した。

これに対し、平成18年11月14日付けで、県教教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

2. 調査の方法と経過

調査は、対象地の地形に合わせ5m方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。グリッドは、アルファベットと数字を組み合わせて、3－A区、3－B区等の呼称とし、グリッドの北西に位置する杭にグリッドを代表させた。現場での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1と10分の1を併用し、微細図は10分の1とした。写真撮影は、6×7カメラ1台（プロニー白黒用）と35㎜カメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、排土置き場を確保する必要から、対象地を2分割し、平成19年7月4日に前半部分の機械掘削を開始した。9月27日から後半部の機械掘削を行い、10月30日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために、基準点測量を実施した。

3. 調査の内容

今回の調査区では、調査区北際の2～4－A～D区において耕作削平によって遺構が検出されなかった箇所があったが、その他では若干の攪乱はあったものの、ほとんどのグリッドで遺構・遺物が確認された。確認された遺構・遺物の時期は、縄文時代中期から後期、弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代中期、近世に分けられる。

(1)遺構

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒である。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡1棟、埋葬土坑1基、小穴602基である。近世では、溝状遺構6条、埋葬土坑3基である。以下、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、小穴、性格不明遺構の順に説明していく。

①竪穴住居跡（SB）

SB01（第３～５・30 図）

４・５－Ｅ・Ｆ区に位置し、調査区内において最も竪穴住居跡の重複の著しい箇所にて検出された。南北 6.80m、東西 6.80m を測る、ほぼ正方形に近い隅丸方形を呈す。他遺構との重複関係では、北東隅において SB09 を、西壁において SB02 をそれぞれ切っている。壁際の一部では、床面より一段高くなった棚状遺構が検出され、南壁南西隅寄りにおいては、炉跡とは異なった構造の火処を有するなどの特徴をもった古墳時代前期の竪穴住居跡である。掘り方は、中央部と壁際の間をドーナツ状に掘り窪め、そこに５～10cm の厚さで黒褐色土に黄褐色土ブロックを含んだ土を入れ貼り床としていた。床面は、ほぼ平坦で、南東隅周辺では非常によくしまった硬化面が認められた。北・西壁際では、床面より一段高くさせたＬ字状の棚状遺構が検出された。棚状遺構は、床面より 5cm 程高く、壁際から 90～100cm 程の幅をもち、ほぼ平坦で床面同様の貼り床が施されていた。主柱穴は、SP159・163・156・166 が想定される。主柱穴間の距離は、SP159・163 間で 3.95m、SP156・166 間で 3.60m を測る。SP163 と 166 は、どちらも東西に長軸をもった方形で、平面形が類似している。壁溝は、北壁と南西隅で確認されたが、その他の箇所では確認できなかった。南壁南西隅寄りにおいて、焼土・黄褐色土ブロックが集中する範囲が確認された。その範囲は、ハの字状を呈し、東西 3.18m、南北 0.9m、厚さ 10～20cm を測る。ハの字形の中央部の床面には、10cm 程の厚さの焼土層が確認され、その周囲は火熱による硬化がみられた。さらに、その焼土の直下と周囲は、凸字状に掘り窪められていた。竪穴住居に伴う火処を形成する施設であることは間違いないが、当該期の炉とは明らかに構造・形態が異なる。覆土内からはテンパコ約半分程の土器片が出土したが、ほとんどが破片で、第 30 図 115～127 が図示できたものである。出土土器から古墳時代前期に比定される。

SB02（第６～８・30 図）

５－Ｆ・Ｇ区に位置し、SB01 などとともに竪穴住居跡の重複が著しい箇所にて検出された。平面形は、南北に長軸をもった円形を呈し、南北約 5.70m、東西 4.50m を測る。南東において SB01 に切られ、西壁において SB03 を切っている。掘り方はほぼ平坦で、約 10cm 程の厚さで黒褐色土と黄褐色土を混入した土で貼り床としており、炉跡北周囲は非常に硬化していた。主柱穴としては、P1、SP151・156 がその候補にあげられるが、矩形とするにはやや歪で、北西に位置する柱穴は検出できなかった。壁溝は、幅にばらつきはあるが、全周していたと考えられる。炉跡は、中央からやや北寄りで検出され、南に黄褐色粘土による周堤をもつ。覆土及び貼り床上内からは、少量の土器片が出土した。第 30 図 128～133 が図示できたもので、弥生時代後期に比定される。

SB03（第６～８・30 図）

５・６－Ｆ・Ｇ区に位置し、SB02 などとともに竪穴住居跡の重複が著しい箇所にて検出された。平面形は、南北に長軸をもった、やや歪な隅丸方形を呈し、南北約 6.50m、東西約 5.70m を測る。北東において SB02 に切られ、南西において SB10 を、南東において SB12 をそれぞれ切っている。掘り方は、南壁際に小規模な掘り込みが見られる他はほぼ平坦で、約 10cm 程の厚さで黒褐色土と黄褐色土を混ぜた土で貼り床を形成しており、中央周辺に著しい硬化面が確認された。主柱穴としては、P2・SP139・138 がその候補にあげられるが、北東に位置する柱穴は検出できなかった。壁溝は、幅約 25cm、深さ約 7cm で全周していたと考えられる。炉跡は、ほぼ中央で SB02 に破壊された焼土の残がいとして確認された。覆土及び貼り床土内からは、少量の土器片が出土した。第 30 図 134～138 が図示できたもので、弥生時代後期に比定される。

SB04（第9・10・30図）

7・8－E・F区に位置する。南北に長軸をもった円形を呈し、南北7.30m、東西5.85mを測る。南西において、SB05を切っている。掘り方には、著しい凹凸はないが、北から南に向かって緩やかな傾斜がみられる。床面は、掘り方面から5～10cm程の厚さで黄褐色土を多く含んだ明褐色土を貼り床としており、炉跡周辺が硬化していた。主柱穴としては、SP118・146・123・121が想定される。主柱穴間の距離は、SP118・127間で2.90m、SP123・121間で3.00mを測る。掘り方面での壁溝は、北・東・南壁の一部のみでの検出であったが、床面では全周していた。炉跡は、中央やや北寄りにて検出され、北に黄褐色粘土による周堤と、南にも周堤状の内部が確認された。第30図139・146・152・151の土器は、焼周辺から床面直上で出土しており、いずれも完形率が高いことから、竪穴住居跡廃絶期に伴うものである。弥生時代後期に比定される。

SB05（第9・10・31図）

7・8－E・F区に位置する。南北に長軸をもった円形を呈し、南北約7.00m、東西5.50mを測る。北東においてSB04に、南東においてSD01にそれぞれ切られている。掘り方は、中央部をやや深く掘り窪め、壁際から50～70cmの幅で周堤状に掘り残していた。床面は、掘り方面の窪みを中心に5～10cm程の厚さで黄褐色土を多く含んだ明褐色土を貼り床としていた。壁際の周堤部は、床面検出時にも中央部より10cm程高くなっていることが確認された。壁際には棚状の施設が存在したと考えられる。主柱穴としては、SP289・286・599・306と、SP125・126・599・306の2組の組み合わせが想定され、竪穴住居の拡張、もしくは建て替えがあったと考えられる。主柱穴間の距離は、SP289・286間で2.38m、SP599・306間で3.05m、SP125・126間で2.65mを測る。炉跡が2箇所で確認されていることから、前者が竪穴拡張前、後者が竪穴拡張後の組み合わせを示すものと考えられる。炉跡は、中央北寄りでSB04に破壊された焼土残骸として確認された。それ以外にも中央部で焼土塊が確認されており、前述の竪穴拡張前の炉跡と考えられる。壁溝は、掘り方面においては南西にて検出されたが、その他の部分では切り合いを含め明確にできなかった。覆土及び貼り床土内からは、少量の土器片が出土した。第31図154～159が図示できたもので、弥生時代後期に比定される。

SB06（第11・12・31図）

4・5－C・D区に位置する。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北約6.40m、東西6.90mを測る。SD03によって北東隅から西壁部をクランク状に切られている。掘り方はほぼ平坦であるが、北東・南西の壁際では幅20～25cm、掘り方面との比高差13cmをもって周堤状に高くなっていた。掘り方面から7～10cm程の厚さで黄褐色土を含んだ褐色土を貼り床としていた。全体に良く踏みしめられており、特にSP194周辺が硬化していた。主柱穴は、SP194・191・195・196が想定される。主柱穴間の距離は、SP194・191間で3.78m、SP195・196間で3.68mを測る。壁溝は、確認できなかった。炉とは異なった構造・形態の火処が確認されている。北壁の北西隅付近にある円形ピットで、規模は径1.12m、深さ0.33mを測る。断面形に特徴がみられ、南北の壁際に三日月状のテラスが設けられ、中央部が深くなっている。覆土には、中層で炭化物が、下層では焼土と炭化物が多量に含まれており、底面及び壁面の一部には火熱による赤化が認められた。また、北側テラスには粘版岩ブロックが置かれており、火熱による赤化が認められた。竪穴住居に伴う火処であることは間違いないが、SB01同様、古墳時代前期の一般的な炉とは明らかに形態・構造が異なる。北壁際と火処の西において、甕（第31図160・161）が床面よりやや浮いた状態で出土した。どちらも土圧により口縁が転倒し体部が破砕していた。ミニチュア土器（第31図170・171）は、どちらも覆土中、床面より浮いた状態で出土した。住居廃絶に伴う祭司行為の痕跡と考えられる。出土土器から古墳時代前期に比定される。

SB08（第13・31・32図）

5・6－B・C区に位置する。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は南北4.90m、東西5.08mを測る。掘り方は、部分的に不定形な掘り込みが認められ、そこに黄褐色土ブロックを混ぜた明褐色土を貼り床としていた。主柱穴としては、SP172・173・171・170が想定される。SP170は他の柱穴に比べコーナー寄りに位置し、また、南壁側のSP171・170に比べ北壁側のSP172・173の方が柱穴の深さが相対的に浅い。主柱穴間の距離は、SP172・173間で2.50m、SP171・170間で2.78mを測る。炉跡は、中央やや東壁寄りで認められたが、著しい硬化・赤化は認められなかった。出土遺物としては、ミニチュア土器（第32図192～195）はいずれも完形で、床面からやや浮いた状態で出土しており、SB06同様、住居廃絶に伴う祭司が想定される。その他、壷底部片（第32図182）、甕口縁部片（第32図183）、高坏口縁部片（第32図189）などが床面よりやや浮いた状態で出土した。出土土器から古墳時代前期に比定される。

SB09（第14・27図）

4・5－F・G区に位置する。東西に長軸をもった円形を呈し、規模は、東西約4.90m、南北3.88mを測る。南側の約1/3がSB01に切られている。床面はほぼ平坦で、幅20～30cm、深さ5～10cm程の壁溝が全周していた。中央やや南西寄りには石囲炉が設けられていた。石囲炉には長径30cm程の地山礫2個が遺存していたが、本来は2個以上の礫が存在した可能性が高い。炉内部には焼土ブロックが混入した褐色土・茶褐色土が堆積していた。主柱穴としては、遺存した範囲においてはSP265・264のが想定されるが、SP265は周溝内にあることから主柱穴とするにはやや疑問が残る。掘り方は、ほぼ平坦で黄褐色土を多量に含んだ茶褐色土を貼り床としており、炉周辺では著しい硬化面が確認された。覆土中並びに貼り床内からは、土器小破片が少量出土、主なものは図示した深鉢破片（第27図1～8・41）である。縄文時代中期後半に比定される。その他、土器以外の遺物として、長径65cm、幅48cm、高さ25cmを測る比較的大型の石がSP264付近、床面直上で検出された。自然石で加工面は認められなかったが、上面は扁平であった。

SB10・11・12（第7・8図）

5・6－F・G区に位置し、いずれも竪穴住居の重複が著しい箇所にて検出された。

SB10は、大半をSB03に切られていた。遺存した壁のラインはやや歪であるが、緩やかに弧を描くことから、東西に長軸をもった円形を呈すると考えられる。主柱穴は、P4・3、SP133・137が想定される。主柱穴間の距離は、P4・3間で2.45m、SP133・137間で2.35mを測る。壁溝・炉跡は検出されなった。弥生時代後期と考えられる土器片が少量出土したが、図示可能なものはなかった。

SB11は、大半をSB10に切られていた住居で、北壁の長さ4m、幅0.6m程が遺存したのみであった。壁ラインは緩やかに弧を描くことから、円形を呈するものと考えられる。遺存した部分においては、壁溝は検出されなかった。弥生時代後期と考えられる土器片が少量出土したが、図示可能なものはなかった。

SB12は、大半をSB03に切られ、SB11同様、北壁の一部が遺存したのみであった。遺存した壁ライン・壁溝から平面形を想定すると、円形を呈するものと考えられる。壁溝の外側にも壁が存在することから、拡張があったか、もしくは別の竪穴住居跡の可能性もある。時期不明の土器片が少量出土したのみで、遺物から時期比定はできないが、遺構の重複関係から弥生時代後期に比定されよう。この他、SB02・03の北側においても別の竪穴住居と考えられる遺構が存在することから、確実に確認できた竪穴住居跡7軒に加え数軒の住居が存在したと考えられる。

SB13（第15・32図）

9・10－F・G区に位置する。南北4.35m、東西5.02mを測る、東西がやや長い方形を呈す。他の遺構との重複はないが、西壁の一部が撹乱され、北西隅は調査区外へ伸びる。床面精査段階並びに掘り方

精査段階においても壁溝・炉跡は検出されなかった。主柱穴は、P1・2・3・4が想定される。主柱穴間の距離は、P1-2間で1.90m、P4-5間で2.34mを測る。P2-4は、P1-5に比べ相対的に浅くなっている。長径70cm、深さ35cmの方形を呈するP3は貯蔵穴と考えられる。掘り方は、中央部と壁際を掘り残したドーナツ状を呈し、加えて中央北東寄りには長径3.0m程の土坑状の掘り込みが見られた。ドーナツ状と土坑状の掘り方には、黄褐色土を混ぜた黒褐色土が堆積し、さらにその上に7～13cm程の厚さで黄褐色土を多量に混ぜた褐色土を貼り床としていた。覆土内より第32図196～204の土器が出土した。199・200の弥生時代後期の土器片は流れ込みで、大半は古墳時代前期に比定される。

SB14（第16・32図）

14・15－B・C区の調査区南端に位置する。南壁と西壁が調査区外へ伸びるが、遺存した範囲から、平面形はほぼ正方形を呈していたことがわかる。規模は、東西・南北ともに7.50mを測る大型の竪穴住居跡である。SB15と近接するが、他遺構との重複はない。掘り方は、中央をやや高く、その中央から壁際に向かって浅く斜めに掘り込んでいた。それらを均すように黄褐色粘土を混ぜた茶褐色土を貼り床としていた。全周する壁溝が確認されたが、炉は検出されなかった。北東隅の長径1.46mを測る方形土坑は、貯蔵穴だと考えられる。主柱穴は、SP406・407・405・404が想定される。柱穴間の距離は、SP406-407間で4.00m、SP405-404間で4.00mを測る。柱穴の覆土には、版築状の堆積は見られなかったが、径15～20cm程の柱痕が確認された。SP407からは、底部を欠損する甕（第32図214）が出土した。柱を抜き取った後、埋納されたものかもしれない。208の垂飾過半片は、北壁際にて床面よりやや浮いた状態で出土した。その他、209～213の土器が出土しており、いずれも古墳時代前期に比定される。

SB15（第17・32図）

13-14－C-D区に位置する。北西が調査区外へ伸びるが、遺存した範囲から、平面形は南北に長軸をもった円形を呈していたことがわかる。規模は、南北7.62m、東西6.10m（想定）を測る。SB14と近接するが、他遺構との重複はない。炉跡は、中央やや北寄りにあり、径50cm程の浅い皿状を呈していた。掘り方は、部分的に壁際を溝状に掘り窪めており、そこに黄褐色粘土を混ぜた褐色土・暗褐色土を貼り床としていた。炉跡周辺から南にかけては著しい硬化部分が認められた。壁溝は、確認できなかった。主柱穴は、SP514・524・520が想定される。いずれの柱穴からも版築を示す層序と、径18～20cmを測る柱痕が確認された。遺構の遺存状態は良好であったのに比べ出土遺物量は少なく、図示できたのは第32図215・216の小破片と、SP519から出土した高坏脚部片（217）である。いずれも弥生時代後期に比定される。

SB16（第18・32図）

10・11－D区に位置する。東西に長軸をもった円形を呈し、規模は東西6.00m、南北4.90mを測る。布掘りを有するSH01に切られ、東から西に向かって耕作による削平を受けていた。ほぼ平坦な掘り方に、黄褐色土ブロックを混ぜた茶褐色土を厚さ5cm程で貼り床としていた。炉跡は、中央やや南寄りで確認されたが、上面は耕作によって削平されていたため遺存状態は悪い。壁溝は、北壁から東壁、南壁にかけて確認されたが、それ以外では確認できなかった。主柱穴は、SP358・354・356・355が想定される。主柱穴間の距離は、SP358-354間で2.15m、SP356-355間で2.20mを測る。いずれの柱穴からも版築を示す層序は確認できなかったが、柱穴断面形には共通した特徴が見られた。柱穴上部径が柱穴中位から底面に比べ広くなっており、その断面形は逆凸字状を呈してた。柱抜き取りの際に上部が掘られたものと考えられる。土器小破片が少量出土したのみで、図示できたのは第32図218（注口縁部片）のみであった。弥生時代中期に比定されるが、他の小破片の多くは弥生時代後期に比定可能であることから、竪穴住居跡の時期は弥生時代後期と考えられる。

SB17（第19・32図）

9-10－D-F区に位置する。平面形は、やや歪な正方形を呈す。規模は、南北4.25m、東西4.23mを測る。布掘りを有すSH0を切っている。掘り方は、北・西壁際をやや高くし南・東壁に向かって緩やかに傾斜するように掘り込まれていた。そこに黄褐色粘土を多量に含んだ黄褐色土を貼り床としていた。床面にも掘り方同様の緩やかな傾斜が見られた。炉は、中央やや北寄りで検出されたが、遺存状態が悪く焼土範囲として確認できる程度であった。ちなみに、炉跡下のSP594は、炉並びに貼り床撤去後に検出された小穴で、SH01に伴う柱穴である。主柱穴は、SP362・367・372・369が想定される。主柱穴間の距離は、SP362・367間で2.30m、SP372・369間で2.20mを測る。出土遺物は、土器小破片が少量出土したのみで、図示できたのは第32図219（台付甕口縁部片）のみであった。弥生時代後期に比定されるが、その他土器片のほとんどは古墳時代前期に比定されることから、竪穴住居跡の時期は古墳時代前期と考えられる。

SB18（第20図）

8・9－D・E区に位置する。平面形は方形を呈すと考えられるが、北・東壁は他の溝状遺構と耕作による削平よって確認できなかった。規模は、遺存範囲から南北約4.8m、東西約4.6mと推定される。遺存した部分では、黄褐色粘土を多く含んだ茶褐色土を貼り床としていた。炉・壁溝は、確認できなかった。主柱穴は、P1・2・3・4が想定される。主柱穴間の距離は、P1・2間で、3.20m、P3・4間で2.80mを測る。土器小破片が少量出土したのみで、図示可能なものはなかった。

②溝状遺構（SD）

SD01（付図2・第36図）

調査区中央の8－E区から北西に伸び、5－C・D区にてクランクして更に北西に伸びる溝状遺構である。調査区外へ伸びるため全長は不明であるが、調査区内おいては約35mを測る。調査当初、重複するSD03と同一の溝状遺構と考えられたが、土層に明確な切り合い関係が見られることから、SD03のルートを踏襲するようにSD01が掘削されたものであることが判明した。他の遺構との重複関係においては、北端である8－E区でSB05を、7－D区で直行するSD02を、クランク部でSB06をそれぞれ切っている。溝幅には場所よって若干の開きがあり、8－E区では1.20m、クランク部では1.35mを測る。確認面からの深さは、15～20cmを測り、北端から北西に向かって緩やかに傾斜していた。断面形は浅い皿状を呈し、壁の立ち上がりも緩やかである。覆土は、黒褐色土・褐色土で、部分的に炭化物の混入が見られた。流れ込みである弥生土器・古式土師器の小破片の第32図221（壺口縁部片）などに混じって、第36図276（尾呂茶碗）・277（筒茶碗）・278（スリ鉢）が出土した。出土した陶磁器から19世紀前半頃には埋没したと考えられる。

SD02（付図2・第36図）

7－D区から南東に伸びる溝状遺構である。調査区外へ伸びるため全長は不明であるが、調査区内においては約18mを測る。土層によればSD01に切られており、後述するSD03と類似した土層が確認できることから、SD03と同一の溝であった可能性が高い。確認面からの深さは、20～45cmを測り、8－E杭から南東4m付近までは深くなるが、そこから一旦浅くなり再び南東に向かって緩やかに傾斜していた。溝幅は、耕作による削平等を考慮しなければならないが、0.8～1.6mとやや開きがある。断面形は、浅い皿状を呈す。覆土は黒褐色土を主体とするが、先述の深くなる箇所においては黄褐色土ブロックの混入が見られた。流れ込みである弥生土器・古式土師器の小破片の第32図222（壺頸部片）・223（高坏脚部）などに混じって、第36図279（手づくねカワラケ）が出土した。19世紀前半頃の埋没と考えられる。

SD03（付図2・第36図）

7－D区から北西に伸び、5－C・D区にてクランクして更に北西に伸びる溝状遺構である。前述のSD01・02との関係においては、SD01とは新旧の関係にあるが、SD02とは同一の溝であった可能性が高い。確認面からの深さは、50～75cmを測り、多少の凹凸の持ちつつ北西に向かって緩やかな傾斜が認められた。溝幅は2.0～2.4mを測り、断面形はテラス状の段差をもつ部分もあるが、概ね逆台形を呈している。覆土には、溝の北側から埋没した痕跡が見られた。黄褐色土ブロックを多量に含んだ層、黄褐色土ブロックだけの層が確認されることから、人為的に、しかも比較的短期間で埋められた可能性が高い。流れ込みである弥生土器・古式土師器の小破片の第32図224（壺口縁部片）などに混じって第36図280～287の陶磁器が出土した。陶磁器の年代から19世紀前半頃には埋没したと考えられる。

SD04（第21図）

4－C区から6－A区に展開する溝状遺構である。SD03に接し、そこから南東に伸び、さらに5－A区で方向を北に変えて調査区外へ伸びる。調査区内における長さは、約12mを測る。確認面からの深さは18～24cmで、溝幅は1.1～1.8mを測る。断面形は、浅い皿状を呈する。覆土は黒褐色土に黄褐色土が混入した層を主体としている。底面に著しい凹凸はなく、南東に向かって緩やかに傾斜している。出土した遺物は、土器・陶磁器小破片で、掲載可能なものはなかった。近世の溝であることは間違いなく、SD02とは溝幅・断面形が類似することから同時期に存在した可能性が高い。

SD06・07・08（第23図）

5－B区、SD04の南に位置する。長さ・幅の規模が共通する溝3条が等間隔に併行する。それぞの規模を示すと、SD06は全長2.38m、幅24cm～52cm、深さ10～25cm、SD07は全長2.30m、幅20～27cm、深さ12～25cm、SD08は全長2.10m、幅20～28cm、深さ12～18cmを測る。部分的にピット状の掘り込みがあるが、著しく深いものではない。後世の攪乱とも考えられたが、覆土は黄褐色土が混じった黒褐色土で比較的よくしまっていた。遺物は全く出土しなかったため時期比定は困難であるが、覆土の様相、他の近世遺構との位置関係から近世に帰属するものと考えられる。

③埋葬土坑（SF）

SF01（第22・29・33図）

7－G区に位置する、土器棺と多数の上器片を伴った埋葬土坑である。平面形は、南北に長軸をもった円形を呈する。規模は、南北2.11m、東西1.48mを測る。確認面からの深さは、最深部で52cmを測る。断面形は、短軸の東西ではやや中央が深く、壁面が急角度で立ち上がる。長軸の南北では、南壁が短軸同様急角度で立ち上がるが、北壁では緩やかに立ち上がり、舟の縦断面に類似した断面形を呈す。土器片は、平面的には土坑中央径1.2m程の範囲に集中して見られ、垂直分布では、中層である3層に集中して見られた。調査当初、上器片の多くは破片であったため、弥生時代中期の廃棄土坑と想定した。しかし、比較的大きな破片が集中する箇所では、接合の結果、第33図229（壺）が底部を欠損する以外はほぼ復元できたことから、弥生時代中期中葉に土器棺として用いられたと考えられる。土器棺と想定した場合、破片での出土状況については、弥生時代中期後半の土器片（第33図243・244・245）が混在することを勘案すると、中期後半段階で攪乱を受けたものと考えられる。その他、225～247が図示可能な土器片も含め、土器棺の造営時期は、弥生時代中期中葉に比定される。土器に混じって凹み石（第29図114）が出土している。出土土器はいずれも弥生時代中期に限られることから、当該期の石器と考えられるが、縄文時代の石器の可能性も完全には否定できない。土坑上面、中央北西寄りにおいて、炉跡が確認された。径35cmを測る円形を呈し、中央部を浅い皿状に窪ませたもので、火熱による硬化が著しい。屋外炉であるが、土坑との関係は明確にできなかった。

SF05（第 23・33 図）

7－A・B 区に位置する。平面形は、南北に長軸をもった円形を呈す。規模は、南北 3.14m、東西 1.90m を測る。北壁の一部が他の遺構に切られ、東壁の一部が調査区外へ伸びる。確認面からの深さは、53cm を測り、北壁以外は急角度で立ち上がる。底面に若干の凹凸が見られる。出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が少量出土し、図示可能なものは第 34 図 248（壺口縁部片）のみであった。土坑の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期頃と考えられる。

SF06（第 24・34・35 図）

12－A・B 区に位置する、大型土坑墓である。南端のわずかが調査区外に及び、一部が撹乱されていたが、ほぼ全容を知ることができた。平面形は、南北に長軸をもった長方形を呈す。規模は、長軸（現存長）4.65m、短軸 2.55m を測り、南端の調査区外、撹乱部の長さを勘案すると、長軸は 5.30m 程あったと推定される。掘り方は、外郭と、外郭よりも一段低く一回り小さな内郭に分けられる。外郭は確認面からの深さ 10～20cm で、内郭に向かって緩やかな傾斜が認められる。内郭の規模は、長径 4.00m、短径 1.54m を測る。内郭上面からの深さは、66～77cm を測り、内郭壁は、65° の角度で立ち上がる。外郭のコーナーは隅丸状に仕上げられているのに対し、内郭のコーナーは明瞭な角をもっている。内郭の底面は、凹凸はなく滑らかであるが、北から南に向かって傾斜が認められる。土層観察からは、遺骸腐朽後にＶ字状に大きく落ち込んだと考えられる 1 層（黒褐色土）、その両脇とその下には遺骸並びに内郭を被覆していたと考えられる黄褐色粘土を混ぜた 2 層（褐色土）～5 層（暗褐色土）に分層できる。4 層（暗褐色土）には炭化物の混入が見られた。底面に近い 6 層（暗褐色土）を精査したが、明確に棺の痕跡を示す層序は確認できなかった。したがって、棺の有無は不明である。中央やや北寄りで、茎を上に切先を床に向け壁に寄り掛けたような状態で鉄剣（第 35 図 274）が出土した。鉄剣と壁・床との間にはほとんど隙間がなかったことから、埋葬当初よりこの状態で置かれていた可能性が高い。鉄剣の遺存状態を観察すると、剣身の半ばあたりと茎尻の目釘孔のあたりに屈曲があることが確認された。おそらく遺骸腐朽後の覆土崩落の土圧によるもので、壁際に立て掛けられていたために、埋没近の茎と床付近の剣身半ばに土圧が掛かり屈曲したと考えられる。覆土中からは土器小片が少量出土したが、図示できたのは第 34 図 249（高坏脚部）のみであった。また、覆土下層土の洗浄を試みたが、玉等の副葬品は検出されなかった。古墳の主体部と比べても遜色のない規模であり、周囲を精査したが、古墳が存在した形跡はなく、この大型土坑墓のみが造られたと考えられる。

SF09（第 26・34 図）

10－E・F 区に位置する。平面形は、南北に長軸をもった不整円形を呈す。規模は、長軸 1.50m、短軸 1.28m を測る。土坑として取り扱ったが、複数のピットが重複したものと考えられる。第 34 図 250～255 の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が出土した。

SF10・11・12（第 23・35 図）

13－A 区に群在する近世の土坑墓である。同形態の 3 基の土坑墓で、SF12 は半分が調査区外へ伸びることから、3 基以外にも複数基が展開していた可能性がある。平面形は、いずれも長方形を呈す。規模は、SF10 は長径 81cm・短径 63cm、SF11 は長径 94cm・短径 73cm、SF12 は長径 120cm をそれぞれ測る。深さには違いが見られ、SF10 は 30cm、SF11 は 15cm、SF12 は 10cm を測る。いずれの土坑墓の覆土にも炭化物の混入が見られた。SF11 からは、小刀（第 35 図 275）とカワラケ（第 36 図 291・292）が出土したが、SF10・12 からの出土遺物はなかった。

④掘立柱建物跡（SH）

SH01（第25・80図）

9～11－D～F区にて検出された1間×4間の布掘り溝をもつ掘立柱建物跡である。長軸の方位は、N-7°-Eを測る。周辺遺構との新旧関係は、SB16を切り、SB17に切られている。柱穴間の距離は、SP327・346間で3.95m、SP336・354間で3.65m、SP327・328間で1.65m、SP328・329間で1.82m、SP329・344間で1.90m、SP344・336間で1.66m、SP346・594間で1.42m、SP594・327間で2.23m、SP327・373間で1.50m、SP373・354間で1.60mを測る。確認面からの深さは、SP327で70cm、SP328で50cm、SP329で52cm、、SP334で50cm、SP336で62cm、SP346で42cm、SP594で40cm、SP327で20cm、SP373で42cm、SP354で72cmを測る。西側の柱穴列はいずれも50cm以上の深さをもつが、東側の柱穴列では50cm以上を測るのはSP354のみで、他は他遺構の重複を考慮しても相対的に浅くばらつきも目立つ。布掘りが遺るのは、SP327・328間と、SP328・329間のみで、柱穴よりやや幅が狭く、確認面からの深さは、15cm程であった。すべての柱穴ではないが、SP344・336からは明瞭な版築と柱痕を示す土層が確認された。柱穴内からの出土遺物は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器小破片で、図示可能なものはなかった。建物の時期は、SB16・17との新旧関係から、弥生時代後期頃と考えられる。

SH02（第26図）

10・11－E・F区に位置する。複数の柱穴が重複するため、複数の建物が考えられるが、ここでは1間×3間の建物を示しておく。長軸の方位は、N－13°30′－Eを測る。柱穴間の距離は、SP330・361間で2.63m、SP333・335間で2.82m、SP330・SF09間で1.10m、SF09・SP331間で1.20m、SP331・333間で1.20m、SP361・334間で1.20m、SP344・342間で1.25m、SP342・335間で1.20mを測る。確認面からの深さは、SP330で32cm、SF09で32cm、SP331で36cm、SP333で46cm、SP361で45cm、SP344で32cm、SP342で48cm、SP335で56cmを測る。すべの柱穴ではないが、SP342・344からは版築と柱痕を示す土層が確認された。柱穴内からの出土遺物は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器小破片で、図示可能なものはなかった。

⑤柱穴列

柱穴列1（第26図）

11・12－D・E区に位置する。柱穴列としたが、直線的に列ぶことから、掘柱建物跡の可能性が高い。柱穴列の東には対応する柱穴列は確認されていないため、対応する柱穴列は調査区外に存在すると考えられる。ここでは柱穴列として取り扱う。柱穴列は4基の柱穴から成り、柱間3間の規模である。長軸の方位は、N－16°－Eを測る。柱穴間の距離は、SP349・350間で1.13m、SP350・351間で1.18m、SP351・352間で1.38mを測る。確認面からの深さは、SP349で24cm、SP350で32cm、SP351で30cm、SP352で18cmを測る。いずれの柱穴からも版築・柱痕を示す土層は確認されなかった。

(2) 遺　物

出土遺物は、縄文時代中期から後半にかけての土器・石器、弥生時代中期の土器、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器、古墳時代中期の鉄剣、近世の陶磁器類・小刀である。その出土量は、テンバコ（650㎜×450㎜×330㎜）13箱で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が大半を占める。以下、時代順に説明していく。

①縄文土器・石器（第 27 ～ 29 図）

今坂遺跡の調査で出土した縄文土器は、すべて破片であり、その量はテンバコ（650㎜× 450㎜× 100㎜）1 箱に満たない。そのうち縄文土器 94 点、そして、土製品 1 点と獣面把手 2 点について報告する。

今回の調査では、縄文時代の遺構としては SB09 が確認されたのみであり、また、縄文時代と考えられる包含層は、調査区全域から検出されている状況ではない。さらに、ほとんどの土器が弥生時代の遺構の覆土中からの出土であり、換言すれば撹乱された状況にある。そのため、調査区内での縄文土器の分布状況が偏る傾向もあるが、それらをもって縄文時代の遺構分布等を復元することは難しいのではないかと考えられる。ここでは SB09 からの出土土器と、その他の地点からの出土土器の 2 つに分けて記述する。土器の時期は、中期初頭から後期末と考えられるものが見られるが、断続的である。

SB09 出土土器（第 27 図）

SB09 は、石囲炉を持つ竪穴住居跡であるが、出土した土器は小破片のみであった。点数は、微細片を除き、135 点を数える。ここではそのうち 9 点を図化し報告する。**1** は薄手の土器で、くの字に屈曲している。横位の平行沈線の間に刻み目状の短い沈線を縦位に施している。施文具は半裁竹管と考えられる。色調は赤褐色で、胎土には石英、長石、金雲母が含まれる。**2** は肥厚する口縁部で、外面は直線的で、内面には鈍い稜を持つ。口縁は無文でその下に横位の連続爪形文を施す。色調は褐色で、胎土には白色粒子を多く含み、角閃石、3㎜程度の小礫が含まれる。**3** は深鉢の口縁部で、2 本の平行沈線の下に複数（2 本が確認できる）の沈線による連弧文で楕形に区画し、内側に LR の縄文を充填している。色調は橙褐色で、胎土には長石、赤色粒子、白色粒子が含まれる。**4・5・7・41** は、縦位・斜位の細い条線が施文される深鉢胴部である。**4** の形状は、やや丸みを帯び、S 字に湾曲している。色調は茶褐色で、胎土には長石、白色粒子が含まれる。**5** の条線の施文具は、半裁竹管と考えられる。色調は褐色で、胎土には石英、長石、白色粒子が含まれる。**7** も、やや丸みを帯びる形状で、器壁の摩耗が著しいが、かろうじて細い条線が見て取れる。色調は橙褐色、胎土には白色粒子が含まれ、5㎜程度までの砂礫が多く含まれる。**4** と **41** は同個体である。**6** は、やや丸みを帯び、LR（？）の縄文が施された深鉢胴部である。色調は褐色で、胎土には石英を含み、砂粒が多く含まれる。**8** は無文の胴部片であるが、胎土、焼成の状態、色調が似ており、**4・41** と同個体である可能性が高い。土器の時期は、**1** が遡ることが考えられるが、その他は概ね中期後半の範疇に収まるものと考えられる。

その他の縄文土器（第 27・28 図）

9 は、半裁竹管による横位・斜位の沈線文が特徴である。いわゆる柏座式に類似するもので、中期初頭に位置するものと思われる。色調は黄褐色で、胎土には長石、金雲母が含まれる。**10** ～ **13** は、隆帯文に沿って半裁竹管による連続する爪形文、三角押圧文が施文された胴部である。**10** は、弧を描く爪形文同士が接している部分である。色調は赤褐色で、胎土には長石、金雲母が含まれ、白色粒子が多く含まれる。**11** は器面の摩耗が著しいが、隆帯による三角形の区画文帯の下に、横位の連続する三角押圧文（2 列？）が施されたものと考えられる。色調は赤褐色で、胎土には長石、角閃石、白色粒子が含まれる。**12** は、色調は赤褐色で、胎土に長石、金雲母、3㎜程度までの砂礫が含まれ、白色粒子が多く含まれる。**13** は渦巻き状の突帯を貼付し、連続する爪形文と三角押圧文が施文されている。色調は茶褐色で、胎土には白色粒子、黒雲母が多く含まれる。**10** ～ **13** は、勝坂式と考えられる。**14** ～ **17** は、粘土紐を貼り付けた隆帯上に半裁竹管によると考えられる連続する押圧文・刺突文を施したものである。**14** は、緩やかな波状をなす口縁部である。色調は橙褐色で、胎土には長石、赤色粒子が含まれる。**15** は深鉢の胴部の上半と考えられる破片で、水平方向の高い突出の隆帯が貼付され、その下は無文である。隆帯には、半裁竹管の内皮によると思われる連続する刺突文が施されている。色調は橙褐色で、胎土に

は石英、赤色粒子、白色粒子が含まれる。**16** は平縁のわずかに外反する口縁部で、水平方向の隆帯に半裁竹管の切断部分の角を連続して押し当てている。色調は黄褐色で、胎土には石英、赤色粒子が含まれる。**17** は欠損・摩耗が著しく、端部も摩耗しているが、図化したような口縁部であると考えた。器面は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁付近で内側に屈曲する。外面には垂直方向の直線的な隆帯が貼付されており、隆帯上は連続する刺突文が施されている。さらに、内面にも「)」「(」状に緩やかに弧を描くように粘土紐を縦方向に2本貼り付けた貼付文が見られ、半裁竹管内皮によると考えられる連続する押圧文を施している。貼付文は欠損しているが、長さ6cmはあったことが確認できる。胎土には3mm程度までの長石と砂礫が多く含まれている。**18** は波状をなす口縁部で、口唇に沿うように幅約2.3cmの隆帯を貼付し、さらに幅約5mmの粘土紐を半行方向に上下に貼付し、口唇付近に斜めの刺突文、粘土紐の間に半裁竹管によると考えられる縦方向の刻目状の押圧文を施している。色調は淡褐色で、胎土には5mm程度までの長石・砂礫が多く含まれ、黒雲母も含まれる。**19** は、三角形に高く突出した口縁部である。口縁端部は内に湾曲し、口唇はつまみ出されている。頂点部分は厚く肥厚している。片側だけに口縁端部に沿って施文具の角による2列の連続刺突を施し、口縁の形状に沿って連続刺突と沈線により区画された内に RL（？）の縄文を施文している。色調は茶褐色で、胎土には長石と3mm程度までの砂礫が含まれる。**20** ～ **24** は、隆帯文が施されたものである。**20** は、肥厚する口縁部で、弧状の太い隆帯と太い沈線により文様が施されている。色調は橙褐色で、胎土には長石、白色粒子が含まれる。**21** は、弧状の隆帯文が施された胴部である。色調は褐色で、胎土には金雲母が含まれ、白色粒子が多く含まれる。**22** は、緩い弧を描く幅約2cmの太い隆帯が平行に貼付されている胴部である。色調は褐色で、胎土には長石、角閃石が含まれる。**23** は摩耗が著しいが、弧状の隆帯が施された胴部である。素地の接合部分に段があり、器面は角度を垂直方向に変えて立ち上がってゆく。色調は褐色で、胎土には5mm程度までの長石、砂礫が多く含まれ、金雲母が含まれる。**24** は、厚い器厚の胴部片で隆帯の部分から上部が欠損しており、その下には LR の縄文が施されている。色調は褐色で、胎土には長石、輝石、赤色粒子が含まれる。**25** は、薄手の器厚の口縁部である。口縁端部と約1.5cm下に、緩やかに蛇行するような水平方向の沈線が施されている。色調は暗茶褐色で、胎土には長石が含まれる。**26** ～ **31** は、渦巻文等の沈線文が施文されたものである。**26** は破片の下端に隆帯が剥がれた痕跡がある胴部で、沈線で渦巻文を施文し、RL の縄文を充填している。色調は茶褐色で、胎土には長石がやや多く含まれる。**27** は摩耗が著しい胴部であるが、急な弧を描く沈線文が残る。色調は黄橙色で、胎土には長石が含まれる。**28** は胴部で、地文に LR（？）の縄文を施文し、斜位の短い沈線や、浅い沈線による、つぶれたような渦巻き状の文様を描いている。色調は橙褐色で、胎土には赤色粒子、5mm程度の小礫が含まれる。**29** は摩耗が進んだ胴部で、一部に縄文が残っており、地文に縄文が施されていたと考えられる。上下に向かい合うような「U」字、「A」字状の沈線文が施されている。色調は褐色で、胎土には長石が含まれる。**30** は外反する胴部で、竹管によると考えられる幅約5mmの「∩」字の沈線文が施文されており、内側は無文であるが、外側には沈線が辛うじて残っており、沈線間に LR の縄文を充填している。色調は茶褐色で、胎土には石英、角閃石、白色粒子が含まれる。**31** は胴部で、竹管によると考えられる幅約5mmの沈線による渦巻文を施文した後、RL の縄文を施文している。色調は褐色で、胎土には3mm程度までの砂礫が多く含まれる。**32** ～ **34** は胴部下半と考えられるもので、沈線による懸垂文が施文されている。**32** は丸みのある胴部で、RL の縄文を施文後、ごく浅い2本の沈線による懸垂文を施文している。色調は褐色で、胎土には石英、白色粒子、3mm程度の小礫が含まれる。**33** はやや丸みのある胴部で、摩耗が著しいが、地文に LR の縄文を施し、2本のごく浅い沈線による懸垂文を施文している。懸垂文内は無文である。色調は橙褐色で、胎土には金雲母が含まれ、長石、砂粒が多く含まれる。**34** は外反する胴部で、LR の縄文を施文した後、2本の浅い沈線による懸垂文を施している。色調は褐色で、胎土には金雲母が少量含まれ、長石、1cm程度の小礫が含まれ、白色粒子が多く含まれている。**35** と **36** は、結節縄文が施された胴部である。**35** はやや丸みのある胴部で、斜位の格子目状の条線文と、結節縄文

による懸垂文を施文している。また、懸垂文の隣には、欠損しているためはっきりしないが、短い単位の弓状の沈線文が存在する。色調は暗褐色で、胎土には長石、赤色粒子が含まれる。**36**は、2本の結節縄文による懸垂文が施されている。色調は褐色で、胎土には石英、白色粒子が含まれる。**37**～**40**は、半裁竹管によると考えられる条線を施文したものである。**37**は端部がやや肥厚し外反する口縁部で、細い縦位の条線が端部から施文されている。色調は褐色で、胎土には長石が含まれ、白色粒子が多く含まれる。**38**は弱く外反する口縁部で、縦位の条線が施文されている。色調は褐色で、胎土には長石、白色粒子、赤色粒子、1cm程度までの小礫が含まれる。**39**はやや丸みのある薄手の胴部で、縦位の条線が施文されている。色調は暗褐色で、胎土には金雲母が少量含まれ、白色粒子が含まれる。**40**は外反する胴部で、縦位・斜位の条線が施文されている。色調は黄褐色で、胎土には黒雲母が少量含まれ、長石、白色粒子が含まれる。**42**は、無文の胴部である。色調は黄橙色で、胎土には長石、砂粒が多く含まれる。**43**と**44**は、山型の波状口縁で沈線文が施文されている。**44**は、端部がやや肥厚する。どちらも口縁に沿って沈線を施文しているが、頂点で施文具が止まる。そして、**43**は渦巻き状の沈線文、**44**は端部の沈線に沿った平行沈線を施文している。**43**の色調は茶褐色で、胎土には長石、白色粒子、金雲母が含まれる。**44**の色調は淡褐色で、胎土には赤色粒子が含まれ、3mm程度までの砂礫がやや多く含まれる。**45**は、内面が緩い「S」字状に湾曲する胴部である。横位の沈線が引かれた上部に短い単位の横位の沈線をランダムに施文している。色調は暗褐色で、胎土には長石、赤色粒子が含まれる。**46**は平縁の口縁部で、口縁と平行する沈線の下部にLRの縄文を施文している。色調は灰褐色で、胎土には赤色粒子が含まれる。**47**は、薄手な胴部である。破片上端は貼付された隆帯が剥がれた痕跡がある。その下部には水平方向の沈線との間にLRの縄文が施文されているようだが、施文のタイミングが遅かったためか、はっきりしない。色調は褐色で、胎土には石英、白色粒子が含まれる。48は深鉢の胴部である。平行する沈線による同心円的な文様を施し、沈線間は交互に無文とRLの縄文の充填を行っている。色調は黄橙色で、胎土には長石が含まれる。**49**は、摩耗が著しい胴部である。沈線により「T」字状に区画された内側に縄文を施文している。色調は淡褐色で、胎土には赤色粒子が含まれ、5mm程度までの砂礫が多く含まれる。**48**と**49**は、後期中葉と考えられる。**50**は、端部が肥厚する口縁部である。LRの縄文を施文した後に、沈線により横位の鋸手状の区画文としているように見える。その外側は無文である。色調は橙褐色で、胎土には石英が少量含まれ、長石が含まれ、赤色粒子が多く含まれる。**51**は、摩耗が進んでいる胴部である。幅約5mmの平行沈線（連弧状か。沈線は頂点で施文具を止めており、左から右方向へ引かれている）を施文している。沈線間にはLRの縄文が施文されている。色調は褐色で、胎土には3mm程度までの小礫が含まれる。**52**は胴部で、沈線による区画文の内側にLRの縄文を充填している。沈線外は無文である。色調は淡褐色で、胎土には赤色粒子、5mm程度の小礫が含まれる。**53**は、やや強い丸みのある胴部である。弧を描く沈線と横位の丸い3つの刺突による文様が施文されている。刺突及び沈線の施文は巻き貝を使用している可能性がある。また、刺突のある区画には一部分にLRの縄文が施文されている。後期後葉～後期末の凹線文系の土器と考えられる。色調は暗褐色で、胎土には白色粒子、5mm程度の小礫が含まれる。**54**は、口縁部で横位に連続すると考えられる「∩」字状の沈線文が施されている。色調は褐色で、胎土には長石、白色粒子が含まれる。**55**は内側に強く湾曲し、さらに口唇端部を内折している口縁部である。口縁に見られる横位の押圧文は、親指の指頭によると考えられる。湾曲部分の外面には稜が見られる。色調は褐色で、胎土には長石が含まれ、白色粒子が多くが含まれる。**56**～**58**は、同一個体と考えられる。**56**と**57**が口縁部で、**58**が胴部である。胴部から外反して立ち上がり、口縁端部は内側に屈曲し鍔状になっている。屈曲部分の外面には水平の沈線が引かれ文様帯を区画し、その内側には上下に刺突した穴を沈線でつなぐ文様を規則的に連続して施文している。施文は直径約0.3cmの棒状（もしくは竹管）の施文具による。**58**の胴部は口縁に施された横位の文様帯を縦位に置き換え施文している。また、文様帯にはRLの縄文が施されている。**56**～**58**の色調は褐色で、胎土には白色粒子、長石、角閃石が含まれ、金雲母が少量含まれている。**59**は、摩耗が著し

い厚手の口縁部である。器面は外反から垂直方向に屈曲し端部は平らに仕上げている。屈曲部の外面には稜が見られる。口縁には摩耗のためはっきりしないが、横位に連続する刺突文（施文は二枚貝の端部か櫛状の施文具による？）があり、円形の貼付文が2か所に見られる。色調は淡黄褐色で、胎土には3㎜程度までの小礫が含まれる。**60**は胴部で、ごく浅い沈線の弱い施文による同心円文が観察される。色調は橙褐色で、胎土には長石、白色粒子が含まれる。**61**は平縁の口縁部で、口縁と平行する幅約5㎜の沈線が施文されている。色調は赤褐色で、胎土には長石、白色粒子が含まれる。**62**は摩耗著しい口縁部で、口縁は肥厚しており波状を呈する可能性がある。半裁竹管端部によると考えられる水平方向の沈線が施されている。色調は黄橙色で、胎土には長石、白色粒子、赤色粒子が含まれる。**63**は胴部で、破片上端にわずかに沈線の痕跡が残る他は無文のものである。色調は黄褐色で、胎土には砂粒が多く含まれる。**64**は緩やかに波状を呈する口縁部で、端部からRLの縄文が施されている。色調は赤褐色で、胎土には石英が含まれる。**65**は平縁の口縁部で、口縁を肥厚させている。器面は摩耗しているが、幅約5㎜の縄文を施している。色調は灰褐色で、胎土には赤色粒子、5㎜程度の小礫が含まれる。**66**は摩耗が著しい無文の口縁部で、口縁端部は肥厚し下に行くに従い薄く造られている。色調は黄褐色で、胎土には長石、赤色粒子、黒色粒子が含まれる。**67**は器面の摩耗が進む口縁部で、口唇の厚さは一定ではない。LRの縄文が施文されている。色調は褐色で、胎土には3㎜程度の小礫が含まれる。**68**は口縁部で、RLの縄文を施したうえで、施文具の角を使った横位に連続する沈線文を斜位に施している。さらに、内面にも口縁端部から約3㎝程度下までRLの縄文を施している。色調は褐色で、胎土には赤色粒子、5㎜程度までの小礫が含まれる。**69**～**77**は胴部片で、**74**以外は縄文が施されている。**69**は著しく摩耗しているため、撚りの方向がはっきりしない。色調は茶褐色、胎土には長石が含まれ、白色粒子が多く含まれている。**70**は、粗い繊維で撚られたLRの縄文が施されている。色調は褐色、胎土には長石、赤色粒子、白色粒子、5㎜程度の小礫が含まれる。**71**は摩耗が著しい胴部で、RL（？）の縄文が施されている。色調は赤褐色、胎土には石英、金雲母が含まれ、白色粒子が多く含まれる。**72**は、LRの縄文が施されている。色調は赤褐色、胎土には石英、5㎜程度までの砂礫が含まれる。**73**は摩耗が著しいが、RLの縄文が施されている。色調は褐色、胎土には白色粒子が多く含まれる。**74**は、薄手の胴部である。二枚貝の腹縁を使ったと考えられる横位・斜位の文様が施こされている。色調は暗褐色、胎土には砂粒が多く含まれている。**75**は摩耗が著しいが、LR（？）の縄文が施されている。色調は褐色で、胎土には金雲母、角閃石、輝石が含まれ、砂粒が多く含まれる。**76**はやや丸みがある胴部で、LRの縄文が施される。色調は褐色で、胎土には長石、金雲母、赤色粒子、5㎜程度の小礫が含まれる。**77**は幅約5㎜の縄文が施されている。色調は褐色で、胎土には長石、赤色粒子が含まれる。**78**は底部に近い破片と考えられ、文様は縦位・横位・斜位のランダムな条痕である。色調は褐色で、胎土には3㎜程度の小礫が含まれる。**79**～**88**は、無文の口縁部である。**79**は摩耗が著しいが、外面には稜がある。色調は褐色で、胎土には長石が含まれる。**80**は、器面の成形が雑で凹凸が見られる。色調は暗褐色で、胎土には石英が含まれる。**81**は、口縁に粘土を横方向に貼り付け稜をつくっている。色調は褐色で、胎土には長石が含まれ、砂粒が多く含まれる。**82**は弧のカーブが強く、小振りな土器と考えられるが、器面及び口縁の成形が雑で凹凸が見られる。色調は暗褐色で、胎土には長石、5㎜程度の小礫が含まれる。**83**は内湾し、口唇はやや肥厚が見られる。色調は褐色で、胎土には赤色粒子、5㎜程度の小礫が含まれる。**84**は薄手の器壁で、やや外反する口縁部である。色調は褐色で、胎土には金雲母が少量含まれ、砂粒が多く含まれている。**85**はやや内湾し、内傾する。口縁は折り返しにより肥厚させている。色調は褐色で、胎土には石英、赤色粒子、5㎜程度までの小礫が含まれる。**86**は内湾する口縁で、口唇は平らになでられている。色調は暗褐色で、胎土には5㎜程度の小礫が含まれる。**87**は摩耗が著しいが、口唇は細くすぼまる断面形である。色調は褐色で、胎土には長石、5㎜程度の小礫が含まれる。**88**は摩耗著しく、口縁は内湾し、端部は肥厚している。色調は淡黄褐色で、胎土には3㎜程度の小礫が含まれ、赤色粒子が多く含まれる。**89**～**91**は、口縁部把手である。**89**は、摩耗が著しい環

状の把手である。貫通している穴は、棒状のものを入れておき成形した後に、それを抜いていることが考えられる。突出部分の裏から左右それぞれの端部に沿って沈線が引かれている。色調は暗褐色で、胎土には金雲母が含まれ、長石、5mm程度までの砂礫が多く含まれる。**90** は、断面形が逆三角形を呈する。器面は摩耗、欠損が著しく、造形は雑である。頂部は皿状の凹みになっている。外傾正面には縦に粘土紐を貼付し楕円形の連続刺突を加えている。側面にも粘土紐を貼付しており、さらに刺突を加えているように思えるが、造りが雑で磨耗・欠損もあるため、はっきりとしない。色調は黄橙色で、胎土には石英、長石、赤色粒子、3mm程度の小礫が含まれる。**91** は、瘤状を呈する把手である。器面は摩耗、欠損があり、成形は雑である。瘤状の部分には刺突による凹みがある。図示したように外側を向くものと考えたが、刺突部分が真上を向く形態のものである可能性がある。色調は橙褐色で、胎土には石英、赤色粒子が含まれ、3mm程度までの砂礫が多く含まれる。**92** ～ **94** は、底部である。いずれも器面には摩耗、欠損がある。底部に圧痕は見られない。**92** は、底径が推定で 11.6cm を測る。色調は黄橙色で、胎土には長石、赤色粒子が含まれる。**93** は底径が推定で、11.5cm を測る。色調は褐色で、胎土には長石、赤色粒子、黒色粒子が含まれる。**94** は底径が推定で、9.0cm を測る。色調は黄橙色で、胎土には石英、長石、赤色粒子、5mm程度の小礫が含まれている。

土製品・獣面把手（第 28 図）

95 は、7－C・D 区で包含層中から出土した土製円盤である。今回の今坂遺跡の調査において土製円盤の出土はこの 1 点だけである。形状は楕円形を呈し、長径は 3.8cm、短径 3.4cm、厚さ 1.1cm を測る。同心円を描くような 4 条の沈線が施されている。色調は褐色で、胎土には長石、黒雲母が含まれ、砂粒が多く含まれる。**96** と **97** は、獣面把手である。いずれも器の内側を向くように付けられていたと考えられる。ちなみに、獣面把手の出土は、掛川市城で初めてである。**96** は、6・7－C・D 区 SB07 の土層観察用ベルトから出土している。粘土をつまみ出して造られており、頭部は稜となって突き出た顔の前面につながっている。内面（獣面の正面）方向からの刺突により目を表現している。造形は稚拙に感じられる。突き出た顔で、目が 2 つあるという印象の強い情報のみが単純に表現され、写実的な表現が欠落していると思われ、何を象ったものなのかの特定は難しいが、あえて言うなら鳥だろうか。色調は黄褐色で、胎土には赤色粒子、径 5mm程度の小礫が含まれている。**97** は、8－B 区 SP219 から出土している。波状を呈する口縁端部を内側に 90 度屈曲させ、波状の頂点に獣面を付けている。正面から見た形状は逆台形、上から見た形状は三角形を呈する。刺突による目は大きく開けられ、頂部にも同じくらいの大きさの凹みがある。また、目の間の突き出た部分には、細い棒状工具の刺突により左右それぞれ 3 つずつ穴が開けられている。穴は上の 2 つが若干大きめに開けられている。鼻の穴と口の表現なのだろうか。外面（背面）には LR の縄文が施されている。造形は、**97** と同様に稚拙さが感じられる。さらに、何を象ったものなのかの特定も難しい。大きな目とその間に突き出た鼻、三角形の頭が特徴としてあるが、蛇（マムシ）、蛙、フクロウ、猪等いろいろな要素が混ざり合っているように思える。色調は赤褐色で、胎土には長石、赤色粒子、白色粒子が含まれ、3mm程度までの砂礫が多く含まれる。

石器（第 29 図）

縄文時代の石器 16 点について報告する。石器も縄文土器と同様で、数量は多くない。

98 ～ **102** は、石鏃である。**98** は、黒曜石製の凹基無茎鏃である。抉りは浅くやや偏る三角形を呈する。法量は最大長 1.43cm、最大幅 1.18cm、最大厚 0.22cm、重量 0.25 g である。**99** は、黒曜石製の凹基無茎鏃である。抉りには偏りがある。先端は欠損している。法量は最大長 1.72cm、最大幅 1.06cm、最大厚 0.28 cm、重量 0.4 g である。**100** は、黒曜石製の平基無茎鏃である。偏りはあるが、水滴に近い形態を呈する。法量は最大長 1.53cm、最大幅 1.17cm、最大厚 0.31cm、重量 0.55 g である。**101** は、頁岩製の凹基無茎鏃である。先端は大きく偏る。法量は最大長 2.12cm、最大幅 1.78cm、最大厚 0.39cm、重量 1.15 g であ

る。**102** は頁岩製の平基無茎鏃である。平面形態は五角形を呈する。未製品ではないかと考えられる。法量は最大長 2.47cm、最大幅 2.02cm、最大厚 0.77cm、重量 3.6 g である。**103** は、黒曜石製の石匙である。形態は横長の横型で、つまみは大きく片側に寄る。刃は両刃である。法量は最大長 1.21cm、最大幅 2.41cm、最大厚 0.32cm、重量 0.65 g で、非常に小型なものであり、つまんで使うにしても実用向きではないと思われる。ミニチュアもしくは石製模造品といわれるものかもしれない。**104** は、頁岩製の石匙である。形態は横型で、つまみは中央からやや片側に寄る。刃は片刃である。法量は最大長 3.21cm、最大幅 4.31cm、最大厚 0.6cm、重量 7.45 g である。**105** は、頁岩製のスクレーパーである。片面は大部分で自然面を残している。刃は片側から付けている。法量は最大長 5.54cm、最大幅 4.55cm、最大厚 1.79cm、重量 32.15 g である。**106** は、砂質頁岩製の打製の石器である。やや長い四角形を呈し、打製石斧に近い印象があるが、かなり薄い造りである。法量は最大長 5.17cm、最大幅 4.26cm、最大厚 0.82cm、重量 22.05 g である。**107** ～ **110** は、石錘である。**107** は、砂岩製の打欠石錘である。扁平な石を使っている。法量は最大長 4.85cm、最大幅 2.65cm、最大厚 0.75cm、重量 15.3 g である。片方の糸かけ部分は大きく欠けており、欠損したものと思われる。**108** ～ **110** は、切目石錘である。**108** は、砂岩製で、法量は最大長 5.56cm、最大幅 3.89cm、最大厚 1.82cm、重量 51.1 g である。**109** は砂岩製で、扁平な石を使っている。法量は最大長 4.85cm、最大幅 4.56cm、最大厚 1.15cm、重量 37.25 g である。片面の糸かけ部分が欠損していている。**110** は粘板岩製で、法量は最大長 6.02cm、最大幅 3.84cm、最大厚 2.1cm、重量 71.1 g である。一部に欠損が見られる。**108** ～ **110** の石錘は 4 点とも 7 － C・D 区包含層から出土している。**111** と **112** と **114** は、凹石である。**111** と **112** は、砂岩製で手に持って使うタイプである。**111** は、平面形が円形のものである。凹みは表裏両面に 1 個ずつ見られる。また、両面は磨られているようであり、さらに周縁部には敲打痕があることから、磨石、敲石の機能を併せ持つものと考えられる。法量は最大径 8.0cm、最大厚 3.4cm、重量 270 g である。**112** は約 1/2 が欠損していると思われるもので、法量は現状で、最大長 5.7cm、最大幅 6.0cm、最大厚 4.6cm、重量 187 g である。凹みは、表裏両面に 1 個ずつ残る。**114** は、砂岩製の置いて使うタイプのものである。破損しているが、現状で法量は最大長 18.9cm、最大幅 16.1cm、最大厚 7.2cm、重量 2.0kgである。凹みは、頂部に 1 個見られる。なお、**114** も裏面は凹みは浅いが、広い範囲で滑らかであることから磨面の可能性があり、石皿としての使用もあったものと考えられる。**113** は、石皿である。破損しているが、法量は現状で最大長 17.5cm、最大幅 11.2cm、最大厚 5.9cm、重量 1.9kgである。磨面は、表面だけに見られ皿状に凹んでいる。他の面は使われた形跡がない。

②弥生土器・古式土師器（第 30 ～ 34 図）

115 ～ **127** は、SB01 出土である。**115** は広口壺の口縁部片で、肩部にかすかにミガキが確認できる。**116** は壺の頸部片で、内外面にハケが施される。**117**・**118** は、壺の底部片である。**119** ～ **121** は S 字状口縁甕の口縁部片で、いずれも口縁の屈曲は弱く、立ち上がりが短い。**122**・**123** は台付甕の脚部片で、**123** には内外面にハケが施される。**124** ～ **127** は、高坏の脚部片である。**124**・**125** には、ミガキが確認できる。**126**・**127** は、円窓をもつ。

128 ～ **133** は、SB02 出土である。**128** は壺の胴部片で、竹管文とハケが施される。**129**・**130** は、壺の底部片である。**131** は台付甕の口縁部片で、幅広のハケが施される。**132** は台付甕の脚部片で、内外面ともハケが施される **133** は高坏の口縁部片で、端部のキザミは小さい。

134 ～ **138** は、SB03 出土である。**134** ～ **136** は、壺口縁部片である。**134** は端部が折り返され、内面には櫛押し引き文が施される。**135** は、外面には端部に細かいキザミとハケを、内面には櫛押し引き文が施される。**136** は折返口縁を呈し、端部にキザミが施される。**137**・**138** は台付甕の口縁部片で、どちらも明瞭なキザミと幅広のハケが施される。

139 ～ **153** は、SB04 出土である。**139** は小型壺で、口縁部を欠損する。頸部から胴上半にかけ櫛刺

突羽状文が3段に亘って施され、下端には擬横圧線文が施される。胴下半では最大径の稜線を堺に上部にハケ、下部にミガキが施される。内面では口縁部にハケが施される。**140**～**144**は、いずれも折返口縁壺の口縁部片である。**140**は、棒状浮文が施される。**141**は外面にキザミを、内面には縄文と竹管文が施される。**142**～**144**は単純に折り返されたもので、施文はみられない。**145**は小型壺の頸部片で、縄文が施される。**146**は壺の底部片で、ハケをナデ消している。**147**・**148**は、高坏の口縁部片である。**147**は、かすかにキザミが確認できる。**148**は、外面に縄文を、内面にはミガキが施される。**149**は、台付甕の口縁部片である。端部には、比較的明瞭なキザミが施される。**150**～**151**は、台付甕である。**151**と**152**は同一個体で、口縁部を欠損する。胴部はやや摩滅しているが、ハケが確認できる。胴部内面には板状工具によるナデが施される。脚部の内面にはハケとナデが施される。**151**は、脚部を欠損する。外面と口縁内面にはハケが、胴部内面には板状工具によるナデが施される。口縁端部には、キザミが施される。**153**は台付甕で、胴下半を欠損する。全体に摩滅しているが、胴部外面にはハケが確認できる。外面には、スス痕と炭化物の付着が認められる。

154～**159**は、SB05出土である。**154**は小型壺の口縁部片で、比較的細い頸部を呈す。**155**は、壺の口縁部片である。**156**は壺の胴下半片で、ハケを底部周辺でナデ消している。**157**・**158**は、壺の底部片である。**159**は台付甕の脚部片で、外面にはハケ、内面にはナデが施される。

160～**171**は、SB06出土である。**160**～**163**は、壺の口縁部片である。**160**は口径25cmを測る大型の壺で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部を内側に折り返している。器面の摩滅が著しいため、調整痕は確認できなかった。また、出土時に胴部片も遺存したが、脆弱で復元できなかった。**161**は、折返口縁壺である。頸部以下は、ハケ調整の後ナデ消しされている。**162**は口縁端部にキザミ、口縁部にはハケが施される。**163**は口縁が外反して立ち上がり、丁寧に横ナデされている。**164**は頸部片で、比較的垂直に立ち上がることから、複合口縁を呈すものであろう。**165**～**168**は、壺の底部片である。**167**にはハケ目が認められる。**169**はS字状口縁甕の口縁部片で、口縁の立ち上がりが短い。**170**・**171**は、手づくね土器である。内外面に指頭痕が明瞭に残る。

172～**176**は、6・7－D・E区から出土した土器である。当初、SB07として扱ったが、遺構としての痕跡が不明であったため、出土土器のみを一括として掲載する。**172**は小型壺の頸部から胴上半片で、肩部に縄文を、それ以下ではハケが施される。**173**・**174**は、壺の底部片である。**175**・**176**は、台付甕の脚部片である。**175**の内面にはハケが施される。**176**の外面にはハケ、内面にはナデが施される。

177～**195**は、SB08出土である。**177**は、折返口縁壺の口縁から頸部片である。**178**は、壺の頸部片である。**179**～**182**は、壺の底部片である。**181**は、ハケ調整の後ナデ消しされる。**182**は、胴下半にミガキ調整前のハケ目が確認できる。**183**～**186**は、甕の口縁部片である。**183**は、口縁内外面を丁寧に横ナデし、胴部では内外面ともにハケが施されるが、外面の方がハケ目が細かい。**184**～**186**は、いずれも丁寧に横ナデが施されている。**187**はS字状口縁甕の口縁部片で、肩の張りが強く、口縁部の屈曲は弱く、立ち上がりも短い。**188**は、高坏の口縁部片である。口縁端部に縄文とキザミを施し、坏部には細かいハケが施されている。内面にはミガキが施される。**189**は、高坏の坏部片である。内臀しながら立ち上がるタイプで、全体に摩滅が著しいが、外面の一部に炭化物の付着が認められ、内面ではわずかにミガキが確認できる。**190**は、高坏の接合部片である。**191**は小型鉢の口縁部片で、内外面とも丁寧にナデられている。**192**～**195**は、手づくね土器である。いずれも指頭とヘラ状工具による調整痕が明瞭に残る。**192**と**193**では、更にナデが施される。

196～**204**は、SB13出土である。**196**は、複合口縁壺の口縁部片である。頸部は直立気味で、口縁部は外反させて粘土を貼り付け複合部を形成している。**197**は、折返口縁壺の口縁部片で、端部には キザミが施される。**198**は、壺の底部片である。**199**は甕の口縁部片で、端部下にはハケが施される。**200**は台付甕口縁部片で、明瞭なキザミと幅広のハケが施される。**201**は台付甕の胴上半片で、全面にハケが施されるが、頸部ではナデ消している。**202**は台付甕の脚部片で、外面にはハケ、内面にはナ

デが施される。端部は、内外面ともに横ナデされている。**203** は高坏の脚部片で、ミガキが施され、円窓が確認できる。**204** も高坏の脚部で、円窓が確認できる。

205 ～ **214** は、SB14 出土である。**205** は、いわゆる棒ヶ壺タイプの複合口縁壺の口縁部片で、頸部に三角突帯を巡らせ、一次・二次口縁ともに外反させている。口縁の内外面には櫛刺突羽状文が施される。**206** は折返口縁壺の口縁部片で、端部にキザミが施される。**207** は、返壺の折口縁部片であろうか。口縁端部の折返しは弱い。**208** は壺の胴下半部片で、全体に摩滅しているが、ハケとナデが確認できる。**209** ～ **211** は、壺の底部片である。**212** は、S 字状口縁甕の底部である。**213** は、小型鉢であろうか。口縁部は、歪んでいる。**214** は台付甕で、脚部を欠損する。口縁部内外面は丁寧に横ナデされる。肩部にはナデ、胴部にはハケ、調整が分けられている。胴下半ではハケ調整の後、一部ナデ消されている。

215 ～ **217** は、SB15 出土である。**215** は折返口縁壺の口縁部片で、口縁端部にキザミが施される。**216** は壺の口縁部片で、端部の内外面及び口頸部にそれぞれキザミが施される。**217** は高坏の脚部片で、突状の接合部には櫛刺突羽状文が施され、脚端部を屈曲させている。

218 は、SB16 出土の条痕系甕の口縁部片である。比較的細かい条痕が施され、端部にはヘラ状工具によるキザミが施される。

219 は、SB17 出土の台付甕の口縁部片で、端部にはかすかにキザミが確認できる。

220 は、SB18 出土の壺の口縁部片で、外反しながら開き、内外面ともに横ナデが施される。

221 は、SD01 出土の折返口縁壺の口縁部片である。

222 と **223** は、SD02 出土である。**222** は壺の口縁部片で、櫛横圧線文と櫛刺突羽状文が施される。**223** は高坏もしくは器台の脚部片で、丁寧なミガキが施されている。

224 は、SD03 出土の複合口縁の壺の口縁部片で、外反しながら開き、内面にはミガキが確認できる。

225 ～ **247** は、SF01 出土である。**225** は壺の口縁部片で、口縁端部でやや内傾する。頸部に櫛横線文が施される。**226** は壺の口縁部片で、外面はハケと口縁端部にキザミを施し、内面には櫛扇形文が施される。**227** は壺の胴部上半片で、櫛横線文が施される。**228** は壺胴部下半片で、外面には粗い条痕が施される。**229** ～ **240** は、条痕系の甕である。**299** は、底部を欠損する以外はほぼ完全に遺存していた。緩やかに外反しながら口縁に至り、口縁端部に垣面を設け、そこに指頭による押圧文が施される。外面には、浅い斜位の条痕がやや粗く施される。内面はヘラ状工具によるナデが施される。**230** は頸部から胴上半部片で、上半部には縦・斜位の条痕が施されるが、下半部にはハケが施される。**231** は口縁部から胴部上半片で、頸部でやや強めに外反させ、端部にキザミを施している。頸部周辺にはハケが施され、胴上半以下には粗い条痕が施される。**232** は口縁部から頸部片で、口縁端部にはキザミが施され、胴部には粗い条痕が施される。**233** は口縁部片で、外反の度合いは弱く、口縁端部のキザミと胴部の条痕は粗い。**234** ～ **240** は、甕の口縁部片である。**234** は、口縁端部にヘラによる明瞭なキザミが施され、外面にはハケが施される。**235** は、口縁端部にヘラによる大きく明瞭なキザミ（指頭による押圧文？）が施され、外面には細かな条痕が施される。**236** も **235** 同様、大きなキザミ（指頭による押圧文？）が施され、外面には粗い条痕が施される。**237** は、小さな端部が設けられ、そこに指頭による押圧文が施され、外面には粗い条痕が施される。**238** は、端部に施文されることなく、内外面に条痕が施される。**239** は、端部がやや波状を呈すことから、指頭による弱い押圧文が施されていた可能性がある。内外面ともにハケが施される。**240** も端部の施文はなく、外部に粗い条痕が施される。**241** と **242** は甕の底部片で、外面には条痕が施される。**243** ～ **246** も甕の口縁部片であるが、台付甕の可能性が高い。**243** は、口縁端部にキザミが施される。**244** は口縁端部にキザミが施されるが、キザミは小さくやや粗い。内外面にハケが施される。**245** のキザミも粗い。外面にはハケが施される。**246** は、粗いキザミが施され、外面には条痕が確認できる。**133** は手づくね土器で、口縁部が開く。

248 は、SF05 出土の折返口縁壺の口縁部片である。内外面とも丁寧に横ナデされる。

249 は、SF06 出土の高坏脚部片である。

250～255は、SF09出土である。**250**は、壺の口縁部片である。外反する屈曲をもち、その外面には縄文施文後、竹管文を巡らせている。屈曲部の下端にはキザミが施される。**251**は壺の底部片で、外面にはハケが施される。**252**は台付甕の口縁部片で、口縁端部には明瞭なキザミが施され、口縁部には幅広のハケが施される。**253**も台付甕の口縁部片で、内外面ともにハケが施される。**254**は台付甕の接合部で、外面にはハケが施される。**255**は、台付甕の脚部片である。

256は、SP23出土の壺肩部片で、櫛波状文と櫛刺突羽状文が施される。

257は、SP46出土の台付甕口縁部片で、端部には細かいキザミが施され、外面にハケが施される。

258は、SP99出土の折返口縁壺の口縁部片である。

259は、SP258出土の台付甕の口縁部片で、端部には明瞭なキザミが施され、内外面に幅広のハケが施される。

260は、SP316出土の折返口縁壺の口縁部片で、端部には指頭による押圧文が施される。

261と**262**は、SP334出土である。**261**は、壺の底部片である。**262**は壺の口縁部片で、屈曲して立ち上がる。ハケ目が確認できる。

263は、SP263出土のS字状口縁甕の口縁部片である。S字の屈曲は弱い。

264・**265**は、どちらもSP509出土のS字状口縁甕の口縁部片である。**264**は、S字の屈曲が弱く短い。**265**は、S字の屈曲が弱い。

266は、SP266出土の壺の底部片である。ハケ調整後、ナデ消しされる。

267は、SP589出土の台付甕口縁部片である。

268は、SP555出土の折返口縁壺の口縁部片である。

269・**270**は、重機掘削時に出土したものであるが、SB06に帰属する可能性が高い。**269**は、胴部下半に稜線をもった、やや下膨れの壺である。口縁部を欠損し、底部には穿孔が認められる。内外面ともに器面摩滅のため調整痕は確認できなかった。**270**は台付甕で、口縁部と脚台部を欠損する。外面には縦位のハケ、内面にはヘラ状工具によるナデが施される。外面の所々に炭化物の付着が認められる。

271は、SB06の床面直上出土の台付甕である。胴半分と脚部を欠損する。胴中位に最大径をもった球形を呈す。口縁部外面は横ナデされ、胴部はハケが施される。

272は、7－C区出土のS字状口縁甕の口縁部片で、立ち上がりは短く屈曲も弱い。

273は台付甕接合部片で、内外面ともにハケが施される。

③古墳時代鉄製品（第36図）

274は、SF06出土の鉄剣である。遺存状況は茎をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。土圧によって、剣身の半ばあたりと茎尻側の目釘孔のあたりで屈曲している。木製の鞘、特に鞘が良好に遺存する。法量は、残存長61.6cm、剣身長50.4cm、茎残存長、11.2cm、剣身幅3.2cm（最大）、茎幅1.2cm、剣身厚0.6cm、茎厚0.4cmを測る。剣身の断面形は、ひし形を呈し、明瞭な鎬をもつ。関は直角で、0.6cmとやや深く切れ込む。茎には、目釘孔が2つあることがX線写真で確認できる。鞘は、現状では土が多量に膠着しており、表面の観察が困難ではあるが、鞘木が完存に近い状態で遺存しているとみられる。鞘木の樹種は、樹種同定の結果ヒノキであった。鞘身の側面は、二枚合わせの痕跡を明瞭に観察できる。鞘身には帯紐状の有機質が巻かれている。帯紐の単位は0.2～0.3cmであるが、把縁近くでは巻きの単位が広くなり、0.4～0.5cmとなる。巻きはじめと巻き終わりの箇所は特定できない。肉眼による観察では、帯紐状有機質の材質は不明。鞘身側面の二枚合わせのラインは、鞘口付近で不明瞭になる。鞘口から1.1cmのところに鞘身に直交するラインが不明瞭ながらも観察でき、このラインと鞘口の間に材質不明の有機質が付着している。別作りの鞘口をはめ込んだ痕跡かもしれないが、現状で鞘口構造についてはっきりしたことは言えない。把は、鞘に比べて把の遺存状態はそれほど良好でないが、把木は遺存しているので、木製

の把がついていたことは間違いない。肉眼観察とX線の観察から、把縁に少なくとも二つの段差が確認できる。鞘口と把縁とがぴったり合わさった状態であるため、鞘に呑口状にはまり込んで鍔の役割をする、把縁第一段があるか否かは、X線写真でも不明瞭で、現状では分からない。把縁の両側面は生きており、古墳時代中期に通有の、片側に突起が取りつく形状のものではなく、対称形となる。把木の遺存状態が悪く、茎挿入孔穿孔のための、把間側面の補助穿孔がなされていたのかどうかは不明。把巻の痕跡は明確に観察できない。布状の有機質が、把に斜交するように巻きつけられているのが確認できる。鞘ではこの布状有機質は直接確認できないが、鞘全体に土が斜めに錆着しているのは、巻かれた布が土化したものである可能性が考えられる。副葬に際し、剣を布でくるんで埋納したものと想定される。

④近世鉄製品（第36図）

275は、SF11出土の小刀である。遺存状況は、茎尻をわずかに欠くが、ほぼ完形で木製の拵、特に把が良好に遺存する。法量は、残存長32.2cm、刀身長21.0cm、茎残存長12.2cm、剣身幅2.2cm（最大）、茎幅1.3～1.9cm、剣身厚0.8cm、茎厚0.6cmを測る。刀身は、断面は三角形、平造りである。関はやや斜めに浅く切れ込む。茎の目釘孔は、X線写真からはっきりと確認できるのは一つだけである。鞘は、佩裏側に鞘木とその表面に塗られた漆が良好に遺存している。鞘木は一面しか残っていないため、鞘木の合わせ目や鞘口の構造などについて不明である。木製の把の上からは、鮫皮ないしエイ皮が巻きつけられている。魚をあしらった目貫を把の両側面に取り付けてあったとみられる。うち片方は遊離している。目貫には二条の綿を撚った糸が付着している。把木を取り付ける前に茎尻側から縄を通しておき、把木を取り付けたのち切羽1→鍔→切羽2→責金具の順に装具を取り付けている。責金具を取り付けたのち、繊維状の有機質を責金具の上から巻きつけてある。鍔は倒卵形で、佩裏側に透かし窓が一つあけられている。

⑤近世陶磁器（第35図）

276～**279**は、SD01出土である。**276**は、瀬戸産の尾呂茶碗である。高台周辺はサビ釉化粧掛けされ、それ以外は内面を含め鉄釉が施され、口縁内外面には灰釉が流け掛けされている。**277**は肥前磁器の筒茶碗で、菊花文と格子文が描かれている。**278**は瀬戸産のスリ鉢口縁部片で、受け口状を呈すタイプである。**279**は手づくねのカワラケで、器高が低い。

280～**287**は、SD03出土である。**280**は志戸呂焼の小皿で、鉄釉掛けの上に灰釉が施されている。**281**は瀬戸産の大目茶碗高台部片で、高台周辺を除き鉄釉が施されている。**282**は、肥前磁器の筒茶碗である。**283**は志戸呂焼の燈明皿で、底部周辺を除いてサビ釉が施されている。**284**は志戸呂焼の由右衛門銘利で、外面はサビ釉化粧掛けされ、頸部周辺には鉄釉が流け掛けされている。**285**は志戸呂焼の水差で、底部周辺を除いてサビ釉が施されている。**286**は志戸呂焼のスリ鉢で、底部周辺を除いてサビ釉が施されている。**287**はロクロ成形のカワラケで、全体に肉厚である。

288・**289**は、SD04出土である。**288**は瀬戸産の灰釉縁釉小皿の口縁部片で、古瀬戸後期に比定される製品である。**289**は志戸呂焼の燈明皿で、サビ釉が施されている。

290～**292**は、SF11出土のロクロ成形のカワラケである。

294・**295**は遺構外出土で、どちらもロクロ成形のカワラケである。

4. まとめ

今回の調査では、縄文時代中期、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代中期、近世と検出されたそれぞれの時代において重要な成果をあげることができた。ここでは、その成果と若干の課題をもってまとめとしたい。

(1) 縄文土器について

従来、弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡と位置付けられていた今坂遺跡において、縄文時代にも人々の生活が営まれていたことが明らかになった。

今回の調査で出土した縄文土器の時期は、中期初頭に始まり、中期前半、中期後半、後期前葉、後期後葉～後期末と断続的であると考えられる。そのうち、数量は中期後半のものが多い。これにより、断続的ではあるが、長い期間にわたり、今回の調査地及びその付近には集落が営まれていたことが考えられる。そして、周辺に分布する縄文時代の遺跡との有機的な繋がりを探るための有効な情報が得られた。

掛川市域で初めて獣面となる把手2点の出土があった。静岡県内での分布を見ると、富士川以東からの出土が圧倒的に多く、大井川以西での出土は非常に珍しいものと思われる。また、時期的には、静岡県内の場合は、中期初頭から後期前葉まで見られるらしい。今回出土した獣面把手2点は、勝坂系の土器に見られる把手の雰囲気（デフォルメされ、禍々しさすら感じる）とは異質の雰囲気が感じられる。縄文時代の遺構からの出土ではなく、共伴する土器がないため、獣面把手2点の時期は明確にしえないが、ここでは、胎土等の状況と今回の調査で出土した縄文土器の状況から、中期後半～後期前葉の広い範囲で考えておきたい。

(2) 弥生時代中期の土器棺墓について

和田岡原において、弥生時代中期中葉に比定される遺構が検出されたのは、今回の土器棺墓が初見である。破片での出土であったが、接合の結果、ほぼ完形となったことから土器棺と判断した。ただし、土坑の規模、特異な形状を勘案すると、にわかに土器棺の土坑墓と判断するには疑問も残る。

出土した甕について、その特徴をみてみると、口縁端部に凹面が設けられ、指頭による押圧文が施されている。弥生時代中期中葉の嶺田式の特徴を兼ね備えているが、口縁端部の凹面は突起状にやや張り出し、外面の条痕もやや粗い点など勘案すると岩出式でも後出の要素が見受けられる。土器棺以外の破片ではさらに顕著で、いすれの甕も口縁部に垣面はなくキザミが施され、外面には条痕に加えハケが施されることから、中期後半の白岩式に近いものと考えられる。また、口縁部のキザミと外面にはハケしか施されないものも見受けられることから更に後出のものも含まれているようである。これら後出要素の土器片の混在については、中期後半段階での攪乱によるものと考えたが、後期に近いものも含めると、かなりの時間幅と複数回にわたって攪乱されたことになる。

同じく弥生時代中期中葉の山下遺跡や岡津原遺跡では、方形周溝墓を主体とした広範囲が墓域な形成される。わずか1基の土器棺墓をもって和田岡原における当該期の墓制云々をできるものではないが、墓制の相違の解明は大きな課題であろう。

(3) 弥生時代後期の布掘り掘立柱建物跡について

布掘りの掘立柱建物跡について、市内での確認例は、平成9年に調査された溝ノ口遺跡と平成19年に調査された高田遺跡21次調査を加え3例目となった。この布掘り掘立柱建物跡については、後述の高田遺跡第21次調査のまとめでも取り扱っているので詳細はそちらに譲る。

(4) 古墳時代前期の竪穴住居跡について

古墳時代前期に比定される竪穴住居跡には、いくつかの興味深い特徴があった。その一つは、大型の竪穴住居跡である。SB14は7.50m×7.50mを測るもので、一辺7m級の市内でも最大クラスに属す。6.80m×6.80mを測るSB01は、それよりもやや劣るものの該期の一般的な竪穴住居が5m大であることから、大型の部類に属すものであろう。大型の竪穴住居跡は、瀬戸山Ⅰ遺跡（昭和61年度調査）と高田遺跡（第17次）でも検出されているが、その数は少ない。規模からすれば集落内での中心的住居とも考えられそうだが、当該地域においては未だ一つの集落すべてを調査した事例がないため、一集落に必ず存在するのか、一集落内に複数軒あるとすればどの程度の割合なのか等々不明な点が多い。ところで、SB14と瀬戸山Ⅰ遺跡のSB11には、共通する点がみられる。瀬戸山Ⅰ遺跡のSB11は一辺6.76mを測る竪穴住居跡で、炉が存在しなかった。SB14でも炉は存在せず、いみじくもほぼ同規模の大型竪穴住居で炉が存在しないことは、示唆的である。規模が大きいことも勘案すると、炉をもった一般的住居とは、異なった目的で用いられていたと考えられる。しかし、わずか2例では想像の域を出るものでなく、事例の増加を待ちたい。

次に竪穴住居内の屋内施設について、SB01とSB06からは、当該期の一般的な火処である炉とは異なった形態の火処が検出された。どちらも壁際にあり、やや大きめのピットに火床（燃焼部）を備えたもので、地下炉とでも呼称すべき火処である。SB01ではピットの燃焼部を粘土と焼土でカマドの袖状に囲んでおり、SB06ではピット内にテラス状設け、そこに火熱を受けた粘質岩ブロックが置かれていた。火床が地下、ピット内にあることを除けばかなり形態差があることから、定型化された形態とは考え難い。一般的な炉と同様に煮沸、暖房、採光を目的として使われたものか、使用時の形状、使用方法等について不明な点も多い。類例を待って検討したい。

SB01からは、地下炉の他に、棚状遺構が検出されている。北・西壁際でL字状を呈し、床面より5cm程高くなっていた。和田岡原においては初見となった。SB01については、規模も大きく、一般的な炉とは異なった火処を備えるなど、非常に特異な住居と言える。

(5) 古墳時代中期の大型土坑墓について

和田岡原において、古墳時代中期に比定される比較的規模の大きな土坑墓は、これまでにもいくつか検出されている。しかし、規模は全長1.8～2.5m、幅0.6～1.5m程度である。SF06は、それらを圧倒的に凌駕する規模で、古墳の主体部と比較しても遜色のないものである。周囲を精査したが、古墳が存在した形跡はなく、この大型土坑墓のみが造られたとして間違いなかろう。

土坑墓の覆土の層序については報告に譲るが、床面に近い6層（暗褐色土）中には棺の痕跡はみられなかった。報告では棺の有無は不明としたが、副葬されていた鉄剣には比較的良好な状態で鞘木が遺存していた点を勘案すると、棺が存在したのであれば少なからず木質も遺存した可能性が高い。何ら棺の存在を示唆する痕跡がみられないことから、棺が存在した可能性は低いのではないだろうか。棺の有無は別にしても、鉄剣の出土状況から、鉄剣は土坑埋際に立て掛けて置かれていた可能性が高い。

類例を収集しての検討はもちろんのことであるが、このように棺の有無、鉄剣の出土状況については、未だ積極的に首肯できるものとは言えないことから、状況を更に検討する必要がある。

(6) 近世の遺構と遺物について

和田岡原における近世遺跡の調査例は、これまで皆無ではないものの、土坑墓、火葬遺構などの葬送関連遺構が散見的に知られる程度であった。単独、もしくは数基程度がまとまって確認される事例が多いことから、これら葬送関連遺構の多くは、当時の居住区域からやや離れた場所で造営されていたと考

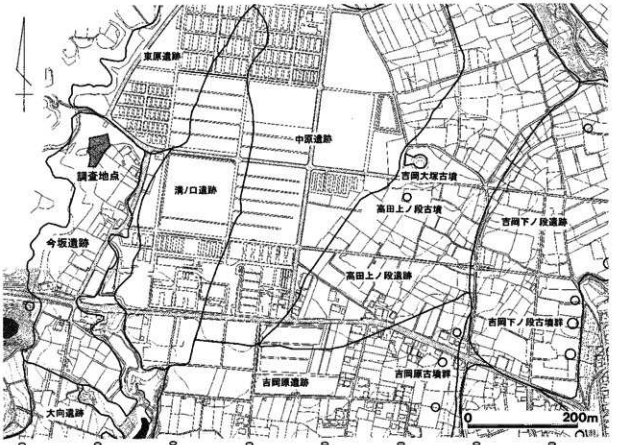
えられる。今回の調査においては、18世紀後半から19世紀前半にかけての近世期の遺構が検出され、非送関連以外の当時の集落の一旦を窺い知ることができた。

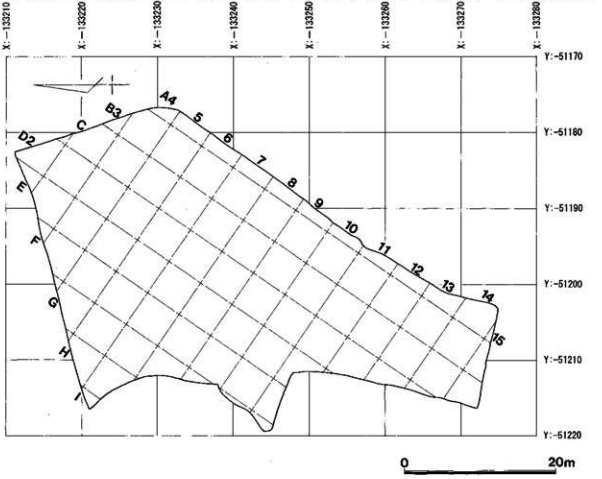
検出された溝状遺構は、18世紀後半から19世紀前半にかけ造営されたと考えられる。新旧はあるものの、溝幅等が類似することから、ほぼ同時期に機能していたと考えられる。また、東西に走るSD01・03に対し、南北に走るSD02・04は直角にSD01・03に接続し、矩形に巡る溝、すなわち区画溝だと考えられる。区画された敷地内で検出された同時期の遺構は、並列した3条の短い溝のみで、敷地の機能解明の手掛かりになる遺構は検出されなかった。

出土遺物である陶磁器類の多くは、18世紀後半から19世紀前半にかけての時期に比定され、遺構の時期を反映するものであるが、それらに混じって僅かではあるが、古瀬戸後期段階と17世紀中から後半代の陶器類が出土している。和田岡原の古代、中世の様相については、現段階においては考古資料から窺い知ることはできないが、今回の17世紀後半を遡る遺物の出土により、遅くとも17世紀後半には集落が存在したことは間違いなかろう。高田遺跡21次調査でも同時期の遺構と遺物が出土しており、近世から現代へ通じる和田岡原の本格的な開村の時期を示す遺物だと考えられる。比較的看過されがちな資料であるが、近世地域史解明の上では多くの情報が潜在する資料でもある。地道な資料収集を心掛ける必要があろう。

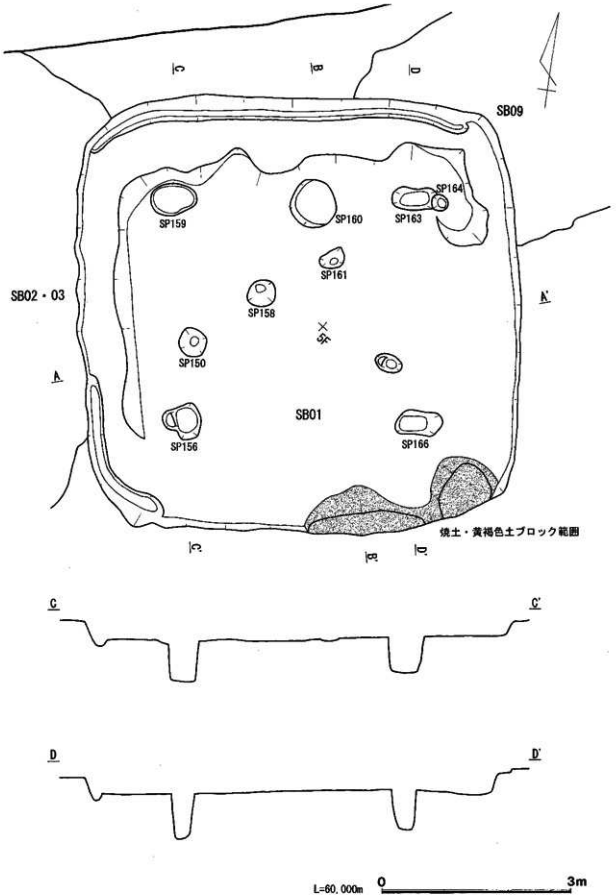
(参考文献)

掛川市教育委員会　1984『中原遺跡』
掛川市教育委員会　1987『瀬戸山Ⅰ－A遺跡発掘調査概報』
掛川市教育委員会　1987『吉岡原遺跡発掘調査報告概報』
掛川市教育委員会　1988『中原遺跡』
掛川市教育委員会　2000『溝ノ口遺跡』
掛川市教育委員会　2008『市内遺跡発掘調査報告書』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2000『富士川SA関連遺跡（遺物編）』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2001『押出シ遺跡（遺物編）』
島田市教育委員会　1994『御小屋原遺跡』
長泉町教育委員会　1992『伯庭遺跡』
袋井市教育委員会　1984『長者平遺跡』

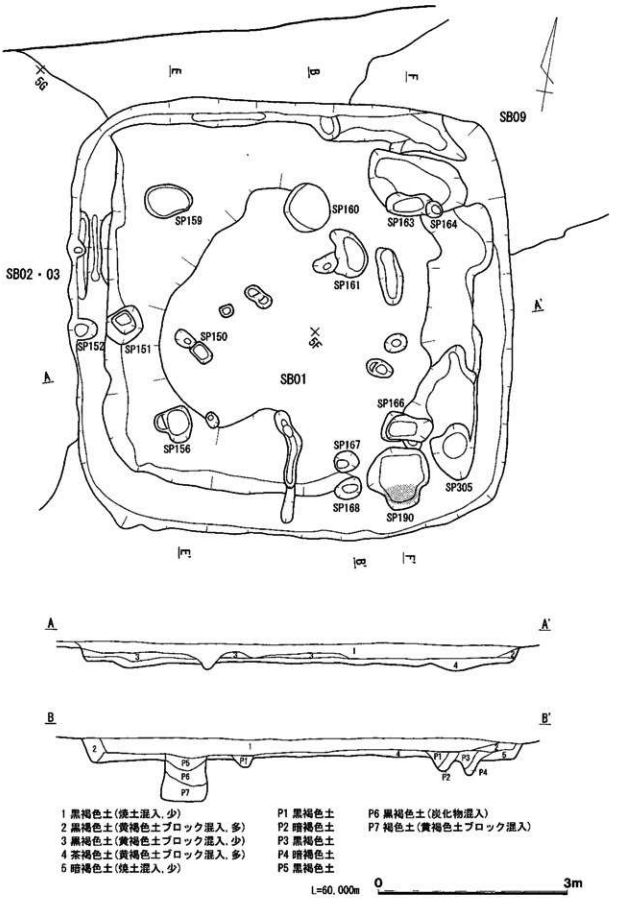




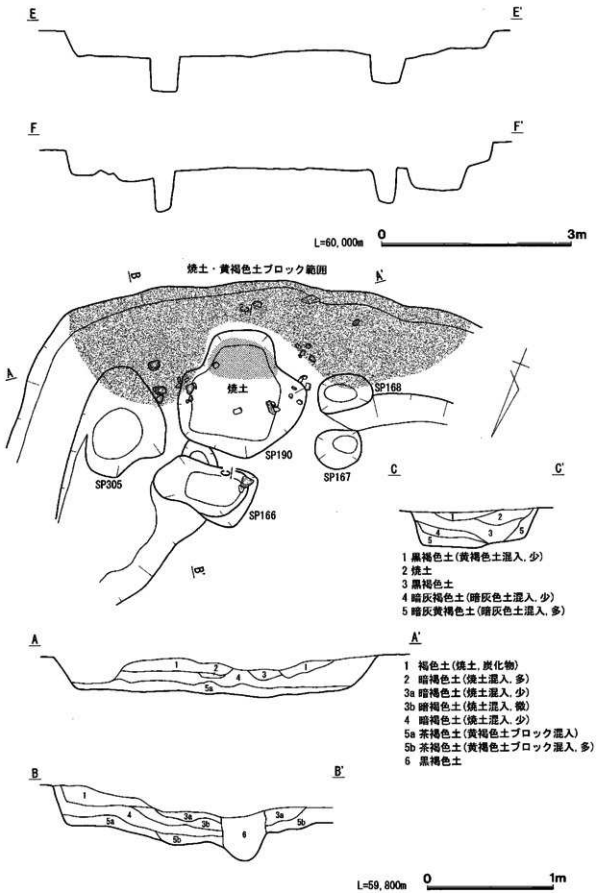
第２図　遺跡位置図・グリッド配置図



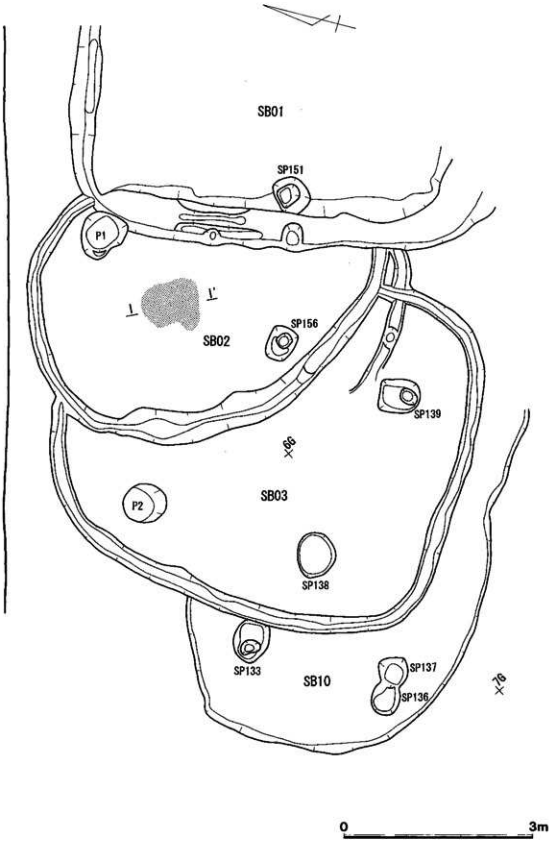
第３図　SB01 実測図 (1)



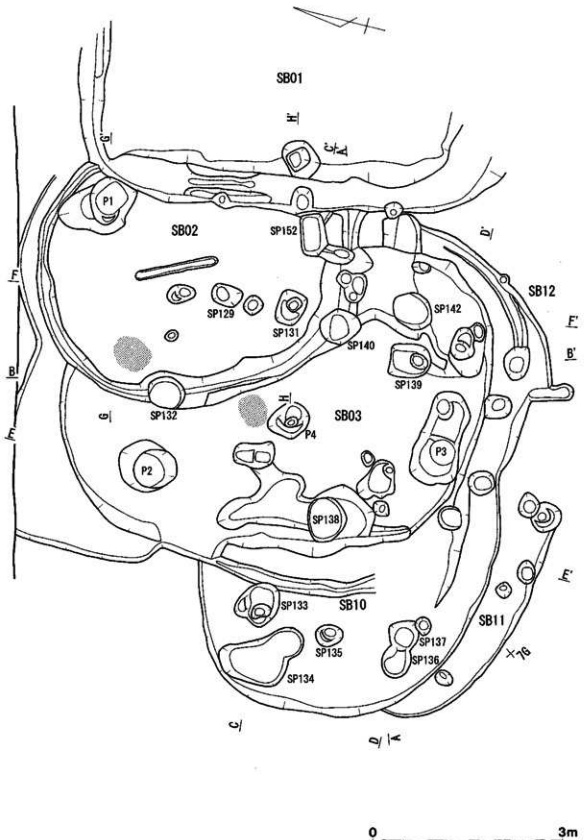
第4図　SB01 実測図 (2)



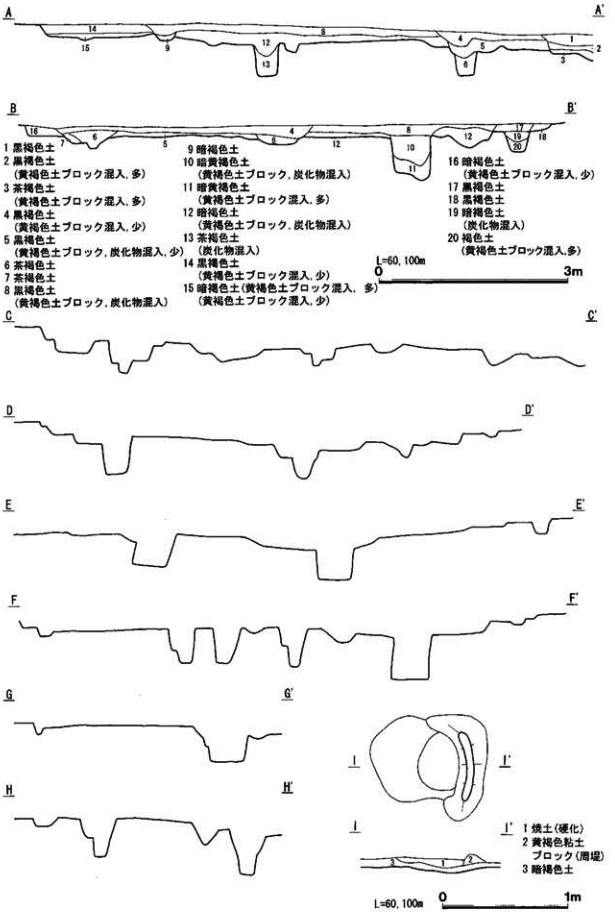
第5図　SB01 実測図 (3)



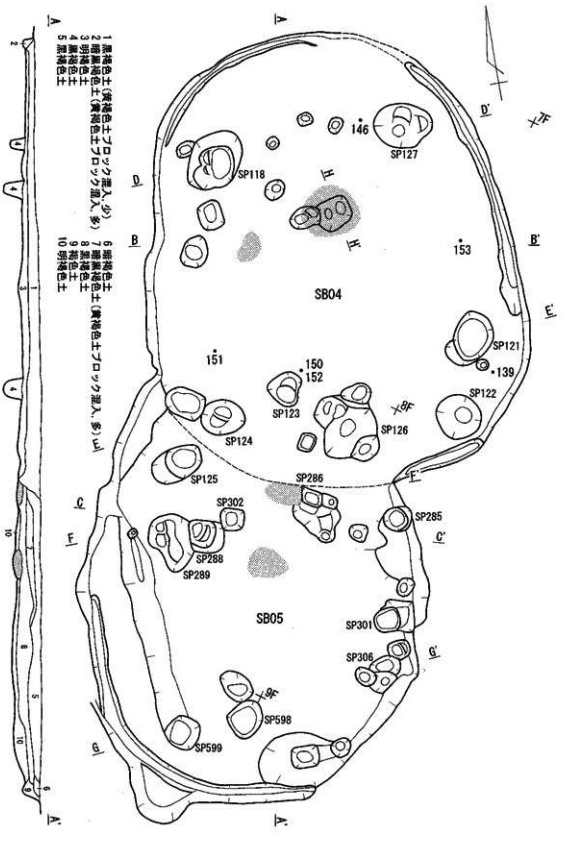
第6図　SB02・03・10実測図（1）



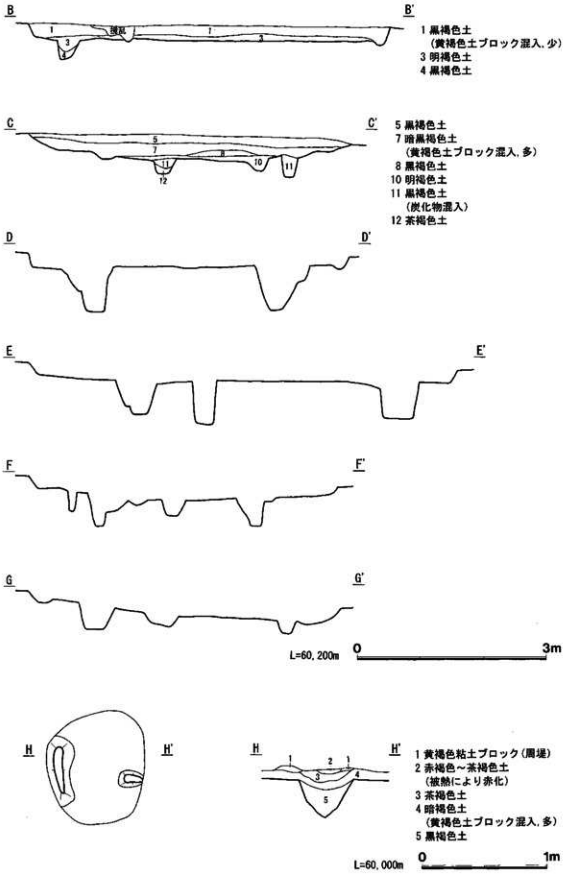
第7図　SB02・03・10実測図（2）



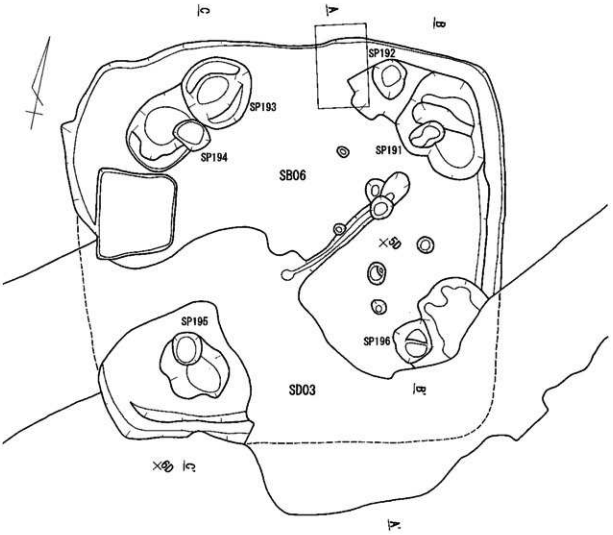
第8図　SB02・03・10実測図 (3)



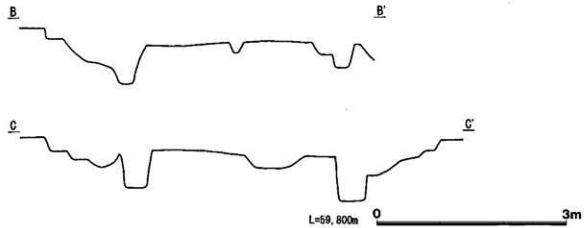
第９図　SB04・05 実測図（1）



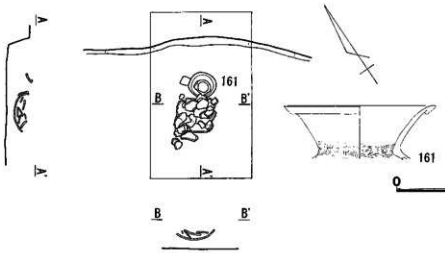
第10図　SB04・05実測図 (2)

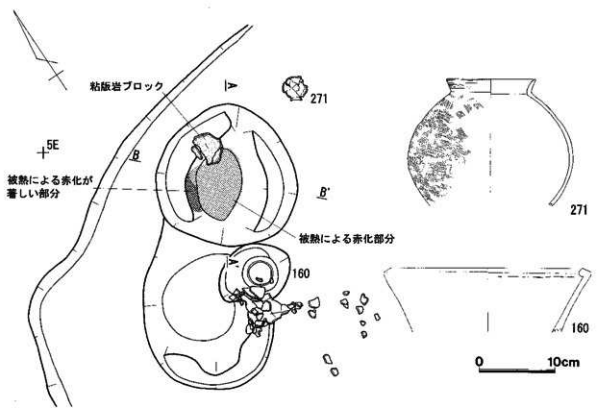


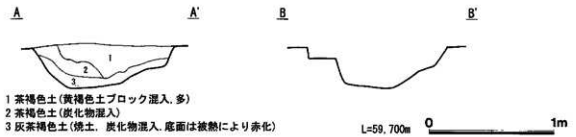
1 暗褐色土(黄褐色土、炭化物混入)
2 暗褐色土(黄褐色土混入、少)
3 褐色土(黄褐色土ブロック混入、多)
4 黄褐色土(黄褐色土ブロックによる層)
5 茶褐色土
6 灰褐色土(黄褐色土ブロック混入、多)
7 黒褐色土
8 黒褐色土(炭化物混入)
9 褐色土



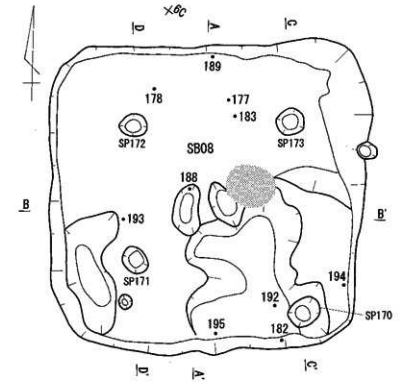
第 11 図 SB06 実測図 (1)

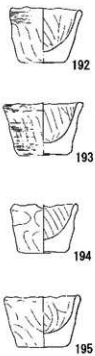




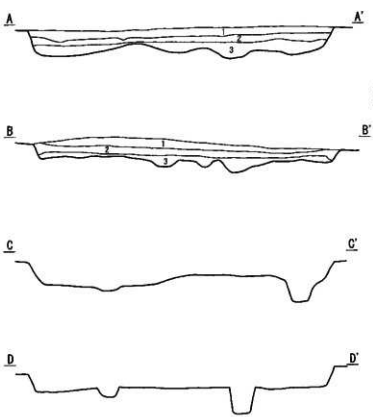


第12図　SB06 実測図 (2)



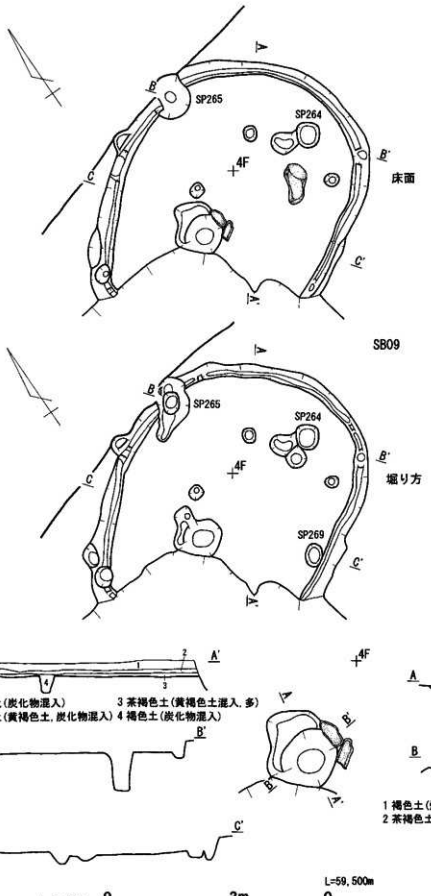


0 10cm

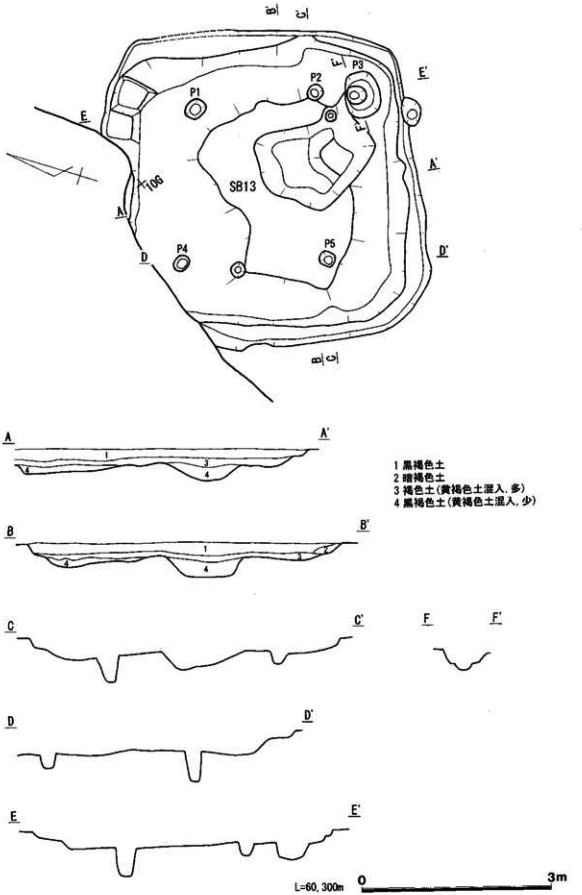


L=59.700m 0 3m

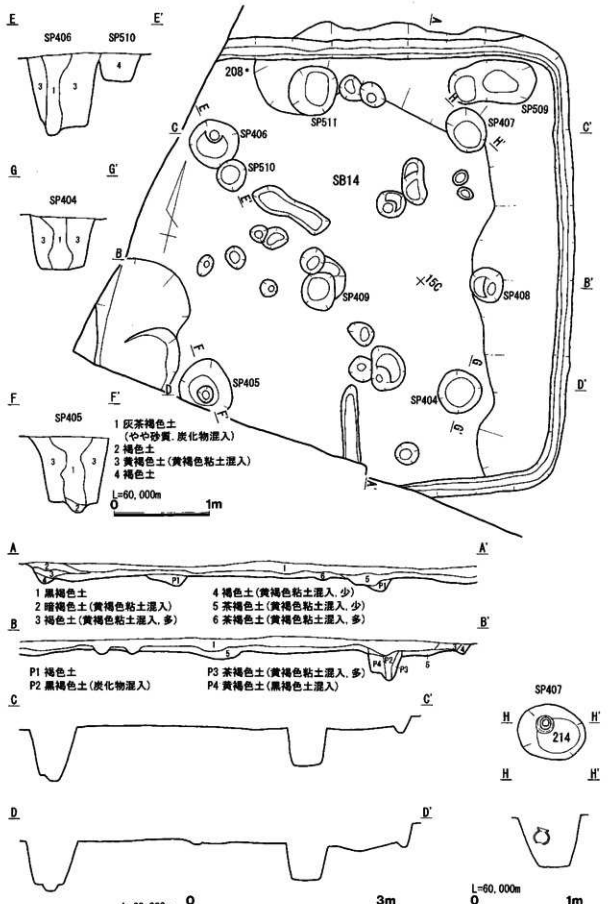
第13図 SB08 実測図



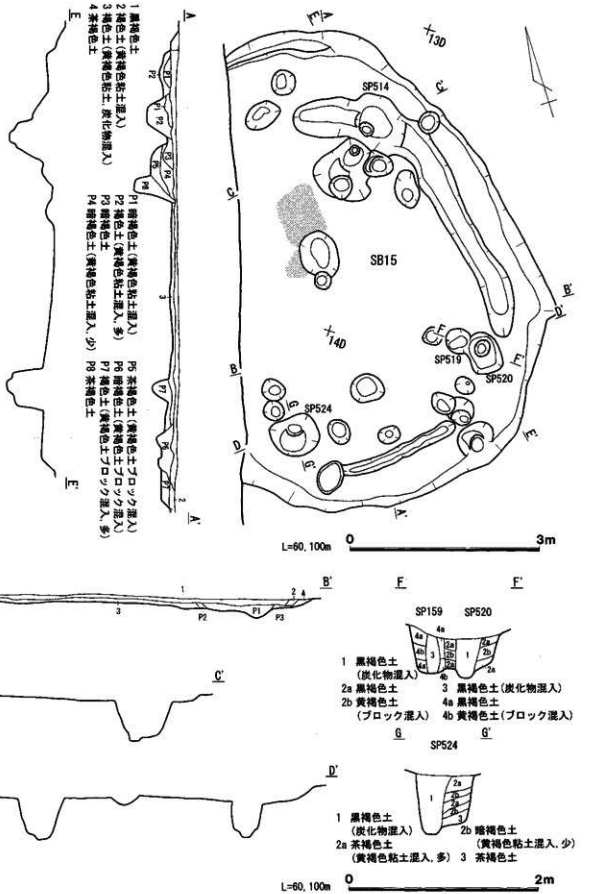
第14図　SB09 実測図



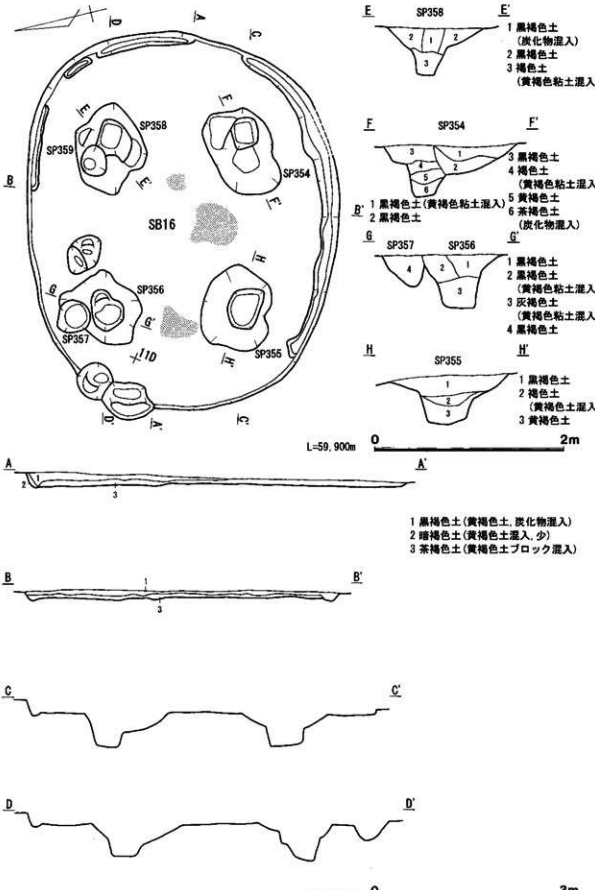
第15図　SB13実測図



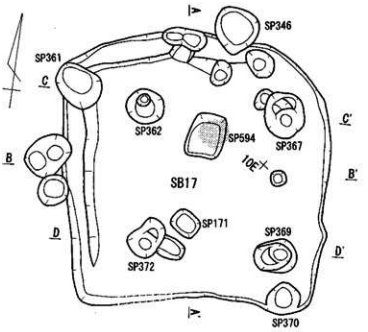
第16図　SB14実測図

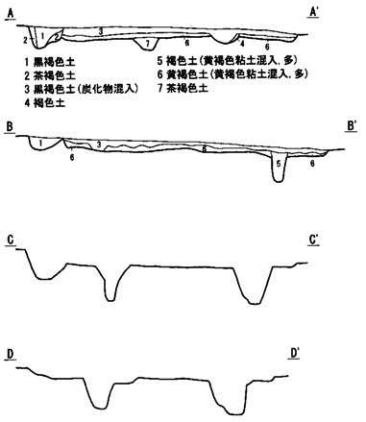


第17図 SB15実測図



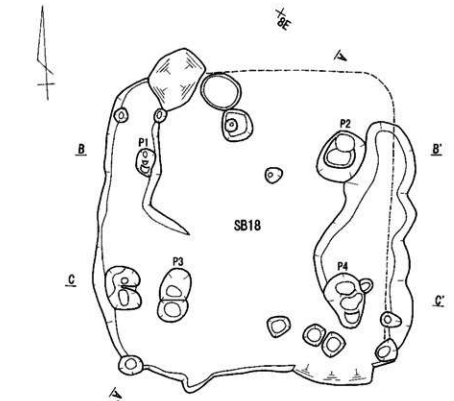
第18図　SB16実測図



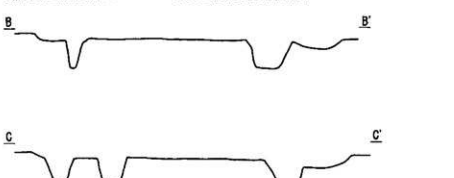


L=60.000m 0 3m

第19図 SB17実測図

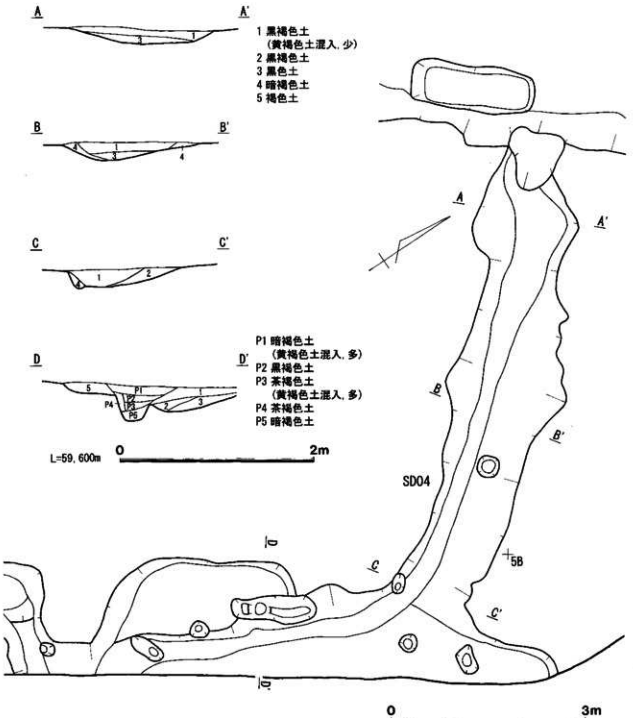


1 黒褐色土(黄褐色粘土混入, 少)
2 茶褐色土(黄褐色粘土混入, 多)
3 黒褐色土(炭化物混入)
4 暗褐色土(黄褐色粘土混入, 多)
5 褐色土(炭化物混入, 多)
6 褐色土(黄褐色粘土混入, 多)
7 褐色土(炭化物混入)
8 茶褐色土(黄褐色粘土混入, 多)

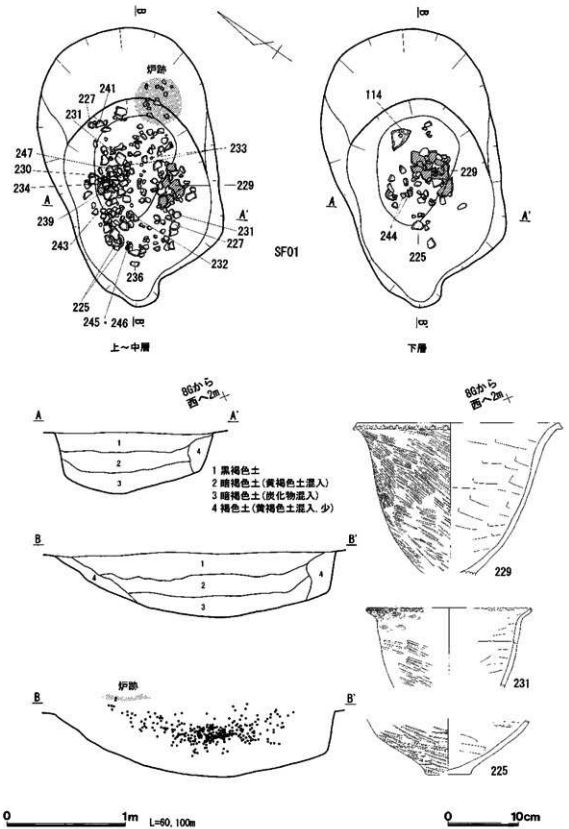


L=60,000m 0 3m

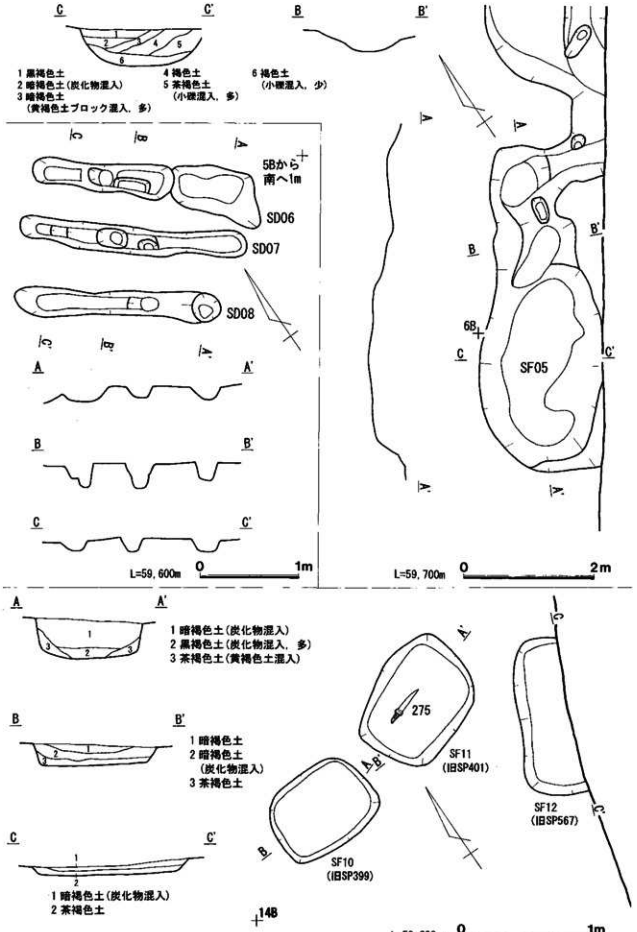
第20図 SB18実測図



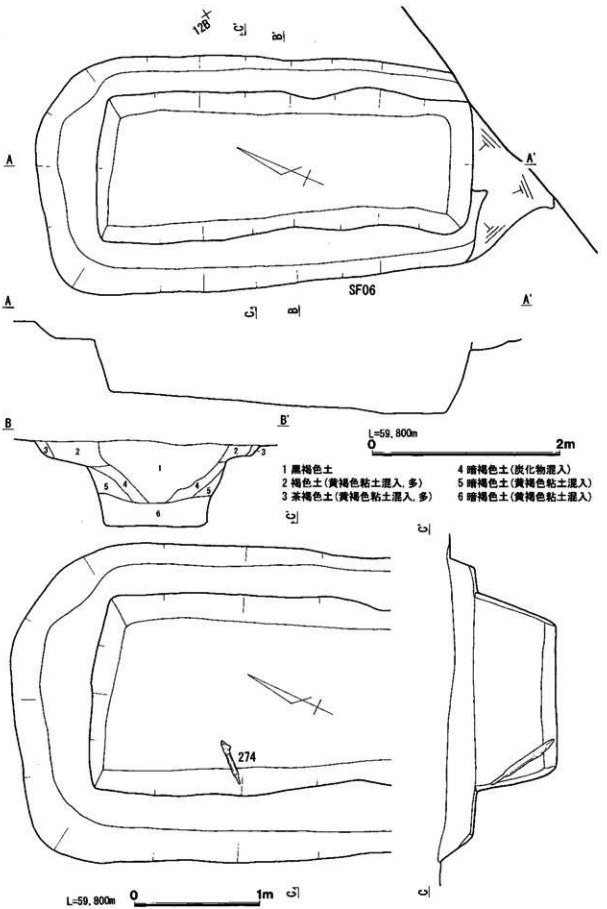
第 21 図　SD04 実測図



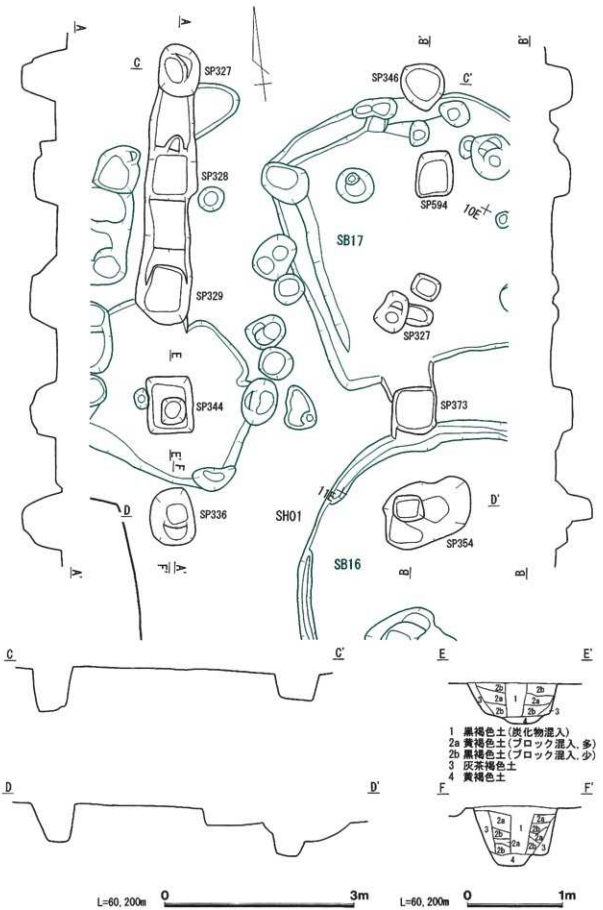
第 22 図　SF01 実測図



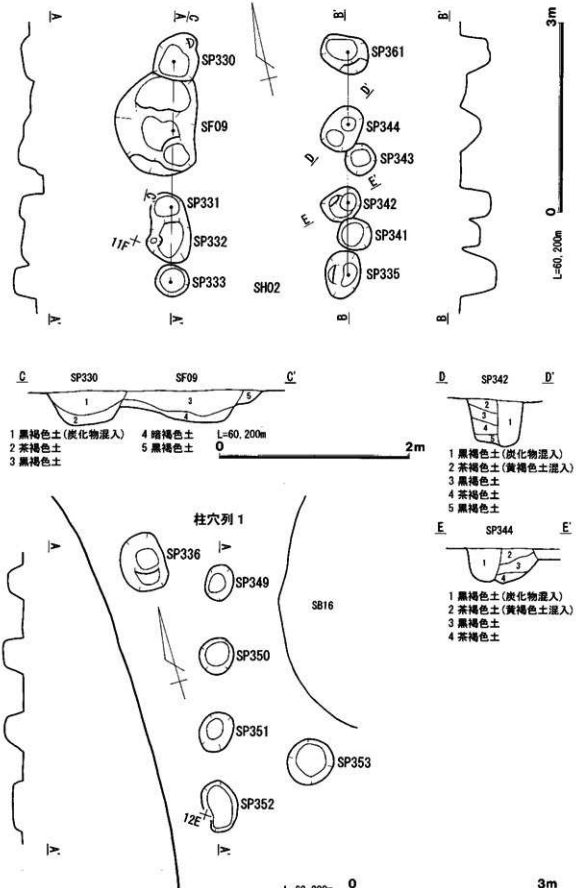
第23図　SD06～08、SF05・10～12実測図



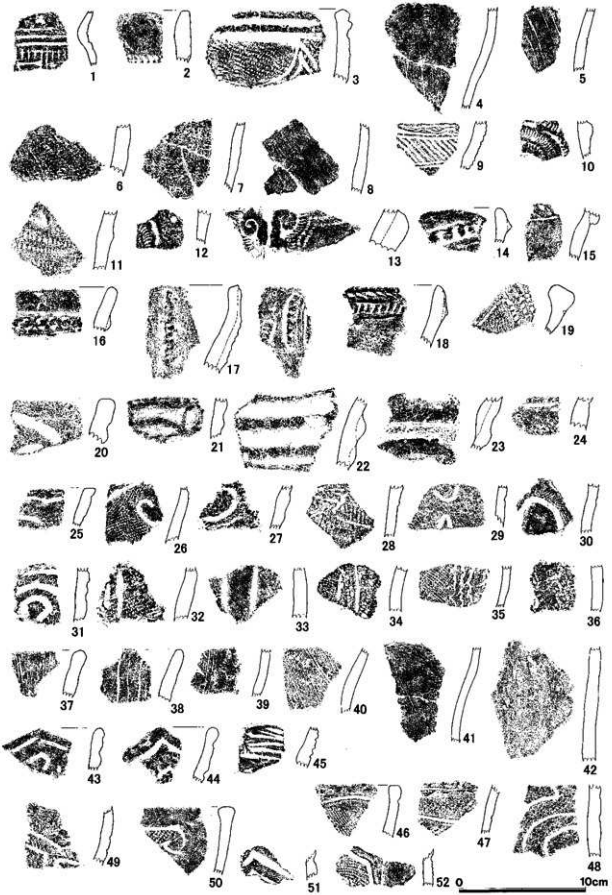
第24図　SF06実測図



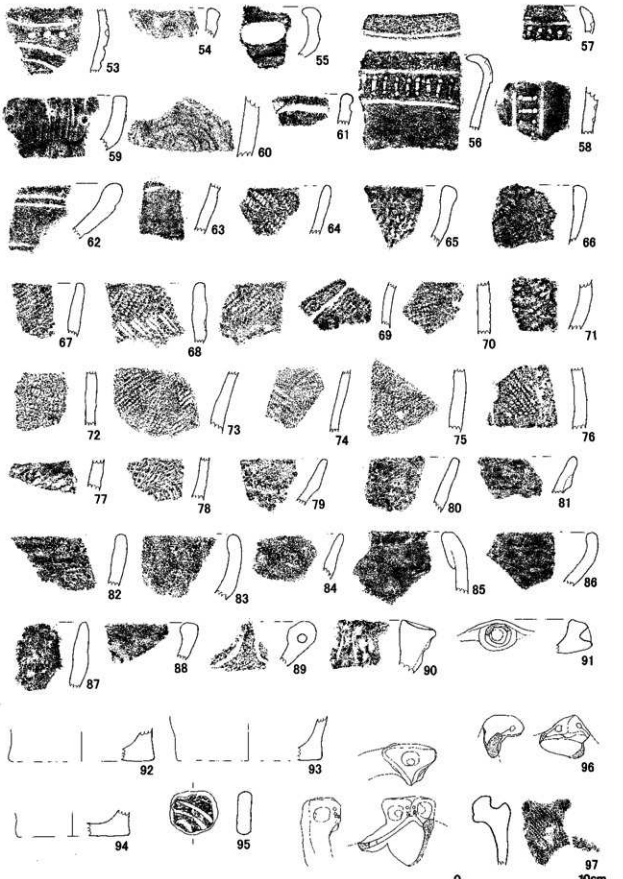
第25図　SH01 実測図



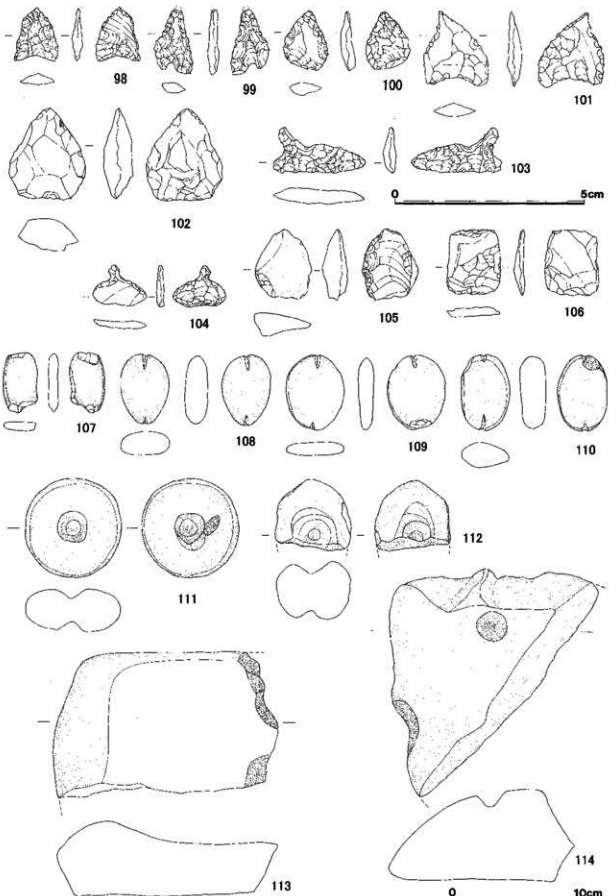
第 26 図　SH02・柱穴列 1 実測図



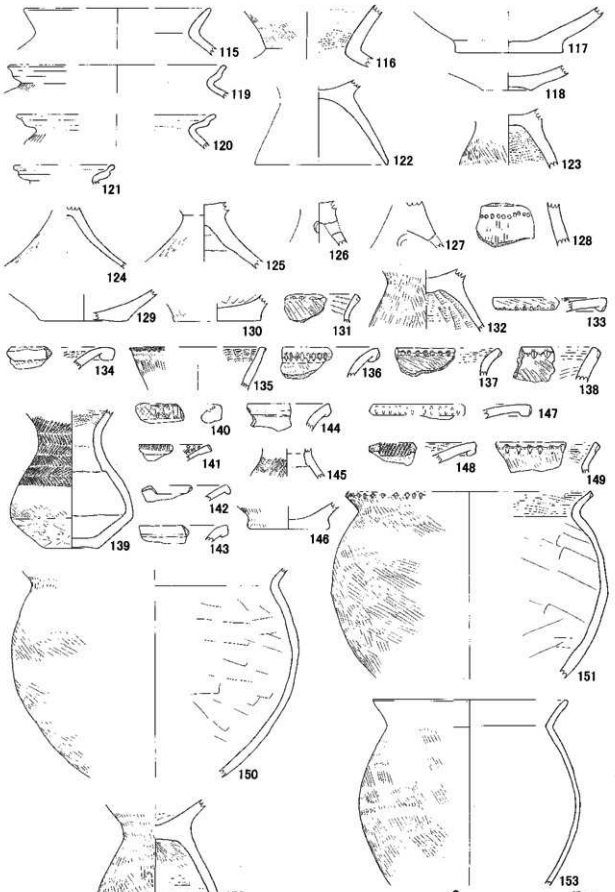
第 27 図 出土遺物実測図（1）



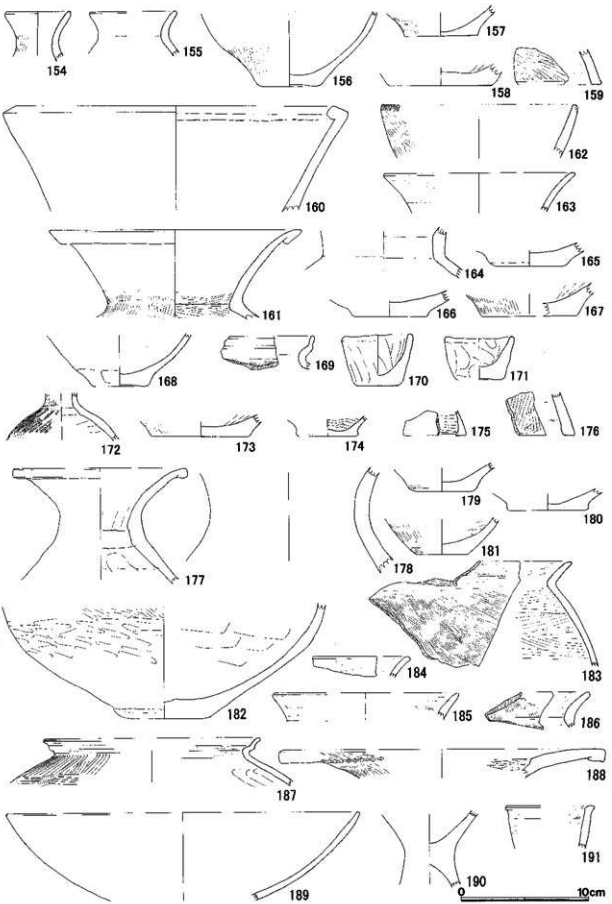
第28図 出土遺物実測図 (2)



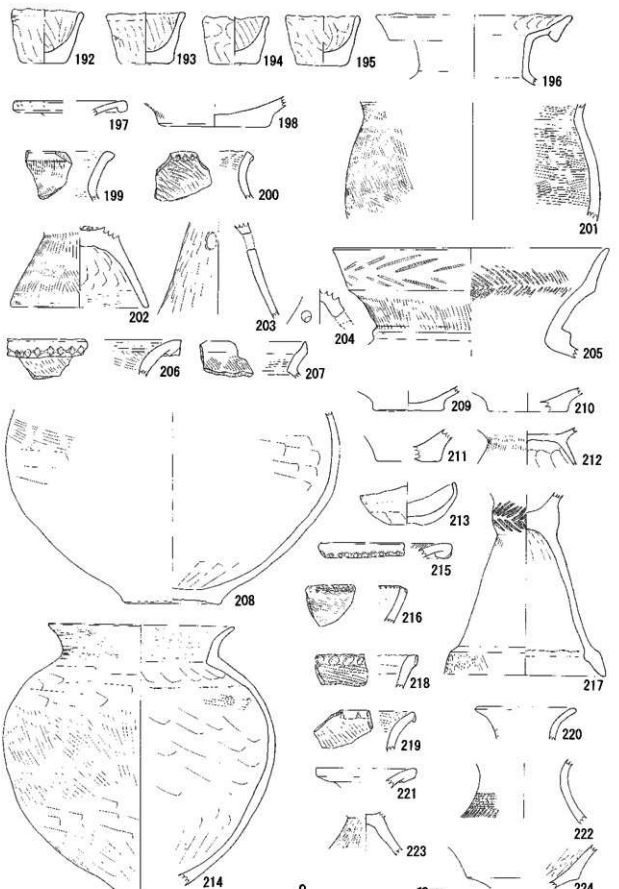
第 29 図 出土遺物実測図 (3)



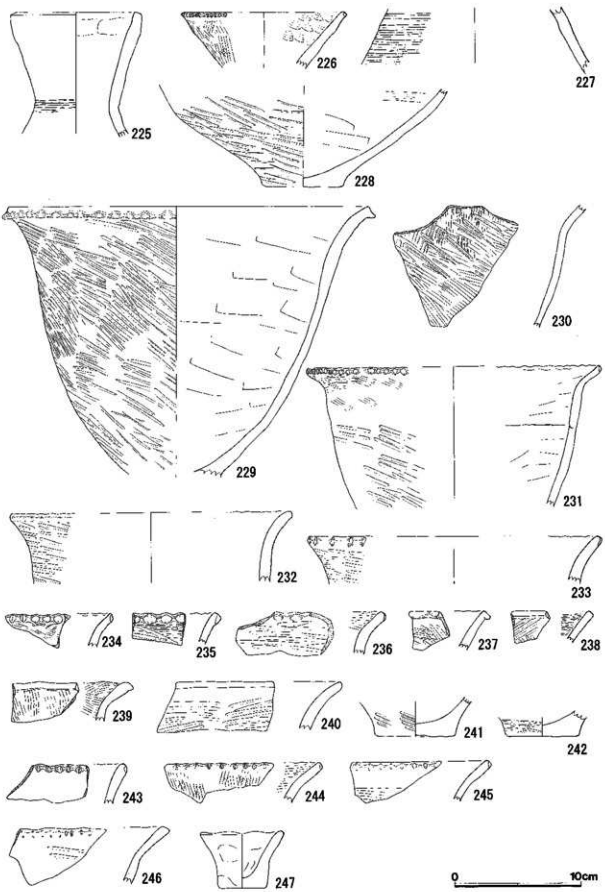
第30図 出土遺物実測図 (4)



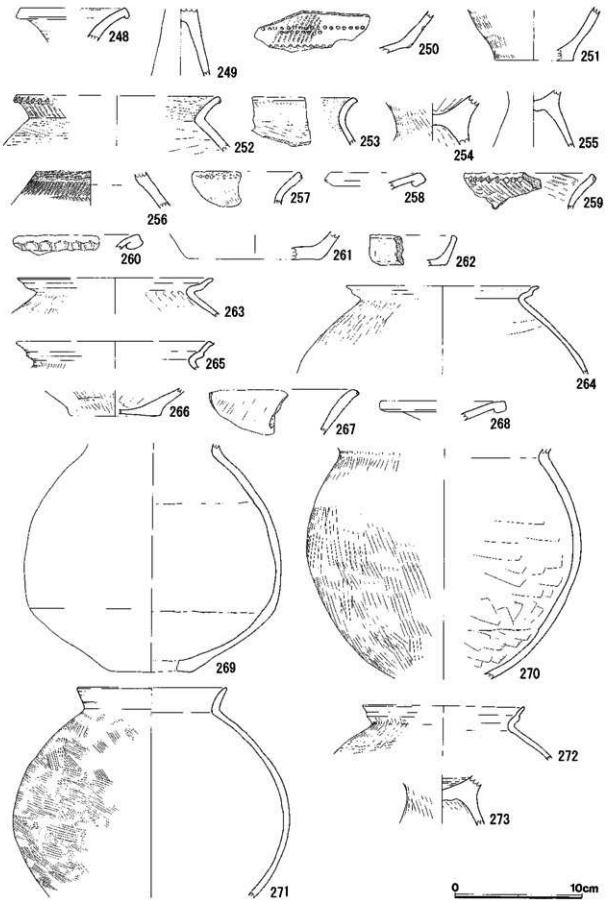
第 31 図 出土遺物実測図 (5)



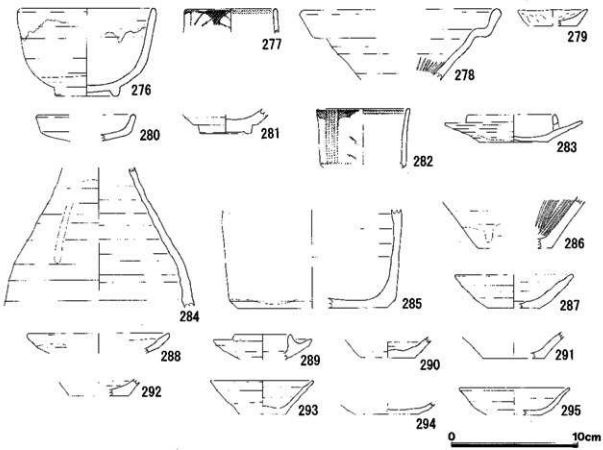
第32図 出土遺物実測図 (6)



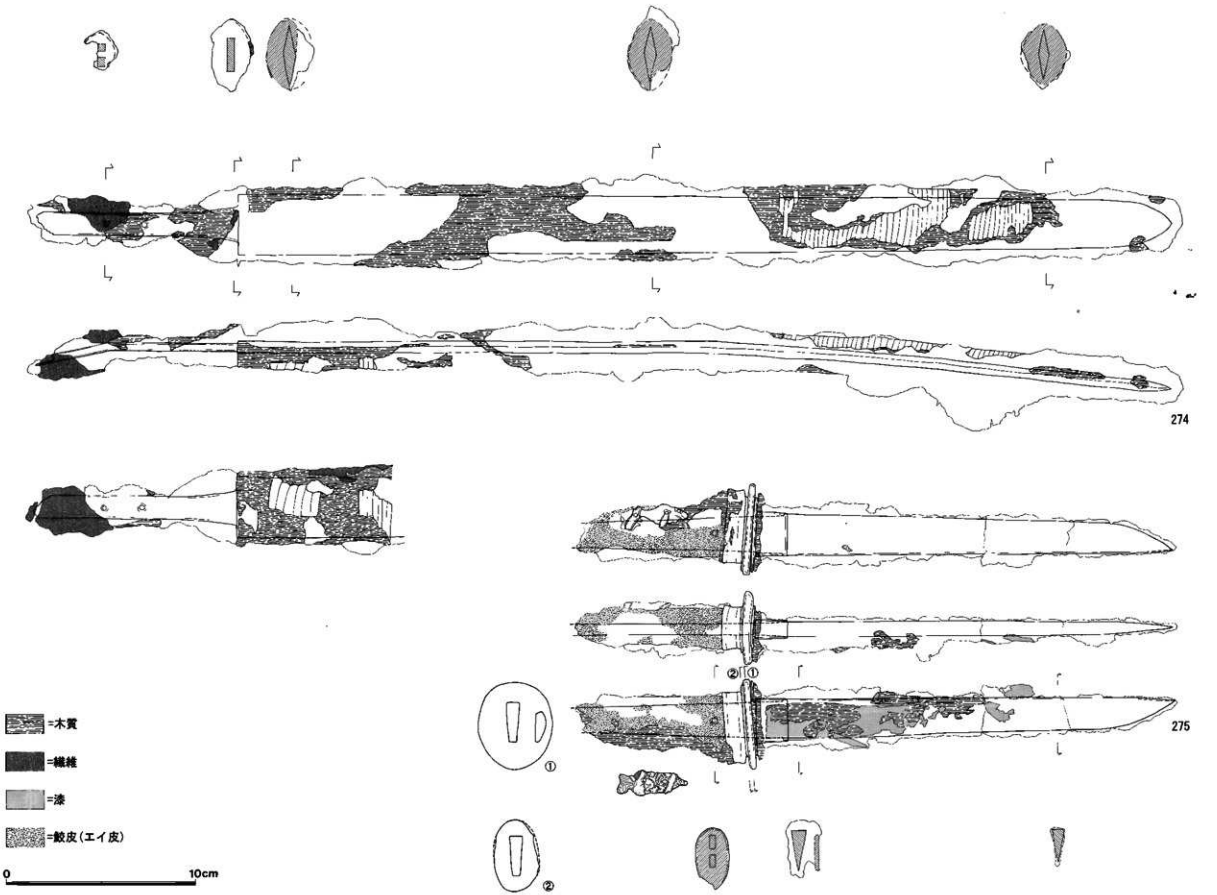
第 33 図 出土遺物実測図 (7)



第34図 出土遺物実測図 (8)



第35図 出土遺物実測図（9）



第 36 図 出土遺物実測図 (10)

瀬戸山Ⅱ遺跡

Ⅲ　瀬戸山Ⅱ遺跡

1. 調査に至る経緯と調査目的

平成19年度に茶畑の改植の計画があることを把握し、現地踏査を行ったところ土師器片、黒曜石片などが散布しており、また平成18年度には今回の調査地の約100m北で発掘調査が行われ、古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡等を検出していることから、今回の調査地にも集落の続きが存在すると考えられた。

茶畑の改植では、地表面から0.7～0.8m掘り起こすことになり、工事が実施されると遺構が破壊されることから、平成19年7月19日に、記録保存のための本発掘調査が必要との副申を付けて「埋蔵文化財発掘の届出」を静岡県教育委員会に進達した。

これに対し、平成19年7月26日付で、静岡県教育委員会から耕作者に対し、本調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。これを受け、記録保存のための発掘調査を実施した。

2. 調査の方法

調査地は大きく北と南に分かれているため、北調査区と南調査区に分け、両区を覆う形で、5m方眼のグリットを設定し、遺構の実測等の基準とした。グリットは、東西を西からA～Lまでのアルファベットで、南北は、北から南へ4～18までの数字を付け、A－5、A－6という呼称にし、グリットの北西に位置する杭にグリットを代表させた。

現地での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1と10分の1を併用し、微細図は10分の1とした。写真撮影は、6×7カメラ1台（ブロニー白黒用）と35㎜カメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、排土置場を確保する必要から、北調査区・南調査区それぞれ南北方向に二分割して行い、平成19年8月2日から北調査区、8月6日から南調査区の前半部分の機械掘削を開始した。10月22日から前半部分の埋め戻しと後半の掘削を開始した。12月17日に埋め戻しを完了し現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するためラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、また調査地点を座標で記録するため基準点測量を実施した。

なお、調査で検出された遺構は、北調査区、南調査区で区別するため遺構名の頭に北・南と冠した。

3. 調査の内容

調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構、縄文時代・弥生時代の土器、石器、古墳時代の土器が出土した。

瀬戸山Ⅱ遺跡の基本的な層序は、第1層が黒褐色の耕作土、第2層が黄褐色土層（地山、南東部分で黄褐色礫層に移行する）となっている。調査区は全域にわたり過去の茶畑の植え替えに伴う重機による撹乱・削平を受けており、特に南調査区東半は顕著であった。

ここでは竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、性格不明の遺構、土器、石器について述べる。

(1) 遺構

①北調査区　竪穴住居跡（SB）

北 SB01（第 40 図）

北調査区 B・C－9・10 区から検出された住居跡である。西側が削平を受け、南側の一部が調査区外に及んでおり、正確な規模は明確ではないが、隅円方形を呈すると考えられる。北と東の壁際には幅約 20cm、床面からの深さ約 8cmの壁溝があり、全周するものと思われる。床面はとらえられたが、貼床は部分的にみられるだけで、全体的には黄褐色土の床面がそのまま地山層ととらえられる状況だった。東側の壁にはピットが 4 か所あった。その間隔は、北側 3 個間が約 1m、南の 2 個間が約 1.5m であった。主柱穴は A－A' 間、D－D' 間をとおるピットを想定した。主柱穴間は A－A' 間が 4.2m、D－D' 間が 4.7m を測る。主柱穴深さは床面から約 40cmである。中央やや北寄りに炉を検出した。この炉から 1.2m ほど南側にも焼土が見られた。炉は直径約 70cmを測り、南側が 3cmほど高く土手状に高まった構造がみられた。炉底面は、熱を受け橙色に変色し固くしまっていたが、熱を受けていない部分は灰色の粘土であった。地山層を掘り窪め灰色の粘土を置いて炉を形成したものと考えられる。第 64 図 22 ～ 27 の土器が出土している。

北 SB02（第 41 図）

北調査区の C－8 区から検出された住居跡である。南側は北 SB01 と近接していた。北側は削平を受け全体の規模は明確ではない。北 SB13 と切り合い関係にあり、北 SB02 が北 SB13 を切っていると考えられる。南側にも住居跡の壁状の構造がみられ、住居跡の重複、建て替え等が考えられる。中央に不整形の掘り込みがみられた。炉は中央北側にあり直径約 40cmを測る。主柱穴は明らかではない。住居内から、第 64 図 28 ～ 33 の土器が出土している。

北 SB03（第 42 図）

北調査区の C－6、D－5・6・7 区から検出された住居跡である。東側の半分以上が調査区外に及んでいると考えられ、正確な規模は明確ではない。確認できる規模は南北が 7.2m である。ほぼ全面に貼床がみられた。主柱穴は、B－B' 間をとおる北から 2 番目のピットと、一番南の柱穴を想定した。主柱穴間は 4m を測る。それぞれの柱穴の深さは 37cmと 10cmである。中央やや北寄りから炉跡を検出した。炉跡は直径約 50cmを測る。

北 SB05（第 43 図）

北調査区の B・C－5・6 区から検出された住居跡である。北 SB06、北 SB14 と切り合い関係にあり、北 SB06 に切られていると考えられるが、北 SB14 との切り合い関係は明確ではない。柱穴の配列と周囲に不整形な構造がみられることから、造り替えや複数の住居跡が重複している可能性がある。主柱穴は D－D' 間をとおる北から 2 番目のピットと 3 番目のピット、F－F' 間をとおる西から 3 番目と 5 番目のピット、C－6 杭北側のピットを想定した。主柱穴間の距離は D－D' 間で 2.4m、F－F' 間で 2.3m、C－6 杭北の柱穴から D－D' 間で 2.4m、F－F' 間で 4.5m を測る。主柱穴の深さは、25 ～ 35cm である。炉は検出されなかった。住居内から、第 64 図 34 の土器が出土している。

北 SB06（第 45 図）

北調査区の B－6、C－5・6 区から検出された住居跡である。北側から東側にかけて削平を受けており、全体の規模は明確ではない。黄色土と黒色土が混合した厚さ約 4cmの貼床が部分的にみられた。炭化し

た木材とカヤが出土したことから焼失家屋と考えられる。これら炭化材の上面には、3～4cmの厚さの焼土層が乗っていた。北SB05と切り合い関係にあり、北SB05を切っていると考えられる。主柱穴はA－A'間、B－B'間をとおるピットを想定した。主柱穴間の距離はB－B'間が2.4mを測る。主柱穴の深さは20cmである。住居跡の中央から炉跡を検出した。炉跡は直径約60cmを測る。この住居内から検出された炭化材の樹種について分析を行い、付載に結果を記載した。

北SB07（第46図）

北調査区の南西隅A－10区から検出された住居跡である。遺構の大部分が調査区外に及んでいることから全体の規模は不明である。黄色土と黒色土が混合した厚さ2～6cmの貼床がみられたことから住居跡とした。壁際に幅20cm、床面からの深さ12cmの溝がみられ廻溝と考えられる。

北SB08（第46図）

北調査区のA・B－8・9区から検出された住居跡である。西半が調査区外に及んでおり、全体の規模は不明である。主柱穴はB－B'間、C－C'間をとおるピットを想定した。主柱穴間の距離はB－B'間で2.5mを測る。主柱穴の深さは、10～20cmである。住居跡のやや北よりから炉跡を検出した。炉跡は直径約25cmを測る。掘り方は、中央が高くその周囲が幅0.6m～0.9m、中央より深さ13～20cmほど掘り窪められている。中央を高くして周囲が掘り窪められた掘り方の一部と考えられる。中央に厚さ2～7cmの黒褐色土に黄褐色上のブロックが混ざる貼床がみられた。第64図35の土器が出土している。

北SB09（第47図）

北調査区のB・C－7・8区から検出された焼失家屋跡である。全面に焼土と炭化物が分布していた。特に北側の壁際には、帯に沿って幅約50cm、厚さ約10cmの焼土帯があった。北SB11、北SB15と切り合い関係にあり、北SB09がこれらを切っていると思われるが、北SB11、北SB15とも形が不明確で、切り合い関係は明確にできない。確認面の規模は、南北約6m、東西約6mの方形を呈すると考えられる。主柱穴はC－C'間の1番目と2番目のピット、D－D'間の1番目と3番目のピット、F－F'間の1番目と2番目のピットを想定した。主柱穴間の距離はC－C'間で2.5m、D－D'間で2.5m、D－D'間で2.6m、C－C'間とD－D'間の西側のピット間で2.5mを測る。主柱穴の深さは、20～30cmである。中央やや東寄りから炉を検出した。掘り方は、中央が高くその周囲が幅0.5～1.5mの幅で、中央より深さ10cmほど掘り窪められている。中央を高くして周囲が掘り窪められた掘り方の一部と考えられる。中央に厚さ5～10cmの黒褐色土に黄色土が混じる貼床がみられた。第64図36～40、第65図41～43の土器が出土している。特に39・41・42は完形に近い形で出土している。この住居内から検出された炭化材の樹種について分析を行い、付載に結果を記載した。

北SB10（第43図）

北調査区のA・B－5・6区から検出された住居跡である。西側が調査区外に及んでいることから全体の規模、平面形は不明である。北SB14と切り合い関係にあり、北SB14を切っていると考えられる。主柱穴はB－B'間の1番目と4番目の柱穴を想定した。主柱穴間の距離は、3mを測る。主柱穴の深さは、床面から40cmを測る。炉は検出されなかった。掘り方は、東側壁際に幅約1m、長さ3mの掘り込みがみられた。中央が高く、その周囲が掘り窪められた掘り方の一部と考えられる。中央には厚さ4cmの黒褐色土に黄色土のブロックが混ざる床面がみられた。第65図44～46、第66図47～49の土器が出土している。そのうち45、46、48、69は、床直上から出土している。

北 SB11（第 47 図）

北調査区の A・B－7・8 区から検出された住居跡である。西半が調査区外に及んでいることから全体の規模、平面形は不明である。北 SB09 と切り合い関係にあり、北 SB09 に切られていると考えられる。主柱穴は明確ではない。不整形であり複数の住居跡等の遺構が重複している可能性がある。やや北寄りから炉を検出した。炉跡は直径約 40cmを測る。

北 SB13（第 41 図）

北調査区の B－8・9 区から検出された住居跡である。北 SB02 と北 SB09 に切られていると考えられる。主柱穴は明確ではない。炉は検出されなかった。西側壁際に幅約 0.5 ～ 0.9m、深さ 10cmの掘り込みがみられた。中央が高く、その周囲が掘り窪められた掘り方の一部と考えられる。

北 SB14（第 43 図）

北調査区の B－6・7 区から検出された住居跡である。規模は、南北約 6m、東西は明確でない。北 SB05、北 SB10 と切り合い関係にあり、北 SB05 を切り、北 SB10 に切られていると考えられる。主柱穴は E－E' の 1 番目と 3 番目のピット、G－G' の 1 番目と 2 番目のピットを想定した。主柱穴間は、E－E' が 3.6m、G－G' が 2.7m を測る。主柱穴の深さは、40 ～ 50cm を測る。北側から炉を検出した。炉は直径約 50cmを測る。北側から東側の壁際に幅約 0.8 ～ 1.1m、深さ 20cmの掘り込みがみられた。中央が高く、その周囲が掘り窪められた掘り方の一部と考えられる。

北 SB15（第 47 図）

北調査区の C－6・7 区から検出された住居跡である。規模と平面形は明確でない。北 SB09 と、北東側にある北 SF01 と北 SX05 に切られていると考えられる。主柱穴は明確ではない。中央やや東寄りで炉跡を検出した。炉は直径約 35cmを測る。南側に焼土が分布し、近接して第 66 図 51 の土器が出土している。その他、第 66 図 50、第 67 図 52 の土器が出土している。

②北調査区　土坑（SF）

北 SF01（第 47 図）

北調査区の C－7 区から検出された土坑である。北 SB15 内にあり、北 SX05 を切っている。SB15 との関係は明確ではない。長軸 2.5m、短軸 1.2m を測る。遺構確認面からの深さは、44cmを測る。断面形は、底面がやや平らな形状を示す。覆土は黒褐色土である。遺構の上面から第 67 図 55 の土器が出土しているが、北 SB15 に関係する遺物の可能性がある。

③北調査区　小穴（SP）

北 SP67（第 61 図）

北調査区の C－9 区から検出された小穴である。直径 58cmの円形を呈し、深さは 30cm を測る。第 67 図 53 の壺の口縁部が出土している。

北 SP103（第 61 図）

北調査区の B－9 区から検出された長軸 90cm、短軸 70cm、深さ 45cmを測る小穴である。小穴の縁から第 67 図 59 の土製紡垂車が出土した。

④北調査区　性格不明遺構（SX）

北 SX04（第 62 図）

北調査区の A・B－9・10 区から検出された遺構である。規模は、長軸 1.6m、短軸 1.2m を測る。底面は半凹で、深さは最深部で 20cm を測る。覆土は黄褐色土が混じる黒褐色土である。この遺構からは、第 67 図 61 の器が出土している。

北 SX05（第 49 図）

北調査区の A－6・7 区から検出された遺構で、北 SF01 と切り合い関係があり、SF01 に切られていると考えられる。規模は、長軸が 1.6m、短軸が 1.5m を測る。深さは最深部で、20cm を測る。この遺構からは、第 67 図 62 が出土している。

⑤南調査区　竪穴住居跡（SB）

南 SB01（第 50 図）

南調査区の E－16 区から検出された住居跡である。西半が調査区外に及んでいることから、全体形と規模は明確ではないが、南北の長さは約 4.7m を測る。主柱穴は A－A′ 間、B－B′ 間のピットを想定した。主柱穴間の距離は、A－A′ 間で 2.3m、B－B′ 間で 2.2m を測る。主柱穴の深さは、床面から 24cm を測る。炉跡は、2 か所で検出された。西側のものが長径 40cm、東側のものが長径 44cm を測る。ピットの並びが重複していることと、炉跡が 2 つあることから住居の建て替えが考えられる。第 68 図 84・85 の土器が出土している。

南 SB02（第 51 図）

南調査区の E－17・18 区から検出された住居跡である。南調査区の南西隅にあり、住居跡の大部分が調査区外に及んでいるため、全体の規模と形状は不明である。炉跡は 2 か所検出した。北側の掘り形の形状から、建て替えや遺構の重複が考えられる。第 68 図 86 ～ 90 の土器が出土している。

南 SB03（第 52 図）

南調査区の F・G－17・18 区から検出された住居跡である。南側が調査区外に及んでいるため、全体の規模と形状は不明である。主柱穴は、B－B′ 間、C－C′ 間の 1 個目と 4 個目のピットを想定した。主柱穴間の距離は B－B′ 間で 3.5m、C－C′ 間で 3.3m を測る。主柱穴の深さは 15 ～ 45cm とばらつきがある。炉は中央やや西寄りにあり、長径 50cm を測る。炉跡では南側に 3cm 程高くなった土手状の構造がみられた。また、東側に 2 か所の焼土がみられた。北側に不整形な状況がみられ、建て替えや遺構の重複が考えられる。

南 SB04（第 53 図）

南調査区の F－16・17 区から検出された住居跡である。長軸 5.7m、短軸 4.2m を測る。主柱穴は、B－B′ 間、C－C′ 間のピットを想定した。主柱穴間の距離は B－B′ 間が 3.2m、C－C′ 間が 1.6m を測る。主柱穴の深さは C－C′ 間のものは 30cm を測る。B－B′ 間のものは 15 ～ 45cm とばらつきがある。炉跡は、中央やや西よりに 2 か所ある。掘り方は、中央が高く周囲が 10cm ほど深くなっていて、中央が高くその周囲が掘り窪められた掘り方を示している。

南 SB05（第 54 図）

南調査区の D・E － 12・13 区から検出された住居跡である。西側が調査区外に及んでいるが、一辺が 5m の正方形を呈すと考えられる。主柱穴は、B － B′ 間を想定した。直行する柱は不明である。主柱穴間は 2.4m を測る。主柱穴の深さは、掘り方で 16 ～ 24cm を測る。炉跡は、中央やや北寄りにあり、長径 36cm を測る。掘り方は、中央が高く周囲が 10cm ほど深くなっており、中央が高くその周囲が掘り窪められている。第 68 図 91 ～ 95 の土器が出土している。そのうち 91 と 92 は壺と瓶の後円部が入れ子の状態で出土した。92 の甕の口円部が下向きに伏せて置かれ、その内側に 91 の壺の口円部が上向きで、差し込むような形で入れ子になっていた。

南 SB06（第 54 図）

南調査区の北西隅、D － 12、E － 12・13 区から検出された住居跡である。南 SB05・07 と切り合い関係にある。南 SB07 を切り、南 SB05 に切られていると考えられる。北側と西側が調査区外に及び南側は、南 SB05 に壊されており、規模、形状は不明である。炉はやや北寄りで検出された。主柱穴は明確ではない。第 68 図 96 の土器が出土している。

南 SB07（第 54 図）

南調査区の E － 13 区から検出された住居跡である。南 SB05・06 に切られていると考えられる。主柱穴は、E － E′ 間とそれに直行するピットを考えているが、明確ではない。ピットの配列や周囲に不整形な構造がみられることから、建て替えや複数の遺構が重複している可能性がある。掘り方は、中央が高く周囲が 10cm ほど掘り窪められている。

南 SB09（第 55 図）

南調査区の E － 14・15 区から検出された住居跡である。規模は長軸 5.8m、短軸 4.6m を測り、平面形は小判型を呈す。主柱穴は、B － B′ 間、C － C′ 間と F15 グリットの南側のピットを想定している。主柱穴間の距離は、B － B′ 間で 3.2m、C － C′ 間で 2.2m を測る。主柱穴の深さは、掘り方で 12 ～ 16cm を測る。炉跡は中央にあり、長軸で 60cm を測る。南側壁際にも炉跡があり住居跡が重複している。掘り方は、中央が高く周囲を掘り窪めている。第 68 図 97、第 69 図 98 ～ 102 の土器が出土している。

南 SB13（第 56 図）

南調査区の H・I － 15 区から検出された住居である。規模は長軸 5.1m、短軸 4.4m を測り、平面形は小判型を呈す。この住居跡は、南東隅に風倒木による撹乱が及ぶだけで、遺構の重複が多い本遺跡の中で、遺構の重複がみられない数少ない遺構の一つである。遺構の北東側と、北西から西側にかけて壁際に幅約 20cm、深さ約 8cm の壁溝があった。主柱穴は B － B′ 間、C － C′ 間とこれに直行する東南隅のピットを想定している。主柱穴間の距離は、B － B′ 間で 2.5m、C － C′ 間で 2.1m を測る。主柱穴の深さは、床面から 36 ～ 43cm を測る。炉跡は中央やや北寄りから検出した。長径 40cm を測るが、炉付近が撹乱を受けて不整形であった。西側の壁溝から第 69 図 103 の土器が出土している。

南 SB14（第 57 図）

南調査区の G － 12 区から検出された住居跡である。北・東側が調査区外に及んでおり、全体の規模と形状は明確ではない。主柱穴は B － B′ 間の 2 個目と 5 個目のピットを想定した。主柱穴間の距離は 3.2m を測る。主柱穴の深さは、掘り方で 12 ～ 16cm を測る。炉跡は 3 か所にみられた。部分的に黒褐色土と黄褐色土を混合した厚さ 5cm の貼床がみられた。

⑥南調査区　掘立柱建物跡（SH）

南 SH01（第 58 図）

南区のE－15・16区から検出された掘立柱建物跡で、南SB04・09と重複しているが、切り合い関係は不明である。梁行1間×桁行3間、規模3.6m×7.0mを測る。重複するピットがみられることから建て替えの可能性がある。

南 SH02（第 59 図）

南区のG－13・14・15区から検出された掘立柱建物である。遺構の北東側が調査区外に及んでおり、全体の規模は明確ではない、梁行1間の建物と考えられるが、ピットの分布状況から建て替え、遺構の重複が考えられる。

⑦南調査区　性格不明遺構（SX）

南 SX01（第 62 図）

南区のD－14・15、E－14区から検出された遺構である。長軸2m、短軸1.3m、深さ20cmを測る不整形の遺構である。形状からみて、複数の遺構が重複している可能性がある。第69図109、110の土器が出土している。

（2）遺物

①縄文土器・石器

縄文土器（第 63 図）

今回の調査で出土した縄文土器は、すべて破片であり、テンバコ（650㎜×450㎜×100㎜）約1/3程である。そのうち15点について報告する。縄文土器の出土状況は、北区からの出土が比較的多い傾向があり、また、出土地点に偏りは見られるが、弥生時代の遺構覆土からの出土が多く、縄文土器の出土分布から縄文時代の遺構分布等の復元は難しいと思われる。器形は概ね深鉢になるものと考えられる。時期は中期後半～後期と考えられる。

1～**3**は口縁部下に横位の隆帯があり、端部から隆帯の間に縄文を施文した口縁部である。**1**の端部は肥厚する。隆帯は半分剥落している。RLの縄文が施されている。色調は黄橙色で、胎土には長石が含まれる。**2**は、わずかに外反を見せる口縁部である。色調は褐色で、胎土には砂粒を多く含み、長石が含まれる。**3**は、わずかに内湾するものである。LRの縄文が施されている。色調は橙褐色で、胎土には長石が含まれ、砂粒が多く含まれる。**4**は、貼り付け隆帯に連続する刺突を加えたものである。色調は淡褐色で、胎土には長石が多く含まれる。**5**は、摩耗が著しい胴部である。形状は上に行くに従い外反する。器厚は薄手である。粘土紐の貼り付けによる「∩」字形の太い隆帯文が施されている。さらに、隆帯の内側に沿って半裁竹管の外皮を使ったと考えられる沈線がめぐり、隆帯上には幅の広い刻み目状の刺突が施されている。色調は褐色で、胎土には長石、5㎜程度の小礫が含まれ、赤色粒子が多く含まれる。**6**は、摩耗が著しい薄手の胴部である。2条の沈線が懸垂し、沈線間には縄文が施されている。色調は淡褐色で、胎土には5㎜程度の小礫が含まれ、赤色粒子が多く含まれる。**7**は地文にLRの縄文を施し、半裁竹管によると考えられる条線を斜位に施文した胴部である。色調は褐色で、胎土には石英が少量含まれ、長石と5㎜程度の小礫が含まれる。**8**は、丸みを帯びた口縁部で小振りな深鉢と考えられる。いわゆる補修孔が見られ、両側から穿孔されている。沈線文の間にはLRの縄文が充填されている。色調

は褐色で、胎土には長石、黒雲母が含まれる。**9**は、内湾し肥厚するII縁部である。口縁直下は無文で、次に横位の沈線があり、その下にはLRの縄文が施されている。色調は暗褐色で、胎土には長石が含まれる。**10**は内湾するII縁部であるが、摩耗が著しい。口縁端部は内側につまみ出されている。口縁直下は無文で、次に横位の沈線があり、そのドには縄文が施されている。色調は褐色で、胎土には赤色粒子が多く含まれる。**11**は、波状を呈するII縁部である。II縁端部は親指と人差し指でつまむようになでて成形されているようである。竹管による連続した刺突文が2列見られる。色調は橙褐色で、胎土には長石、3mm程度の小礫が含まれる。**12**は、山型の波状を呈する口縁部である。口縁端部に沿って巻貝によると考えられる2重の沈線文が見られ、口縁端部と沈線の間には縄文（巻貝回転による疑似縄文か）が施されている。また、頂部には横に並んで3つの刺突（頂部は深く、左右は浅い刺突）が見られる。色調は暗褐色で、胎土には長石と砂粒が多く含まれる。後期後葉～後期末と考えられる。**13**は胴部で、地文にRLの縄文を施し、2条の蛇行する沈線文が斜位に施文されている。色調は褐色で、胎土には長石が含まれる。**14**は、薄手の胴部で小型な製品と考えられる。連弧状の沈線文内にRLの縄文が充填されていると思われる。色調は褐色で、胎土には長石が含まれ、5mm程度の小礫が少量含まれる。**15**は、外反する胴部である。縄文？が施されている。色調は褐色で、胎土には赤色粒子が含まれる。その他、図示できなかったが、口縁部に付けられた突起の一部と考えられる、丸い突起のあるボタン状の部分破片と沈線間に縄文を充填する文様を持つ胴部破片があり、どちらも後期前葉（堀之内式）のものと考えられる。

石器（第63図）

石器については、製品5点と黒曜石の石材1点について報告する。今回は出土量が少ないため、時代が異なるものが含まれている可能性が高いが、便宜的に、石器はすべてまとめて縄文時代の項で扱うこととした。

16・17は、スクレーパーである。**16**は、B－6区北SB14覆土中から出土した。黄茶色頁岩製の片刃のもので横断面は三角形を呈する。刃が見られる縁辺は、ごくわずかに湾曲を見せるが直線的である。なお、刃は細かいもので、使用痕ないしは剥離痕と言った方が妥当であると考えられる。法量は最大長4.05cm、最大幅1.58cm、最大厚0.95cm、重量5.20gである。**16**は、II石器時代のものである可能性がある。**17**は、頁岩製で水滴のような平面形態をとる片刃のものである。刃は両面から付けている。上部は欠損した可能性がある。法量は最大長3.87cm、最大幅2.83cm、最大厚0.84cm、重量10.25gである。**18**は砂岩製のもので、凹石及び砥石として使用されている。不整形の自然石を利用している。凹みは片側のみに6個あり、主に尾根状に高くなった部分に見られる。そして、その面と反対面及び側面には、滑らかに抉れた面が6か所見られる。さらに、長さ2～7cm程度の同じ方向を向いた傷のような痕が数本見られるが、これらも何らかの使用痕であると思われる。法量は最大長30.2cm、最大幅15.9cm、最大厚（高）11.7cm、重量7.1kgである。**19**は、砂岩製の凹石である。厚い板状の石を利用している。破損しているが、法量は現状で最大長17.2cm、最大幅10.5cm、最大厚3.0cm、重量0.9kgである。凹みは、欠けた部分にも3個残っており、4個が見られる。面は表裏とも石皿のように使用された可能性がある。**20**は、砂岩製の敲石である。わずかに扁平な丸石を利用している。1つの面の直径約5～6cmが敲かれてつぶれている。敲かれている面の反対面は磨り面の可能性がある。法量は最大長12.1cm、最大幅10.7cm、最大厚9.4cm、重量1.6kgである。手に持って使うものと考えられる。**21**は黒曜石の塊で、縁辺部は鋭いが積極的な使用痕が見られないため石材として報告する。平面形及び断面形はいずれも三角形を呈する。裏面の剥離痕は意図的なものではなく、傷である可能性が高い。SB02の南側の壁際から出土している。法量は最大長6.85cm、最大幅5.48cm、最大厚2.94cmである。

②弥生土器・古式土師器（第64～69図）

22～**27**は、北SB01出土である。**22**は壷の頸部から胴上半片で、外面には頸部で横ナデ、胴部にはナデが施される。内部はヘラ状工具によるナデが施される。**23**は台付甕で、底部以下を欠損する。ほぼ全面にハケが施され、口縁部のみナデ消しされている。外面の胴下半部には、炭化物の付着が認められる。**24**・**25**は高坏で、どちらも口縁部と脚下半を欠損する。**24**は、坏部内外面に丁寧なミガキが施される。脚部外面にも丁寧なミガキが施され、内面にはハケが施される。また、内面には炭化物の付着が認められる。**25**は外面にはミガキが施され、脚部内面はハケが施される。**26**・**27**は、どちらも円窓をもった高坏の脚部片である。**26**は、内外面とも丁寧なミガキが施される。**27**は、3箇所に円窓をもつ。外面にミガキが施され、内面は横ナデが施される。

28～**33**は、北SB02出土である。**28**は、折返口縁壷である。**29**は、折返口縁壷の口縁部片である。折返端部に縄文と棒状浮文が貼付され、端部下端にはキザミが施される。内面では櫛扇形文が施される。**30**は、複合口縁壷の口縁部と考えられる。上部はハケ調整の後、縄文を施文し、下部にはミガキが確認できる。**31**は、壷頸部片である。外面は上から順にハケ、ミガキ、縄文が施される。内面は、縄文とミガキが施される。**32**は、胴下半に最大径をもつ、やや下膨れの壷の下半部片である。外面にはハケが、内面にはナデが施される。**33**は、折返口縁壷の口縁部片である。頸が短く太いタイプで、折返端部に明瞭なキザミが施される。外面は、口縁部含め全面にハケが施される。内面は、口縁部周辺にハケが施され、胴部にはミガキが施される。

34は、北SB05出土の高坏脚部片である。脚は短く、端部で広がるタイプで、3箇所に円窓をもつ。外面はミガキが施され、内面はナデが施される。

35は、北SB08出土の複合口縁壷の口縁部片である。外面端部に縄文、端部下端にはキザミが施される。内面には、櫛扇形文が施される。

36～**43**は、北SB09出土である。**36**は、複合口縁壷の口縁部片である。外面端部と内面に縄文が施される。**37**は壷の口縁部片で、外反して開くことから、複合口縁壷だと考えられる。**38**は台付甕の口縁部片で、口縁端部には細かいキザミが施され、その他は内外面ともに細かいハケが施される。**39**はS字状口縁甕の胴上半部で、口縁のS字形態はほとんど形骸化しており、肩部の張りもない。口縁部内外面は横ナデされ、外部にはS字状口縁甕特有の縦・横位のハケが施される。内面はヘラ状工具によるナデが施される。**40**は、甕の口縁部片である。比較的小型のタイプで、口縁部には、ハケとナデ消しが施される。**41**は台付甕で、ほぼ完形である。外面は、全面ハケ調整後、口縁部と接合部がナデ消しされている。内面は、口縁部が横ナデ、他はハケが施される。外面の胴下半部には、炭化物の付着が認められる。**42**は、口縁部と脚部を欠損する台付甕である。外面は、ハケが施される。内面は口縁部にハケ、胴部にナデが施される。外面の胴下半部では、炭化物の顕著な付着が認められる。**43**は鉢の口縁部片で、外面には幅広のハケが施され、内面にはミガキが施される。

44～**49**は、北SB10出土である。**44**～**47**は、壷である。**44**は胴下半部で、下半に明瞭な稜線と最大径をもつ。外面は磨滅が著しいが、胴中位に羽状に展開する縄文が確認できる。内面は、ナデと底部周辺にはハケが施される。**45**は、頸部以上を欠損する。胴下半の稜線を挟み、上部にハケ、下部にはミガキが施される。内面にはナデが施される。**46**は、口縁部を欠損する。胴中位に最大径をもった、球形を呈す。外面は下半までハケ、下半から底部にかけてはミガキが施される。内面は、全面ハケである。**47**は、口縁部と底部を欠損する。外面は、胴上半にハケ、下半にミガキが施される。内面は、ナデが施される。**48**は、完形の台付甕である。外面は、口縁端部に明瞭なキザミが施され、全面にハケが施される。接合部のみナデ消されている。内面は、口縁部にハケ、胴部にナデ、脚部にナデとハケが施される。内面の胴下半部には、炭化物の付着が認められる。**49**は、台付甕の脚部片である。外面には比較的細かいハケが施され、内面は胴部でハケ調整後ナデが施されている。脚部内面ではナデのみである。

50・51 は、北SB15出土である。**50** は複合口縁壺の口縁部片で、外面はハケ調整後、一部ナデ消されており、下端には明瞭なキザミが施される。内面には、縄文が施され、上部にはS字状結節文が施される。**51** は、口縁部を欠損する大型の壺である。胴下半に最大径(47.0cm)を有す。外面は胴上半にハケ、下半に幅広のミガキが施される。ミガキはやや乱雑で、ミガキ調整前のハケ目が至る箇所で確認できる。内面は板状工具と考えられる幅広のナデが施される。

52 は、北SF01出土の壺である。全体に磨滅が著しいが、胴上半には櫛刺突羽状文が、下半底部周辺にはミガキが確認できる。

53 は、北SP67出土の複合口縁壺の口縁部片である。複合口縁部の外面は、縄文を羽状に施し、更にその上に棒状浮文が貼付される。口縁上端部は横ナデされ、下端部にはキザミが施される。棒状浮文の中央にはキザミが施される。内面には櫛波状文が11段に亘って描かれている。複合口縁部には焼成前の穿孔が一箇所ある。

54 は、折返口縁壺の口縁部片である。外面端部には、棒状浮文の痕跡が確認できる。端部下端には、キザミが施される。内面には、櫛扇形文が施される。焼成前の穿孔が3個ある。

55 は、北SF01出土の台付甕脚部片である。外面はハケが施され、一部ナデ消されている。内面はナデが施される。

56 は、複合口縁壺の口縁部片である。やや内彎して立ち上がり、外面にはハケが施される。

57 は、折返口縁壺の口縁部片である。外面端部には細いキザミとハケが施され、内面には縄文がS字状結節文を挟み2段に亘って施される。

58 は、甕の口縁部片で、わずかにハケ目が確認できる。

59は、北SP130出土の土製紡錘車である。平面形は円形、断面は三角形を呈す。最大径8.1cm、高さ3.9cmを測る。穿孔径は、上部で1.0cm、下部で1.1cmを測る。上部では多数の指頭痕が確認され、下部では左回りの指頭痕が確認できる。

60・62 は、北SX05出土である。**60** は、壺の頸部片である。上からハケ(一部ナデ消し)、櫛刺突羽状文、S字状結節文、ハケが施される。内面は、横ナデが施される。**62** は高坏の脚部片で、外面にはわずかにミガキが確認できる。3箇所に円窓をもつ。

61 は、北SX04出土の壺で、頸部から上を欠損する。外面上部には縄文が、それ以下ではミガキが施される。内面はナデが施される。

63～83 は、北調査区の遺構外出土である。**63** は、C－7区出土の複合口縁壺の口縁部片である。やや内彎して立ち上がり、細かいハケ調整後、細い棒状浮文を貼付している。**64** は、C－6区出土の折返口縁壺の口縁部片である。外面はやや磨滅気味であるが、折返端部には細かいキザミが確認できる。内面には、櫛波状文(押し引き状)が施される。**65** は、A－7区出土の折返口縁壺の口縁部片である。端部には縄文が、端部下端にはキザミが施される。内面には櫛波状文が施される。**66** は、B－4区出土の折返口縁壺の口縁部片である。端部にキザミが施される。**67** は壺の頸部片で、ミガキと櫛刺突羽状文が施される。**68** は壺の胴部から肩部片で、頸部は横ナデ、肩部は明瞭な櫛刺突羽状文(2段以上)が施される。内面は横ナデが施される。**69** は壺の胴下半から底部片で、外面は磨滅が著しいが、ミガキが確認できる。内面は胴部にナデ、底部にハケが施される。**70** は口縁部を欠損する壺で、肩部に櫛横圧文が施される。**71** は台付甕口縁部片で、口縁端部にはキザミが密に施される。外面にはハケが施される。内面口縁部にはハケが、胴部にはナデが施される。**72** は台付甕口縁部片で、端部にはキザミが施され、その他は幅広のハケが施される。**73** は台付甕口縁部片で、内外面ともハケが施される。**74** は鉢の口縁部片で、端部が横ナデされる以外は内外面ともハケが施される。**75・76** は台付甕の脚部片で、外面はハケ、内面はナデが施される。**77** は脚部片で、やや外反すること、ハケの他にミガキが施されることから、高坏の脚部だと考えられる。**78・79** は台付甕の接合部片で、外面にはハケが施される。**80** は高坏の接合部片で、ミガキが施される。**81** は高坏の脚部片で、ミガキが施され、端部は横ナデさ

れる。**82**は高坏の接合部片で、円窓をもつ。外面は磨滅してしているが、内面には細かいハケが施される。**83**は、器台の脚部片である。

84・85は、南SB01出土である。**84**は壷の頸部片で、内外面とも磨滅しているが、外面に1.5cm程の棒状浮文が貼付される。**85**は台付甕で、脚部を欠損する。外面は口縁部が横ナデされ、胴部はハケが施される。内面は口縁部と底部でハケが施され、胴部はナデが施される。

86～90は、南SB02出土である。**86**は壷の口縁から頸部片で、外面は磨滅が著しいが、頸部にハケが確認できる。内面は口縁部にミガキ、頸部にはハケが施される。**87**は複合口縁壷の口縁部片で、外面にはハケが施されるが、粘土の貼り付け痕が残る。下端は指頭による押圧が施される。内面は横ナデが施される。**88**は台付甕の脚部片で、内外面ともハケが施される。**89**は広口壷で、底部を欠損する。口縁部の外面以外は、内外面ともミガキが施されるが、一部にミガキ調整前のハケが残る。**90**は、3箇所に円窓を有す高坏の脚部片である。外面はミガキが施され、内面はナデが施される。

91～95は、南SB05出土である。**91**は壷の口縁部片で、ミガキが施され、端部は横ナデが施される。内面は丁寧に横ナデされる。**92**は甕の口縁部片で、外面は口縁部で横ナデが施され、頸部以下はハケが施される。内面は口縁部が横ナデが施され、胴部はヘラ状工具よるナデが施される。**93**は台付甕で、ほどんど胴が張らない。外面はほぼ全面ハケが施され、口縁から頸部にかけナデ消されている。内部は、口縁と底部でハケが施され、胴部はヘラ状工具よるナデが施される。外面の胴下半部には、炭化物の顕著な付着が認められる。**94**は台付甕の胴上半部で、口縁端部にキザミが施され、それ以外はハケが施される。内面は口縁部にハケが施され、胴部はナデが施される。**95**は、高坏の脚部である。

96はSB06出土の小型鉢で、内外面ともミガキが施されるが、一部にミガキ調整前のハケ目が確認できる。

97～102は、南SB09出土である。**97**は折返口縁壷の口縁部から頸部片であるが、口縁端部を欠損する。外面は上から、ハケ、ミガキ、櫛押し引き状の横線が数段に亘って施される。内面は、櫛押し引き状の横線が数段亘って施され、その下はミガキが施される。外面の頸部と、内面の口縁部から頸部にかけ、炭化物の付着が認められる。**98～100**は、壷の底部片である。**101～102**は、台付甕の脚部片である。**101**はハケが主体となるが、底部にはナデが施される。**102**は、内外面ともハケが施される。

103は、南SB13出土の台付甕の脚台部である。脚部が長いタイプで、外面はハケが施され、内面はナデが施される。

104は、南SP36出土の折返口縁壷の口縁部片である。端部にキザミを施し、その他はハケが施される。

105は、南SP48出土の高坏の接合部片で、4段に亘って櫛押圧文を巡らせている。

106・107は、南SP37である。**106**は高坏の坏部で、上半はハケが施され、下半はミガキが施される。口縁端部は、横ナデされる。**107**は高坏の脚部で、5箇所に円窓が付けられている。

108は、南SH02（南SP59）出土の甕の胴部片である。外面は、肩部にS字状結節文と縄文が施され、それ以外はハケが施される。内面は、ヘラ状工具よるナデが施される。

109は、南SX01出土の完形の壷である。胴下半に最大をもち、口縁部はやや内彎して立ち上がる。口縁部から頸部では、ハケ調整後、端部と頸部ではナデ消している。頸部以下では、上から櫛刺突羽状文、S字状結節文、縄文、ミガキが施される。内面は、口縁部に縄文、頸部に横ナデが施される。

110は、南SP44出土の折返口縁壷の口縁部片である。外面は磨滅が著しいが、頸部にはミガキが認められる。内面は、口縁部にS字状結節文と縄文が施され、頸部にはハケが施される。

111～133は、遺構外出土である。**111**はD－2区からの出土である。折返口縁壷の口縁部片で、端部にはキザミが施される。**112**は、G－15区出土の折返口縁壷の口縁部片である。端部の上端と下端の両方にキザミが施される。内面には縄文が施される。**113**は、壷の胴上半部である。比較的細い頸から口縁は直線的に開く。口縁端部は面取りされ、口縁部にはハケ、頸部にはナデ、肩部には櫛刺突羽状文、胴部にはハケがそれぞれ施される。内面は口縁部にハケが施され、他はナデが施される。**114**は

壷の口縁部片で、口縁端部が面取りされ、口縁部はハケ、頸部はナデが施される。内面は、口縁部にハケ、頸部にナデが施される。**115** は壷の頸部片で、頸部には幅広のハケが施され、肩部には長径5mm 程の円形浮文を貼付する。その下には縄文が施される。**116** は壷で、口縁を欠損する。明瞭な稜線はないが、胴下半に最大径をもつ。頸部にはハケが施され、肩部には櫛刺突羽状文が施される。胴部上半はハケが施され、下半から底部にかけてはミガキが施される。**117** はF－15区出土の壷で、頸部以上を欠損する。胴下半がよく張り出したソロバン型を呈す。外面胴上半は格子目を意識したような斜位の交差するハケが施され、胴下半ではミガキが施される。内面胴部はナデが施され、底部周辺でハケが施される。**118** は、F・G－14区出土の甕である。球形状を呈す甕の胴部片である。内外面ともハケが施される。**119** は、C－7区出土の壷の胴部片である。外面は上から櫛刺突羽状文、S字状結節文、ハケが施される。内面は、ナデが施され、指頭痕が確認できる。**120**～**122** は、いずれも壷の底部片である。**120** はE－15区、**121** はF－13区、**122** はD－12区からの出土である。**123** は、D－13区出土の甕の口縁部片である。外面は口縁部で横ナデ、胴部でハケと一部ナデ消しが施される。内面は口縁部でハケ、胴部でナデが施される。口縁部にはわずかに屈曲がみられ、肩部にも若干の張り出しがみられることから、S字状口縁甕の成れの果てであろうか。外面の頸部から肩部にかけ、炭化物の付着がみられる。**124** は、F－14区出土の台付甕の接合部片である。内外面ともハケが施される。**125** は台付甕の接合部で、脚部は細い。**126** は、E－17区出土の高坏の坏部片である。磨滅が著しいが、口縁折返端部にはキザミ目が確認できる。**127** は、F－15区出土の高坏の接合部片である。坏部にはミガキが施され、脚部にはハケが施される。脚部内面には、棒状工具によるナデが施される。**128** は、E－17区出土の高坏の接合部片である。磨滅が著しいが、脚にはハケ目が確認できる。3箇所に円窓をもつ。**129**・**130** は、どちらもF－14区出土の高坏の脚部片である。**129** はミガキが施され、3箇所に円窓をもつ。**131** は、3箇所に円窓をもつ。**131** は、E－13区出土の高坏の脚部片である。外面の調整痕は確認できないが、内面にはハケ目が確認できる。**132** は、F－14区出土の器台の接合部である。脚部内面にはハケが施される。**133** は小型鉢で、底部からやや内彎して口縁部に至る。器面の磨滅が著しいため、調整痕は確認できなかった。

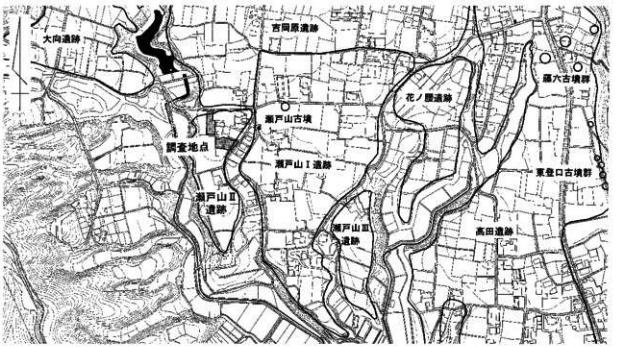
4. まとめにかえて

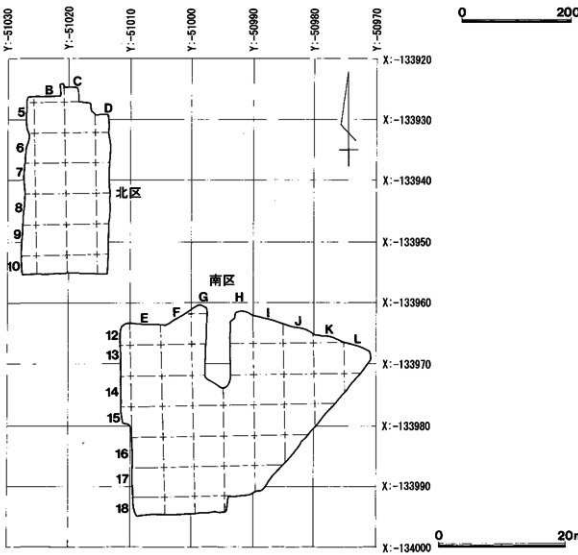
今回の調査地は、全域にわたり過去の攪乱・削平を受けており、遺構の遺存状態が悪い箇所が多々みられたが、弥生時代後期から古墳時代前期までの多数の竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡、土坑など多くの遺構を検出することができた。

北調査区の古墳時代前期の焼失家屋では、出土した炭化材の分析によって、周辺地域の過去の植生、使用された用材の推定等の材料を提供することができた。

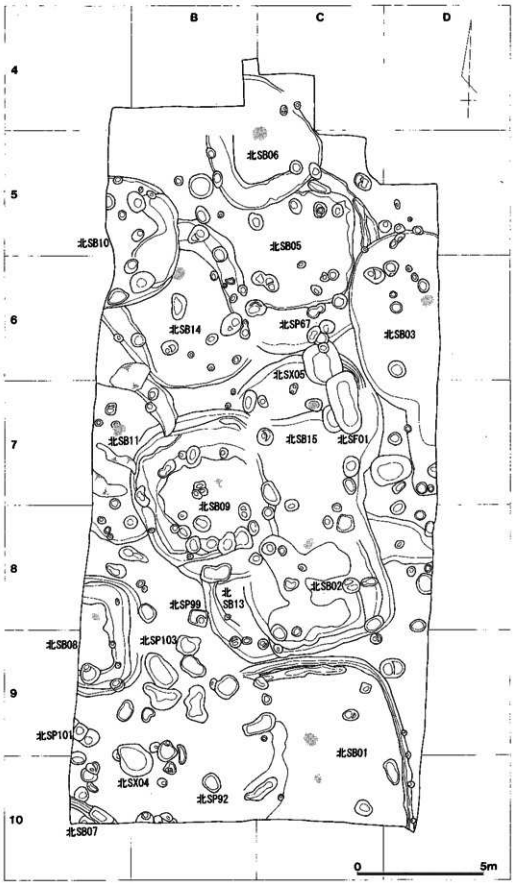
弥生時代の遺構からの出土で、かつ1点のみであったが、旧石器時代（先土器時代）の可能性のある石器が出土した。本報告では縄文時代の項で扱い、「スクレーパー」としたが、旧石器の呼称では「ユーズドフレーク（使用痕のある剥片）」が適当と考えられる。なお、市内において、現在までに旧石器が出土したのは諏ノ口遺跡のみで、ユーズドフレーク1点、スクレーパー2点が、今回調査地点から約400m の地点で出土している。今回のものが旧石器ならば、市内で4点目となる。

弥生時代後期から古墳時代前期のこの地域の段丘縁辺部における集落の構造解明のための資料を得ることができたものと考える。



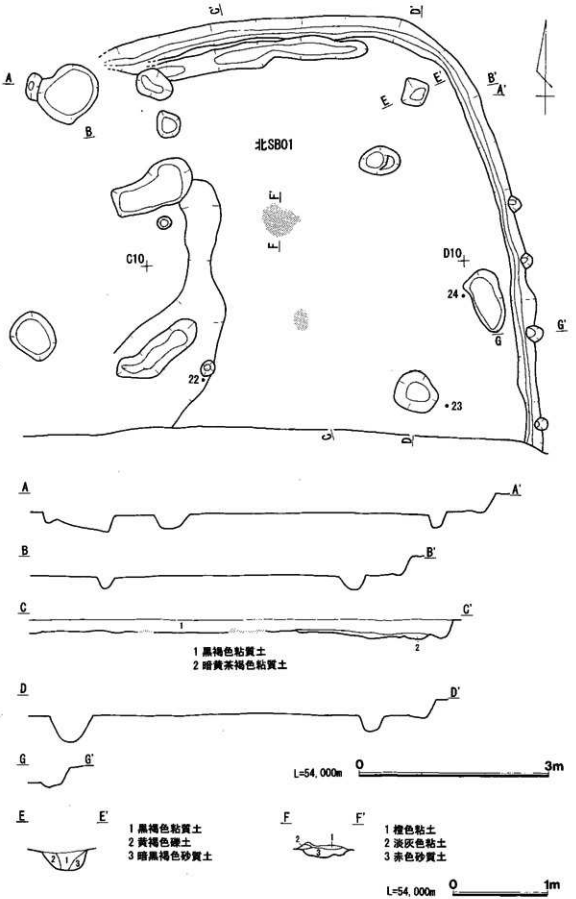


第37図　遺跡位置図・グリッド配置図

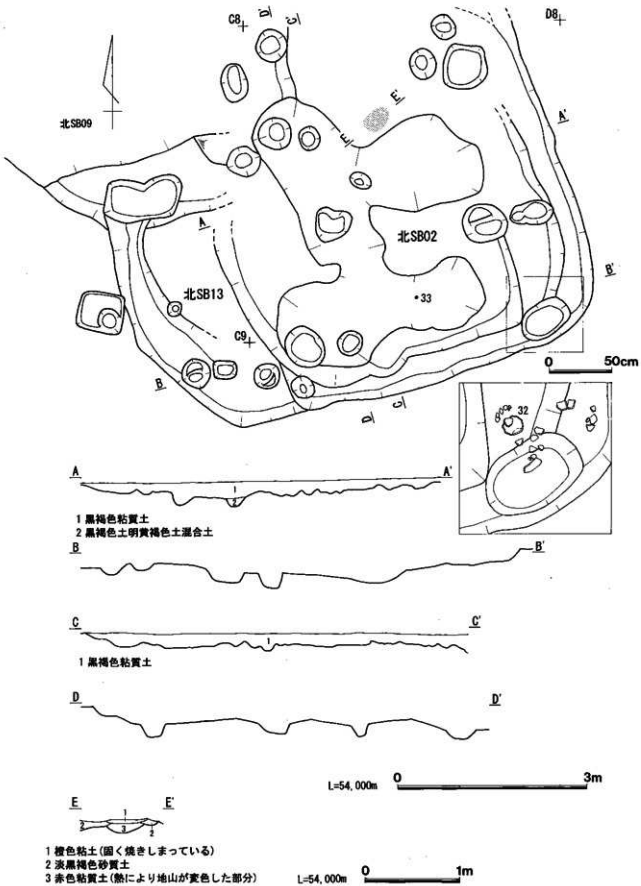


第 38 図　北区遺構全体図

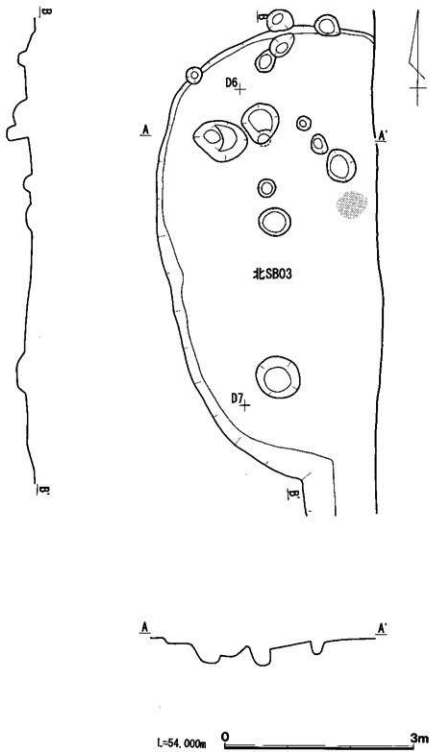
第39図 南区遺構全体図



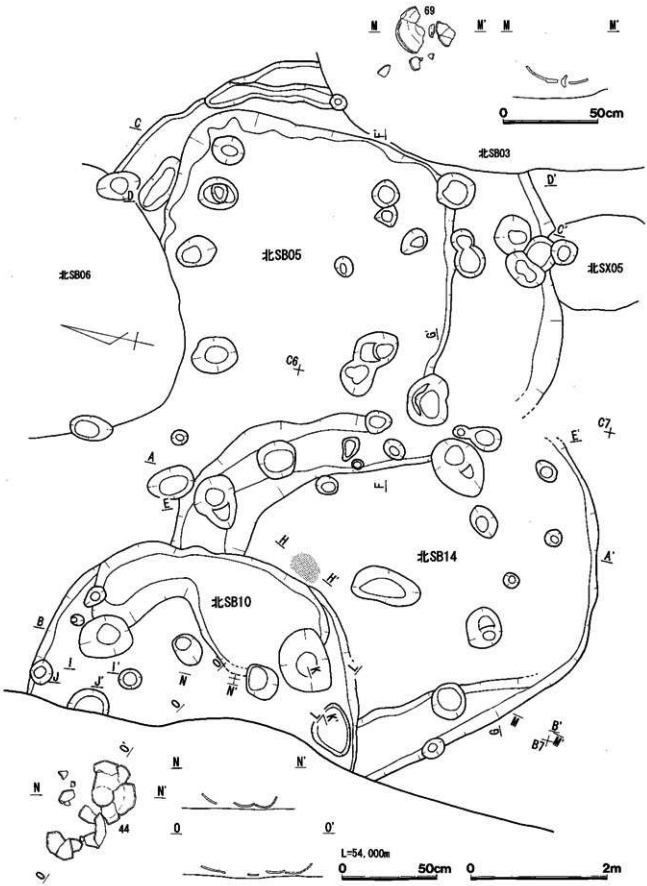
第40図　北SB01実測図



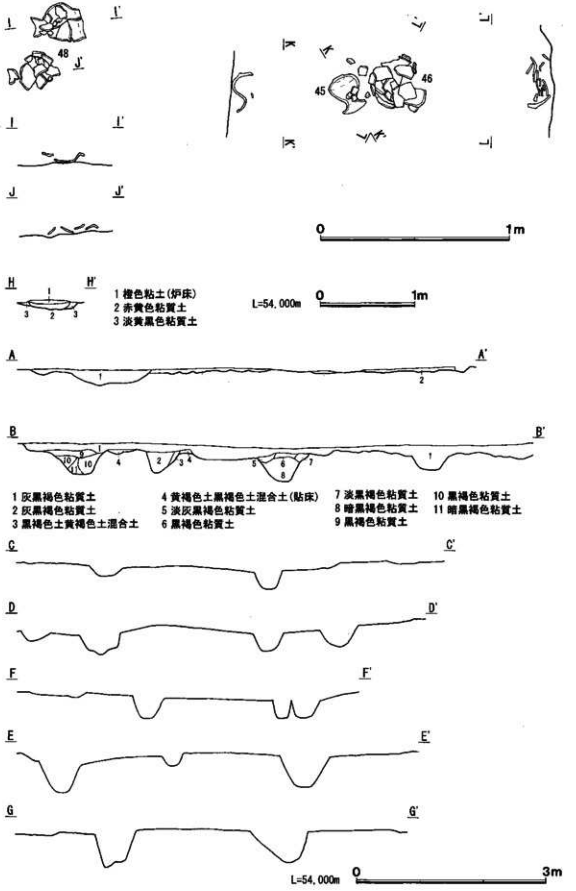
第 41 図　北 SB02 実測図



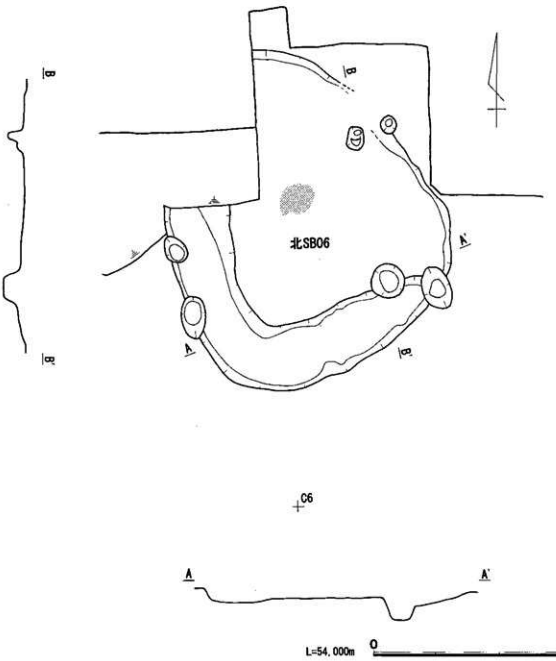
第 42 図　北 SB03 実測図



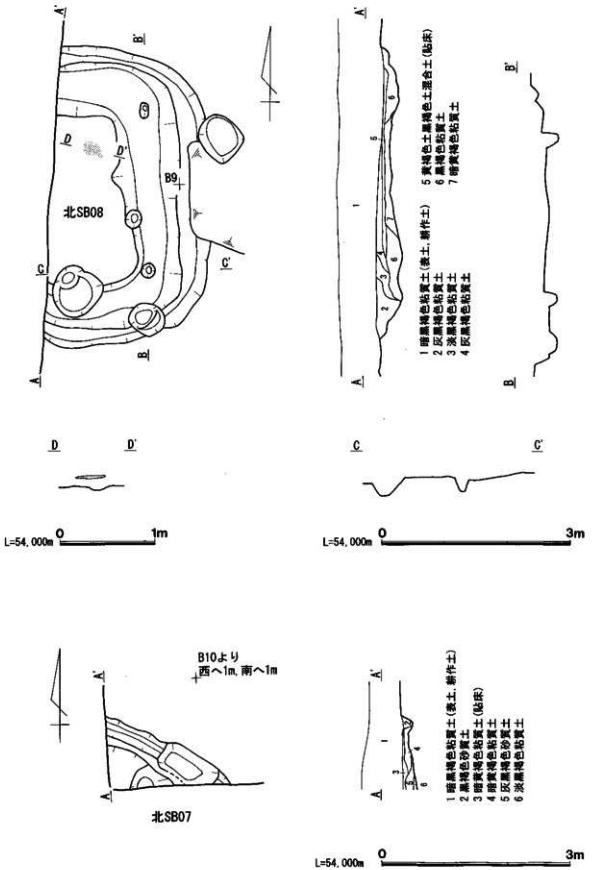
第43図　北SB05・10・14実測図（1）



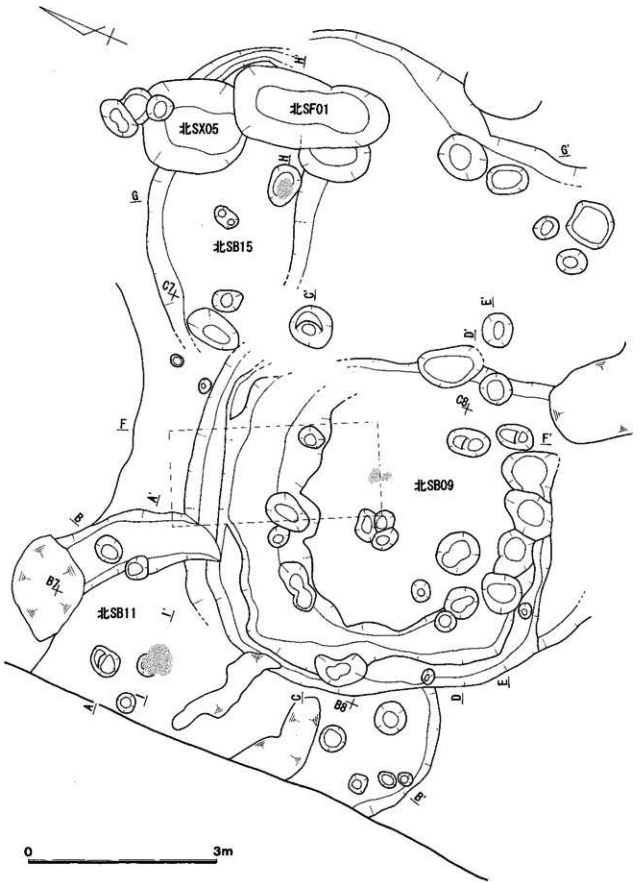
第 44 図　北 SB05・10・14 実測図 (2)



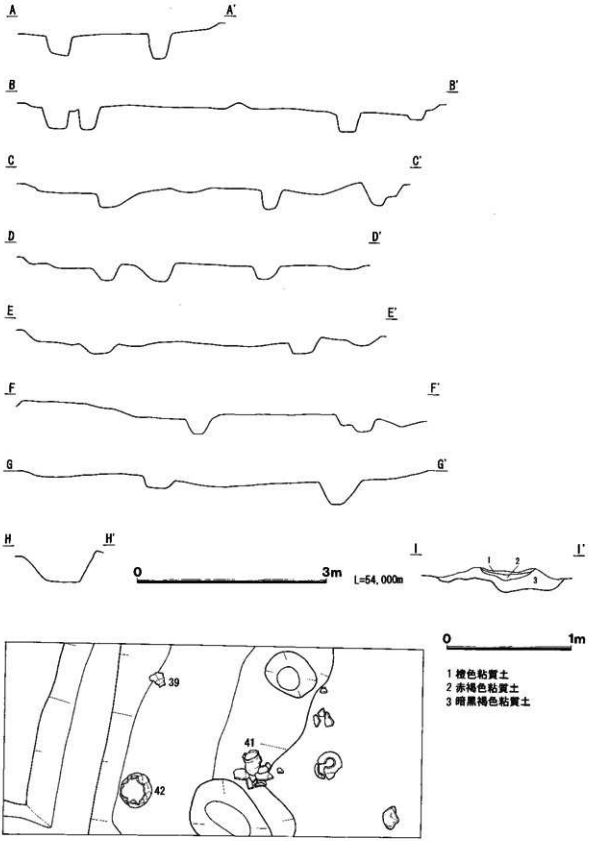
第45図　北 SB06 実測図



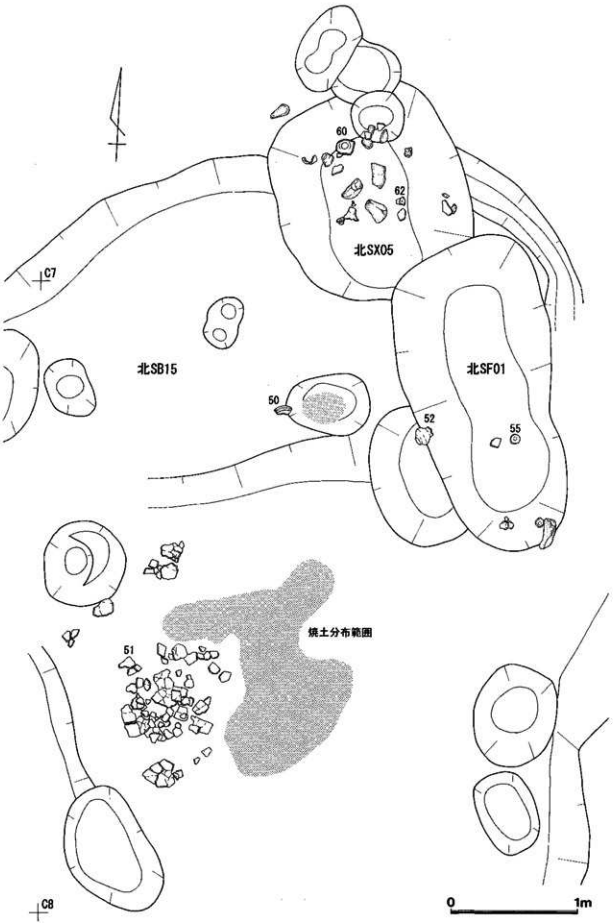
第 46 図 北 SB07・08 実測図



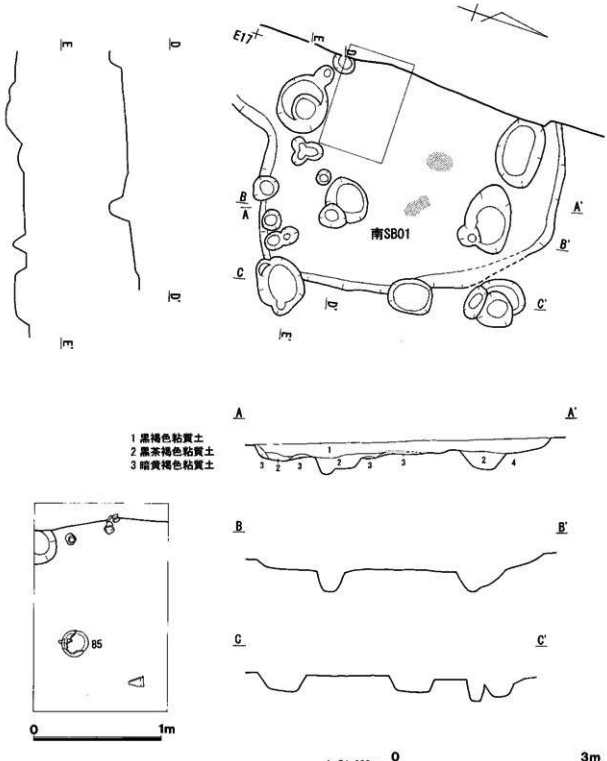
第47図 北SB09・11・15、北SF01、北SX05実測図（1）



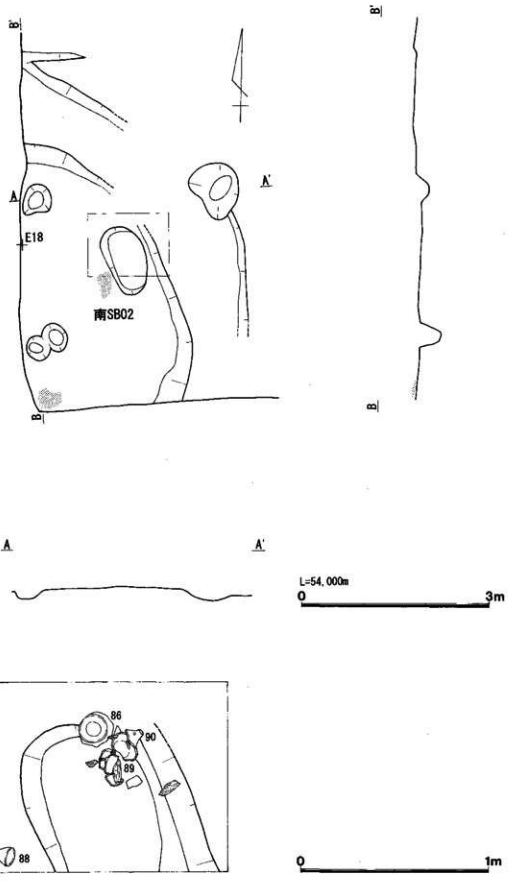
第48図 北SB09・11・15、北SF01、北SX05実測図 (2)



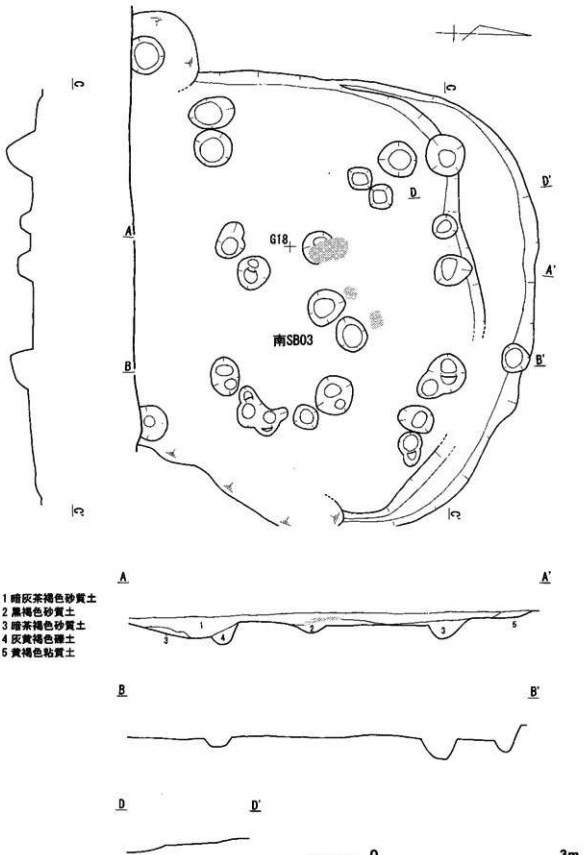
第 49 図 北 SB15、北 SF01、北 SX05 土器出土状況図



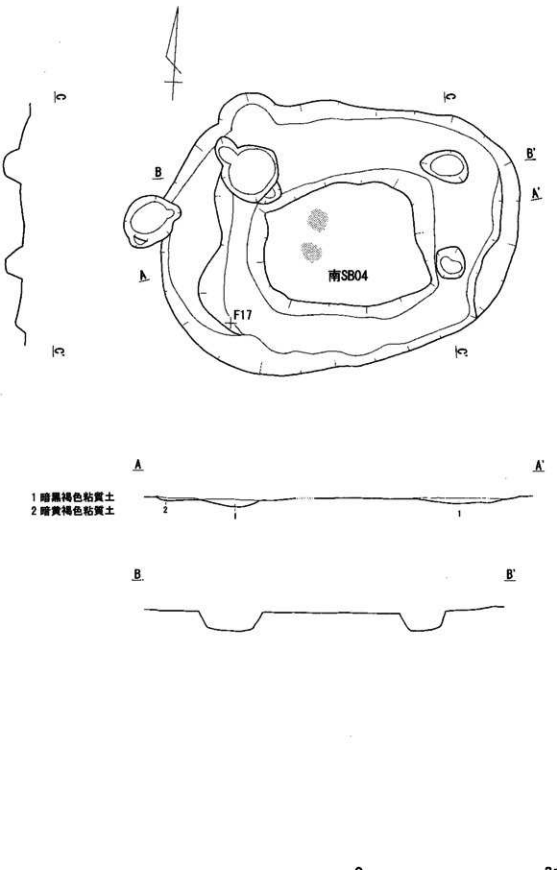
第 50 図 南 SB01 実測図



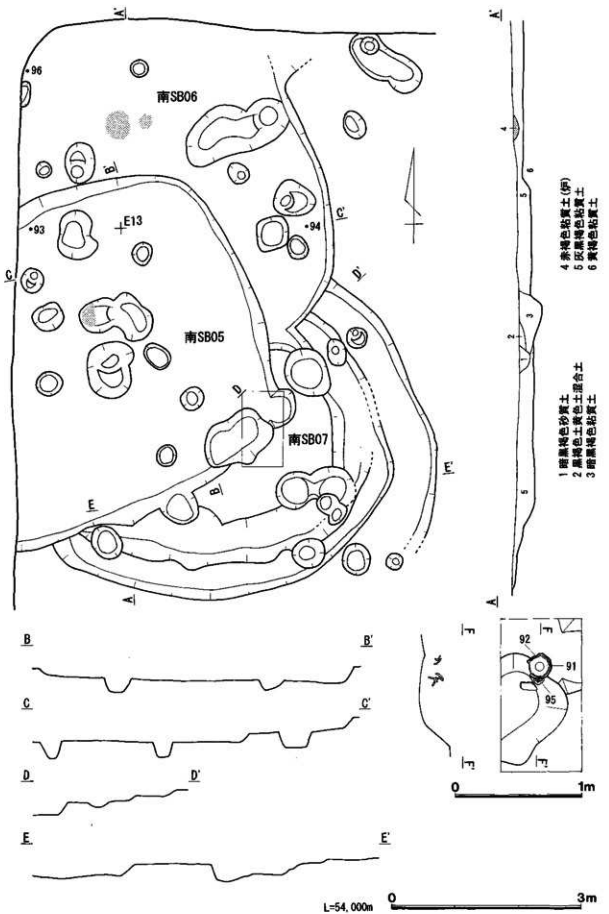
第 51 図 南 SB02 実測図



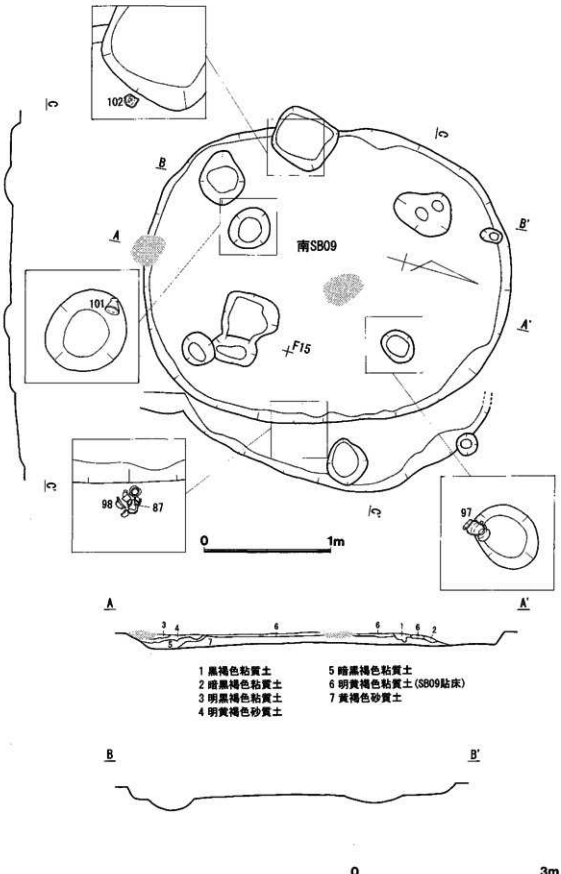
第 52 図 南 SB03 実測図



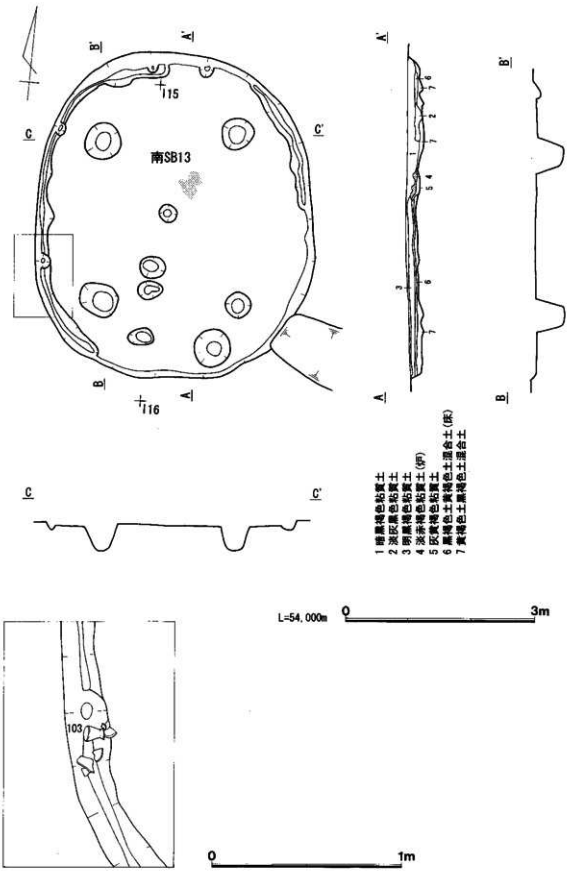
第 53 図 南 SB04 実測図



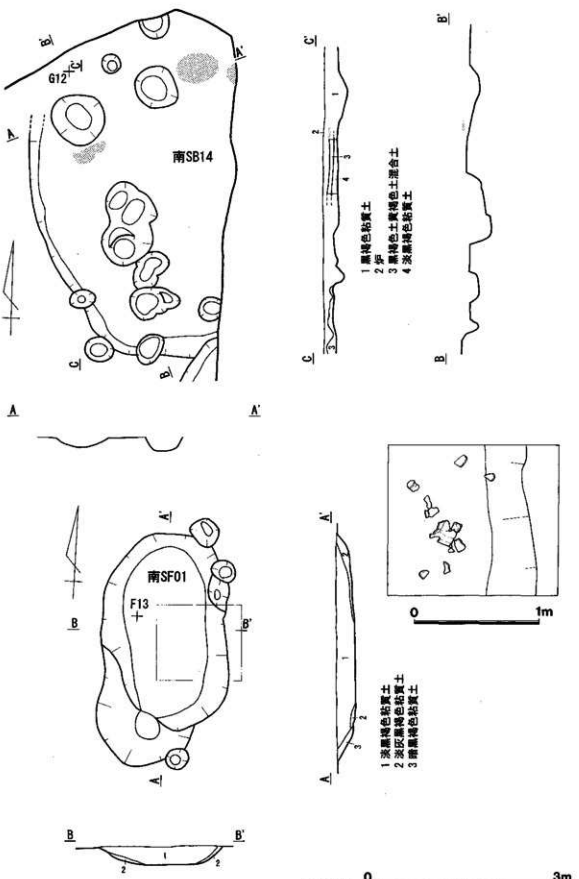
第 54 図 南 SB05・06・07 実測図



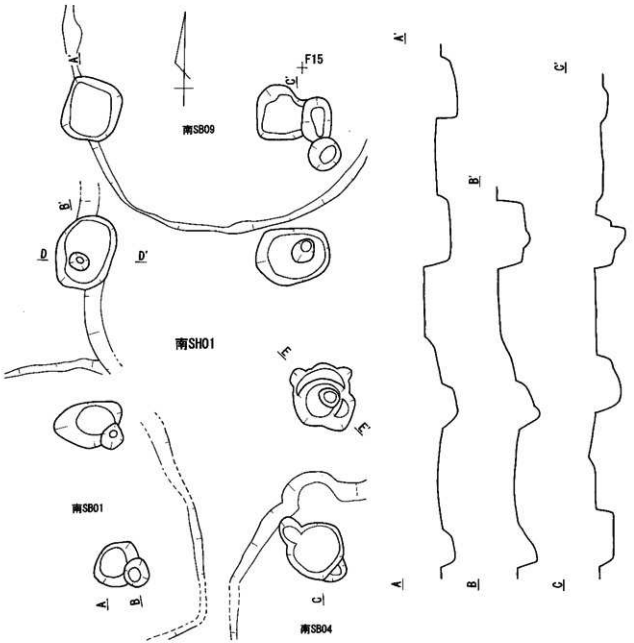
第55図 南SB09実測図



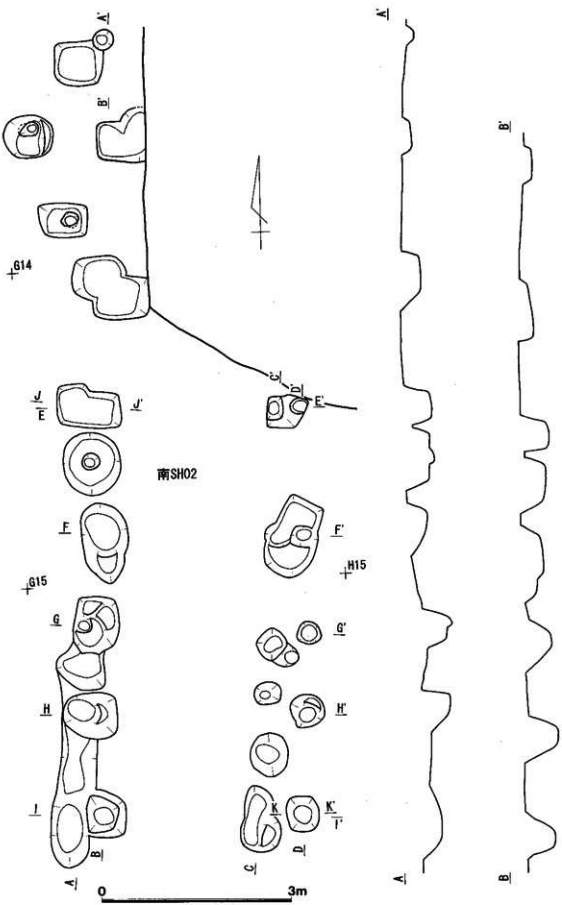
第 56 図 南 SB13 実測図



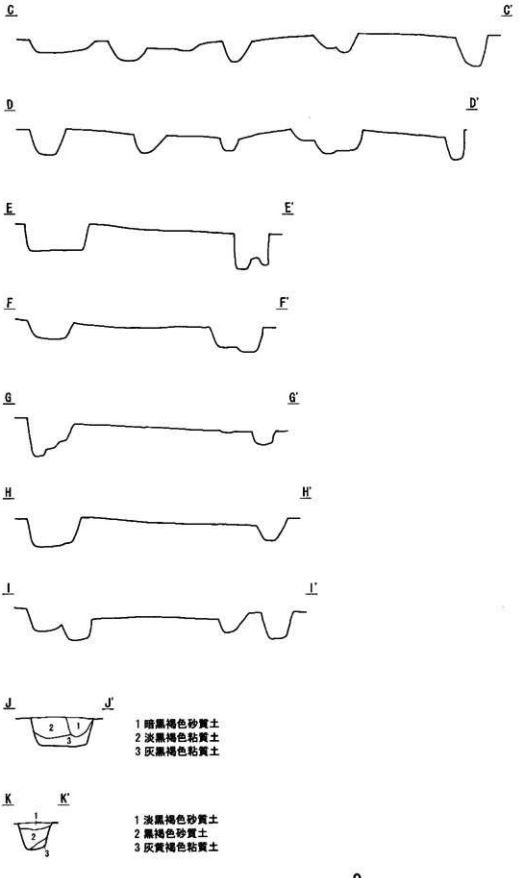
第57図 南SB14、南SF01 実測図



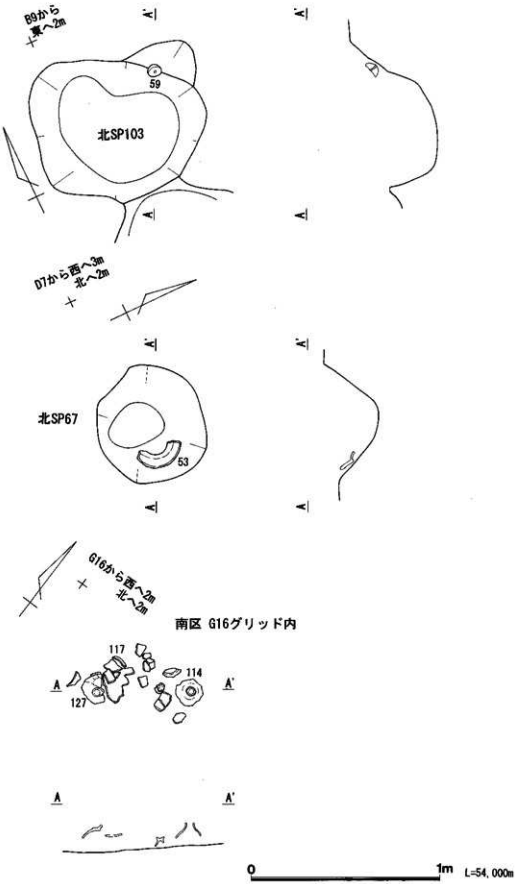
第58図 南SH01実測図



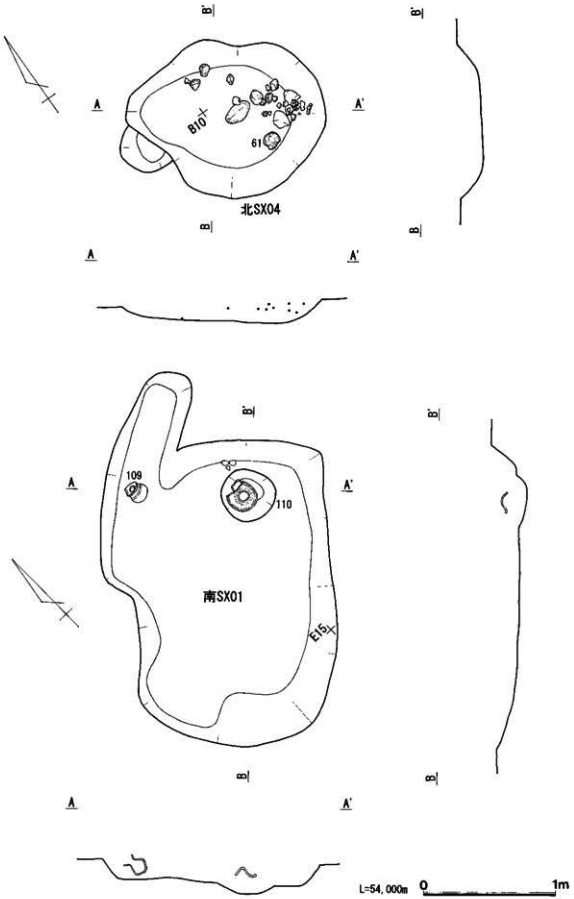
第59図 南 SH02 実測図（1）



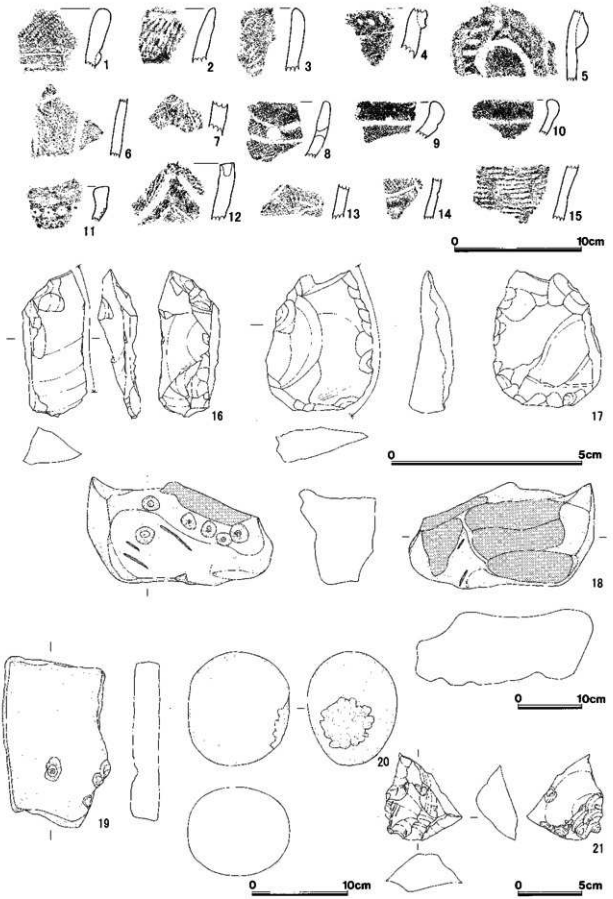
第60図 南SH02実測図 (2)



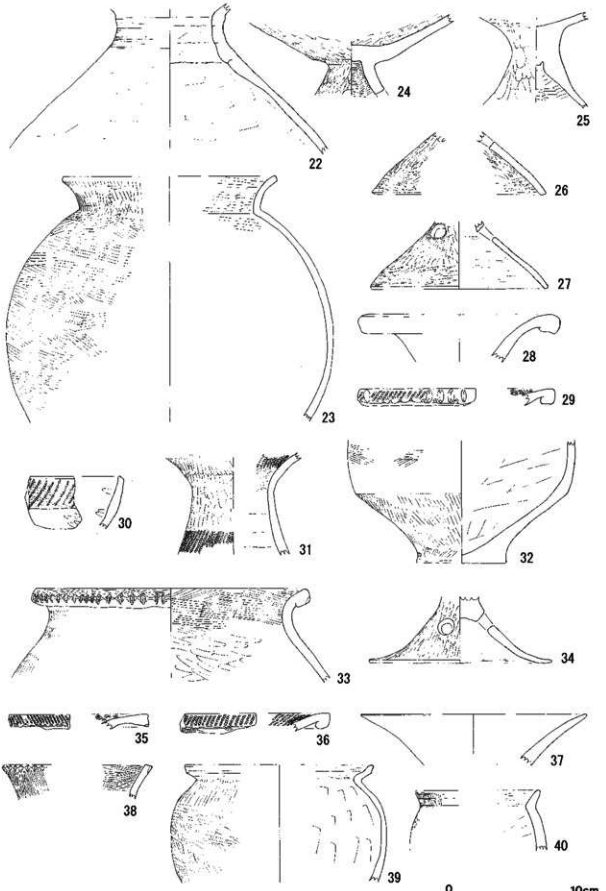
第61図 北SP103・67、南区G16グリッド内土器出土状況図



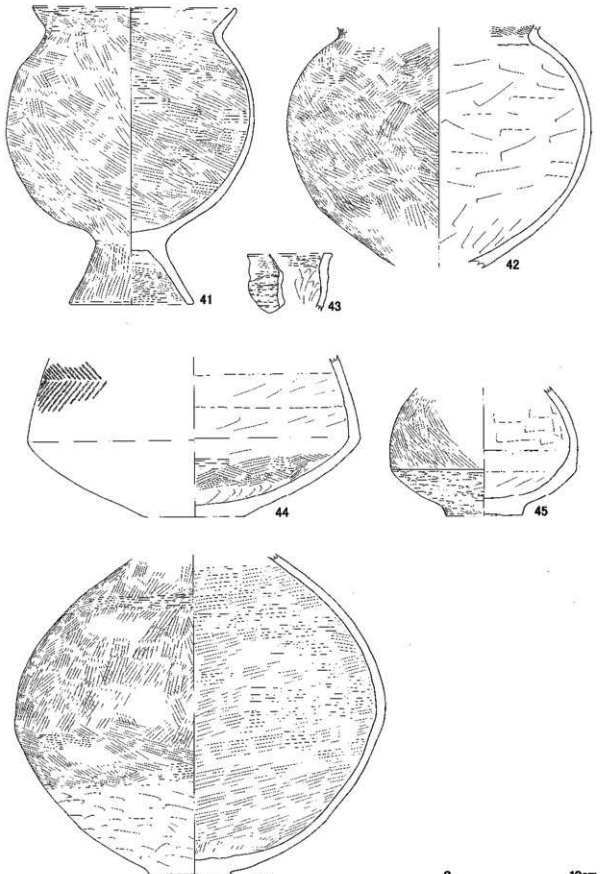
第62図 北SX04、南SX01 実測図



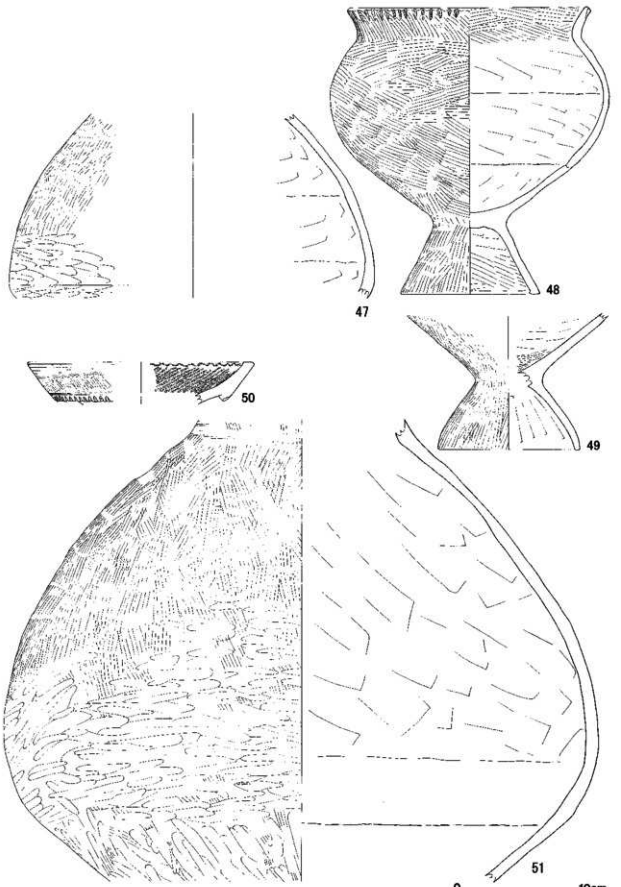
第63図 出土遺物実測図（1）



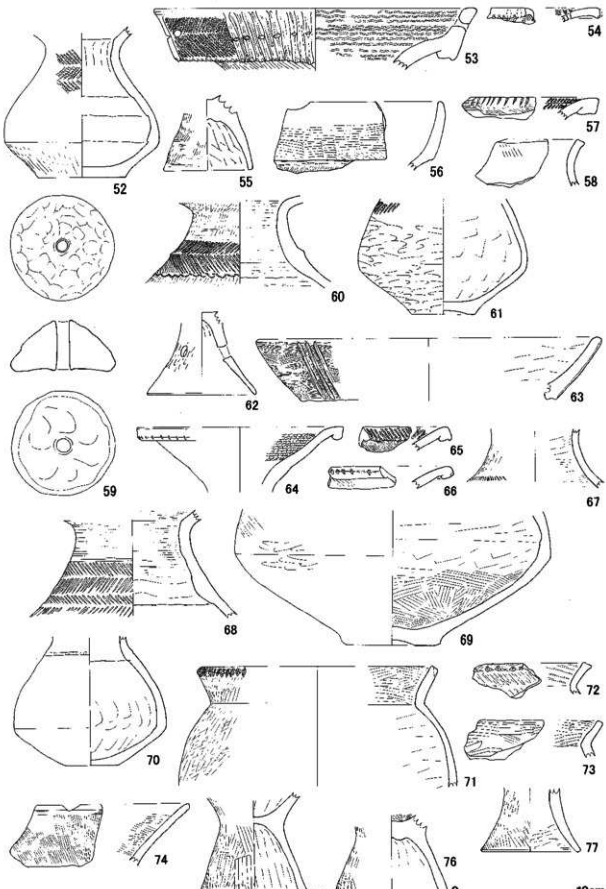
第64図 出土遺物実測図 (2)



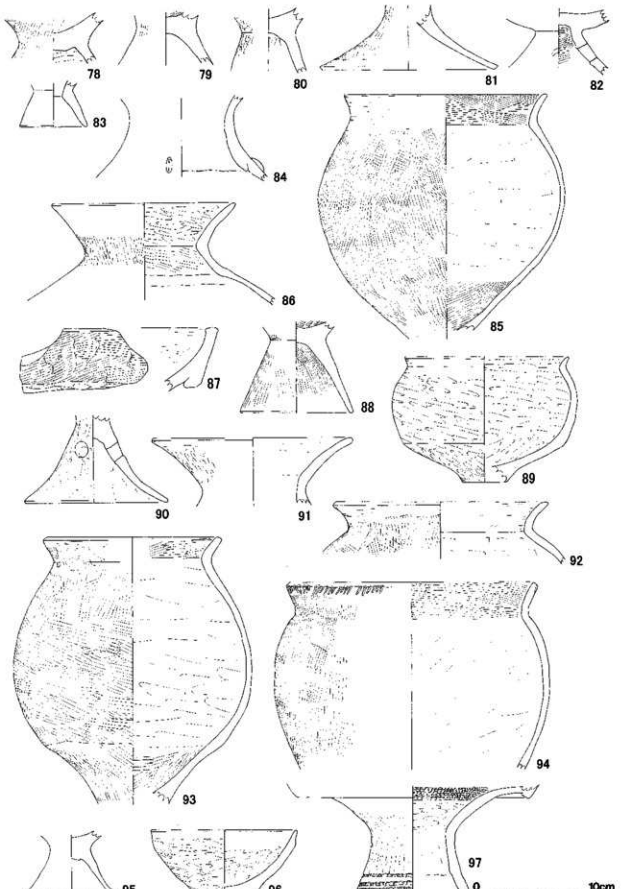
第65図 出土遺物実測図（3）



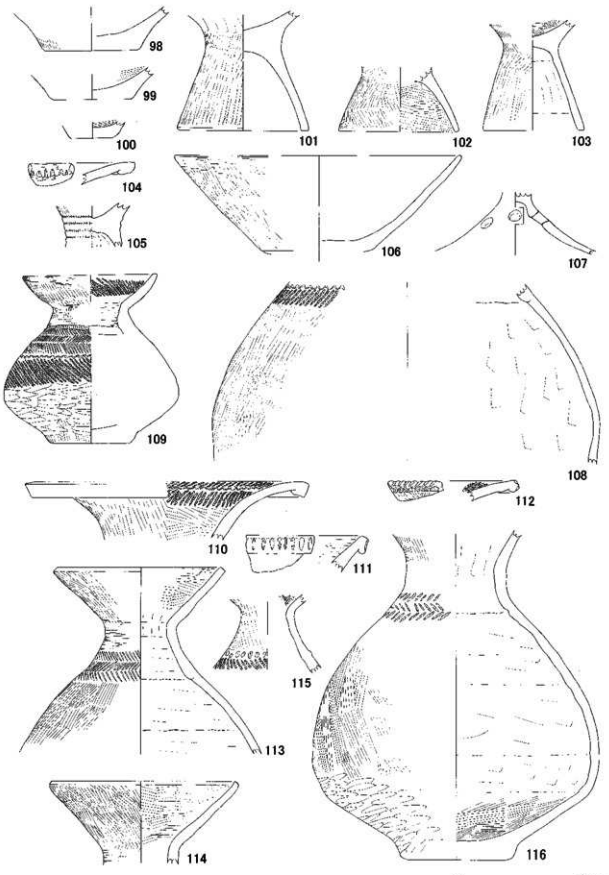
第66図 出土遺物実測図（4）



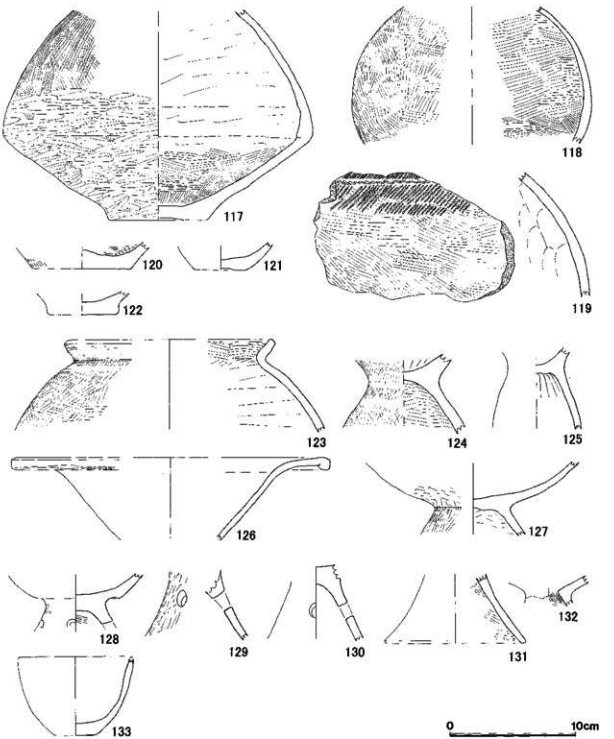
第67図 出土遺物実測図 (5)



第68図 出土遺物実測図 (6)



第69図 出土遺物実測図（7）



第70図 出土遺物実測図（8）

高田遺跡

第21次調査

Ⅳ　高田遺跡第21次調査

1. 調査に至る経緯と調査の目的

平成18年度に茶園改植の計画があることを把握し、平成19年9月25日に確認調査を実施した。その結果、地表下50cmから土器片が混入する遺構が確認された。確認調査の結果を基に、遺跡の保護・保存のため、保護層を確保した状態での改植について耕作者と協議した。しかし、改植の深耕に対して遺構面までの深度が浅いことから、保護層を確保しての改植は困難との結論に達し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成19年10月22日に、記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて、県教育委員会に「埋蔵文化財発掘調査の届出書」を進達した。

平成19年10月31日、県教教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等の他めの発掘に係わる指示について」が通知された。

2. 調査の方法と経過

調査は、対象地の地形に合わせ5m方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。グリッドは、アルファベットと数字を組み合わせて、3－A区、3－B区等の呼称とし、グリッドの北西に位置する杭にグリッドを代表させた。現場での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1と10分の1を併用し、微細図は10分の1とした。写真撮影は、6×7カメラ1台（ブロニー白黒用）と35㎜カメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、平成19年11月5日に機械掘削を開始した。12月19日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために、基準点測量を実施した。

3. 調査の内容

今回の調査区ではほとんどのグリッドで遺構・遺物が確認されたが、調査区南西（D～G－3区）及びG－3～6区以南にかけては近代の耕作によって撹乱されていた。確認された遺構・遺物の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期と、近世（18世紀後半から19世紀前半）の2時期に分けられる。

(1) 遺構

弥生時代後期の遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、小穴125基である。近世の遺構は、溝状遺構3条、土坑6基、小穴10基、性格不明遺構2基である。以下、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、小穴、性格不明遺構の順に説明していく。

①竪穴住居跡（SB）

SB01（第73図）

D・E－4・5区に位置する。南北6.10m、東西4.70mを測る南北に長軸をもった小判形を呈する。北東隅が近世のSX02によって切られている。床面は、近代の耕作によってほとんど削平されており、確

認できたのは確認面から5cm程のほぼ平坦な堀り方面であった。中央やや北寄りで炉跡と想定される焼土範囲と、北西から南西にかけては壁溝が確認された。壁溝は二重に巡る箇所があり、壁穴の拡張による所産とも考えられるが、拡張前の主柱穴は確認できなかった。主柱穴は、その径に多少のばらつきはあるが、堀り方面から45～50cmを測る同じ深さの柱穴である、SP38・32・43・135が想定される。主柱穴間の距離は、SP38・32間で2.40m、SP43・135間で2.35mを測る。貼り床及び柱穴内からは、弥生時代後期に比定される土器片が少量出土しているが、図示可能なものはなかった。

SB02（第74図）

B－2区に位置する。調査区の北西隅で竪穴住居跡の一隅が確認されたのみで、規模は不明。プランの一部が弧を描きながら巡ることから、平面形は円形を呈するものと考えられる。著しい硬化はないものの貼り床が検出されており、貼り床撤去後の掘り方面はほぼ平坦であった。幅13～15cm、深さ8cm程の壁溝が確認された。弥生時代後期に比定可能な土器片が少量出土しているが、図示可能なものはなかった。

SB03（第74図）

SB02同様、調査区北西隅のB－2区に位置する。規模は不明であるが、隅丸方形のコーナー部が検出されていることから、隅丸方形を呈するものと考えられる。床面にまで近代の削平・撹乱が及んでおり、確認できたのは確認面から8cm程の平坦な掘り方面であった。炉跡と考えられる焼土範囲が確認された。大小4基の小穴が確認されたが、主柱穴を成すものではない。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が少量出土しているが、図示可能なものはなかった。

②掘立柱建物跡（SH）

SH01（第74・80図）

E・F－3・4区にて検出された1間×3間の布掘り溝をもつ掘立柱建物跡で、長軸の方位は、N-16°-Wを測る。柱穴間の距離は、SP59・57間で3.05m、SP66・63間で3.10m、SP59・64間で1.43m、SP64・65間で1.70m、SP65・66間で1.60m、SP57・60間で1.60m、SP60・62間で1.75m、SP62・63間で1.75mを測る。いずれの柱穴からも明瞭な版築ならびに柱痕を示す堆積は確認されなかったが、SP65・66などでは柱穴中央部に炭化物が多く混入する層があり、壁際には小礫が混入する層序が確認された。布掘りは、確認面より7～28cm程の深さをもち、上から砂利層（黄褐色土の箇所もある）：10～15cm、炭化層：約1cm、黄褐色粘質土：約3cmの3層による非常にしまりの強い版築状の堆積が確認された。特に、上層の砂利層は、一見すると地山と誤認する程硬化していた。柱穴内からの出土遺物は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片で、図示できたものはSP57出土の第80図7のみであった。

③溝状遺構（SD）

SD01（第75・80図）

B～D－7・8区に位置する南北に伸びた溝状遺構で、北は調査区外へ伸びるため全容は不明。確認された規模は、長さ10.95m、幅1.65～3.52m、深さ10～72cmを測り、緩やかに弧を描きながら南北に伸びる。SD02と重複関係にあるが新旧は明確にできなかった。その形状から便宜的に溝状遺構としたが、北側の比較的幅の狭い溝部分に南北に、長軸をもった大型の土坑が取り付いた遺構とも見ることができる。長軸の断面形はそれを裏付けるように、溝部は北から南に向かって緩やかな傾斜状の3段の段差が認められ、土坑部での深さはほぼ一定で、底面も平坦を成している。土坑部の底面は地山礫層を

掘り込んでいるが、地山礫特有の凹凸は見られず、むしろ均したかのように滑らかな状態になっており、恒常的な出入りがあったことが示唆される。覆土には、溝部と土坑部では相違は見られず、炭化物を混入する黒褐色土が堆積していた。土坑部覆土中から第80図11～20の陶磁器が出土しており、17世紀後半から19世紀前半に比定され、遺構としては19世紀前半頃には埋没したと考えられる。

SD02（第76図）

E・F－7・8区に位置する南北に伸びた溝状遺構で、北はSD01と重複し、南は調査区外へ伸びると同時にほとんど削平されておりその全容は不明。2条の溝が重複しており、土層観察から西（新）・東（旧）が確認された。確認された規模は、長さ10.80m、幅0.70～2.50m、深さ18～45cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、コンタラインからも底面には著しい傾斜はみられない。かわらけの小破片と、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器破片（第80図1）が出土しており、後者は流れ込みと考えられる。他の溝状遺構同様、18世紀後半から19世紀中頃にかけて造営されたものと考えられる。

SD03（第77・80・81図）

C～F－5・6区に位置する南北に伸びた溝状遺構で、北は調査区外へ伸びるため全容は不明。確認された規模は、長さ16.65m、幅1.50～3.60m、深さ25～45cmを測る。幅は一定でなく所々で狭小になり、南端でL字状に屈曲する以外ほぼ真っ直ぐ伸びる。深さは、一方向に向かっての傾斜ではなく、若干の高低差が認められた。覆土は、5～20cm大の礫を含んだ暗褐色土が堆積しており、礫が集中する箇所が数カ所認められた。特に北端では、長径3～20cm程の礫が集積された土坑が確認された。調査区外へ伸びるため全容は明確にし得ないが、SD03との重複関係は同時期だと考えられる。集石箇所を中心に第80図21～35、第81図36～59の陶磁器が出土しており、18世紀後半から19世紀前半に比定され、遺構としては19世紀中頃には埋没したと考えられる。

④土坑（FS）

SF03（第79図）

D－8区に位置し、約半分が調査区外へ伸びるため全容は不明であるが、東西方向に長軸をもった円形を呈すと考えられる。断面形は、底面が平坦な浅い皿状を呈す。覆土中からは、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器小破片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

SF04（第78図）

E－6区、SD03の西側に位置する。平面形は、南北に長軸をもった長方形を呈す。規模は、長軸上端で2.57m、底面で2.38m、短軸上端で1.21m、底面で1.04mを測る。確認面からの深さは、最深部で48cmを測り、底面はほぼ平坦を成す。平面形を子細に見ると、2基の方形の土坑が重複した結果とも見ることができるが、土層観察ではそれを裏付ける重複関係は見られなかった。覆土中からは、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器小破片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

SF05（第79・81図）

F－6区、SD03の西側に位置する。隅丸の方形を呈し、規模は東西2.75m、南北2.60mを測る。深さは、35～50cmを測る。西壁内側には突出状の段差が見られることから、底面形はコの字状を呈しており、規模は異なるものの原川遺跡にも同様な土坑が存在する。覆土中からは、第80図2の台付甕接合部片と、第81図60～63の陶磁器が出土した。前者は流れ込みで、陶磁器の年代から17世紀後半から18世紀中葉に比定される。

SF06（第78・81図）

D－5区に位置し、SB01に隣接する。不定形を呈し、規模は長軸2.50m、短軸1.75mを測る。不定形な外周の中に深さ45～65cmの円形土坑が存在する。底面には段差が見られることから、2基の土坑が重複した可能性もある。覆土中には小礫と炭化物に混じって、第81図64～66の陶磁器が出土しており、18世紀後半から19世紀前半に比定される。

SF07（第78・81図）

C－5区、調査区際に位置する。東西に長軸をもった円形を呈し、規模は長軸1.40m、短軸1.25mを測る。深さ34cmで、断面形は皿状を呈し底面はほぼ平坦を成す。覆土中からは、第81図67～69の陶磁器が出土しており、18世紀後半に比定される。

SF08（第77図）

D－6区、SD03の西側に位置する。隅丸の方形を呈し、規模は長軸1.67m、短軸1.25mを測る。深さ20cmで、底面はほぼ平坦を成す。覆土中からは、瓦小破片が出土している。

⑤小穴（SP）

SP01～05（第79図）

いずれもC－8区、調査区際でまとまって検出された小穴である。南北方向に列状の並びが確認できるが、近接し過ぎており、すべてが同時期に存在したものではない。しかし、東調査区外への展開も予想されることから、建物跡の可能性も否定できない。覆土中からは、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器小破片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

SP25（第79図）

C－4区、調査区際に位置し、約半分が調査区外に及ぶ。径70cm程の円形を呈すと考えられ、深さ48cmを測る。覆土層序に特徴が見られ、黄褐色粘土を含んだ暗褐色土と、小礫を含んだ黄褐色土との版築状の互層が確認できる。覆土中より時期不明の土器小破片が数片出土したのみであった。

SP27（第79・81図）

D－4区に位置する。長径2.10m、短径1.75mを測る不正形プランの中に径1.0m程の土坑が存在する。土坑の深さは46cmを測る。西壁際には、黄褐色土と茶褐色土の版築状の互層が見られることから、柱穴を形成していたと考えられる。覆土中からは、第81図70・71の陶磁器が出土しており、18世紀中葉から後半に比定できる。

SP48～50（第79・80図）

いずれもD－3区にて重複して検出された小穴群である。土層観察から3基の小穴と判断したが、さらに複数の小穴が重複している可能性が高い。弥生時代後期から古墳時代前期に比定可能な土器破片が比較的多量に出土しており、主なものとしては第80図4～6である。

SP109（第79・80図）

D－3区に位置する。平面形は不整円形を呈し、長径50cm、短径38cm、深さ35cmを測る。底面よりやや浮いた状態で、壺（第80図9）と台付甕（第80図8）が折り重なるようにして出土した。壺は胴部を、台付甕は口縁部を欠損していた。弥生時代後期から古墳時代前期に比定される。周囲は近世以

降の撹乱が著しいが、前述の弥生時代後期から古墳時代前期に比定されるSP48～50にも近接しており、当該期の掘立柱建物等の遺構の存在が示唆される。

⑥性格不明遺構（SX）

SX01（第79・80図）

D－5・6区、SD－03の西側に位置する。径1.05mを測る円形を呈す。深さ35cmで、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、南・東・西壁が30°程の傾斜をもって立ち上がるが、北壁ではオーバーハングしていた。確認面から20cmの層厚で長径5～20cm程の礫が集積されており、集石に混じって第80図75～77が出土した。18世紀後半から19世紀前半に比定できる。

SX02（第78・80図）

E・F－5区、SB01を切って検出された。北東と南西の一隅が突出した不整円形を呈す土坑に、長さ3.20m、幅20～65cm、深さ30cmの溝が取り付く。土坑部の規模は、長軸2.00m、短軸1.25m、深さ40cmを測る。突出部は、土坑部より10cm程高くなっている。土坑部覆土中より第80図78～85が出土した。18世紀後半から19世紀前半に比定される。

(2) 遺物（第81～83図）

出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器と、近世の陶磁器類である。その出土量は、テンバコ（650㎜×450㎜×330㎜）4箱で、近世陶磁器が大半を占める。以下、時代順に説明していく。

①弥生土器・古式土師器

1はSD02出土の高坏の接合部片で、粘土の貼り付けがみられる。

2はSF05出土の台付甕の接合部片で、内外面にハケ目が確認できる。

3は、SP14出土の壷頸部片である。

4～**6**はSP48～50出土で、**4**・**5**が台付甕の脚部片、**6**が壷の底部片である。**4**の台付甕には内外面にハケ目が確認できるが、**5**・**6**は摩滅が著しい。

7は、SP57出土の壷底部片である。

8・**9**は、SP109出土の台付甕（**8**）と壷（**9**）である。**8**の台付甕は、口縁部を欠損する。内外面ともに摩滅が著しいが、甕胴部にはハケ目が確認できる。**9**の壷は、胴部を欠損する。頸部が比較的太いことから古墳時代前期に比定される。**10**は甕口縁から胴部上半片で、口縁から頸部にかけてハケ目が確認できる。

②近世陶磁器

11～**20**は、SD01出土である。**11**は瀬戸産の丸碗で、光沢のある飴釉が施されている。**12**は瀬戸産の尾呂茶碗で、口縁内外面では灰釉の上にうのふ釉が漬け掛けされている。**13**は瀬戸産の猪口で、明るいコバルト釉が施されている。**14**は瀬戸産の梅文皿で、見込みに呉須と鉄釉による梅文が描かれているが、花弁はやや崩れている。**15**は、肥前磁器の型押し皿である。**16**は肥前磁器の輪禿の中皿である。**17**は瀬戸産の丸皿で、口縁部外面と内面に長石釉が施される。**18**・**19**はロクロ成形のカワラケで、**18**は扁平なタイプ、**19**は底径に比べ口径が広く開くタイプである。**20**は志戸呂焼の一升徳利もしく

は短頸壺で、サビ釉化粧掛けの上に霧降り状に灰釉が施されている。

21～**59**は、SD03出土である。その内**21**～**38**は、集石内からの出土である。**21**は肥前磁器の染付丸碗で、牡丹文が描かれている。**22**は肥前磁器の端反碗で、竹文が描かれている。**23**は、肥前磁器の広東茶碗である。**24**は、肥前磁器の筒茶碗である。**25**は、肥前磁器の湯呑みである。**26**は、肥前磁器の猪口もしくは蓋茶碗である。**27**は瀬戸産の京焼碗で、明るく光沢のある灰釉が施される。**28**は瀬戸産の片口鉢の底部片で、高台周辺を除き薄い飴釉が施されている。**29**・**30**は、瀬戸産の灰釉丸碗の底部片である。高台形に違いが見られ、**29**は逆台形、**30**は方形、**30**が後出とされる。**31**は瀬戸産の型押しの皿で、高台周辺を除いて灰釉が施される。**32**は瀬戸産の仏餉具で、台部を除き灰釉が施される。**33**は瀬戸産の香炉で、飴釉が施される。**34**は瀬戸産の練鉢で、灰釉が施される。**35**は、カワラケである。**36**は瀬戸産の片口鉢で、高台周辺を除いて灰釉が施される。**37**は志戸呂焼の由右衛門徳利で、底部付近までサビ釉化粧掛けされている。**38**は瀬戸産の鍋釉徳利で、胴部中央の2方を凹ませている。全面に鉄釉が施されるが、底部周辺は拭い取られている。**39**は、肥前磁器の広東茶碗の蓋である。**40**は肥前磁器の染付丸碗、いわゆるくらわんか手である。**41**・**42**も肥前磁器の染付碗で、**41**には格子と花弁が描かれ、**42**には、芭蕉が描かれている。**43**は肥前磁器の丸碗で、口縁部に雨降り文が描かれる。**44**は瀬戸産の片口鉢底部片で、高台周辺を除いて灰釉が施される。**45**は瀬戸産の梅文皿で、見込みに描かれた梅文はかなりくずれている。**46**は瀬戸産の小碗で、高台周辺を除いて長石分を含んだ灰釉が施されている。**47**は志戸呂焼の皿底部片で、サビ釉が施されている。**48**は瀬戸産の天目茶碗底部片で、外面にはサビ釉が、内面には光沢のある飴釉が施されている。**49**は志戸呂焼の燈明皿で、サビ釉が施されている。**50**は瀬戸産の尾呂徳利の口縁から頸部片で、飴釉が施されている。**51**は志戸呂焼の香炉で、外面は鉄釉が施されるが、高台周辺と内面は露胎である。**52**は、瀬戸産の片口鉢の口縁部片である。薄い飴釉が施されている。**53**は志戸呂焼の桶で、胴部にはタガを模した突帯が巡る。サビ釉を化粧掛けし、外面には鉄釉を施している。**54**は瀬戸産のすり鉢で、口縁に垂れ縁はなく受け口状を呈す。サビ釉が施されている。**55**～**59**は、カワラケである。**55**は、焼成が良くレンガ質を呈すことから窯製品であろう。**59**は薄手であるが硬質で、外面にはスス付着が著しい。

60～**63**は、SF05出土である。**60**は瀬戸産の丸碗で、高台付近を除いて明るい灰釉が施されている。**61**は瀬戸産の小碗で、高台周辺を除いて灰釉が施されている。**62**は瀬戸産の丸碗で、高台部周辺を除いて飴釉が施されている。**63**は志戸呂焼の短頸壺で、サビ釉が施されている。

64～**66**は、SF06出土である。**64**は肥前磁器の筒茶碗で、菊花と格子が描かれている。**65**は瀬戸産の湯呑で、体部には呉須で絵付けされ、全面に透明釉が施されている。**66**は瀬戸産の鉢で、鉄釉が施されている。破断面は著しく摩耗しており、二次的に削られている。

67と**68**は、SF07出土である。**67**は瀬戸産の尾呂茶碗で、高台周辺を除いて飴釉が掛けられ、口縁部内外面に灰釉が流し掛けされている。**68**は、ロクロ成形のカワラケである。

69はSF09出土の肥前磁器の丸碗で、二重網手文が描かれている。

70・**71**は、SP27出土である。**70**は、肥前磁器の蕎茶碗である。**71**は、肥前磁器の猪口である。

72はSP46出土の瀬戸産の鍋釉徳利で、胴部中央に凹みがみられる。全面に鉄釉が施されるが、底部周辺は拭い取られている。

73は、SP131出土のロクロ成形のカワラケである。

74はSP116出土の瀬戸産の片口の口縁部片で、灰釉が施されている。

75～**77**は、SX01出土である。**75**は瀬戸の手焙りで、光沢のある鉄釉が施される。**76**は瀬戸産の鉄絵鉢で、口縁が水平方向に外反し、口縁の内面には浅い沈線が巡る。長石分を含む灰釉が施され、内面には鉄絵の文様が描かれる。**77**は瀬戸産のスリ鉢底部片で、内面の櫛目は粗い。底部に糸切り痕が残る。

78～**86**は、SX02出土である。**78**は瀬戸産の陶器質の広東茶碗で、全面に透明釉が施され、体部

には呉須と鉄釉によって草花文が描かれている。口縁内面と高台中央には、ロクロを利用した横線が引かれている。**79** は瀬戸産の磁器質の広東茶碗で、全面に透明釉が施され、体部には呉須による竹文が描かれている。口縁内面と高台中央には、ロクロを利用した横線が引かれている。**80** は肥前磁器の筒茶碗で、菊花と格子が描かれている。**81** は肥前磁器の筒茶碗で、花弁と格子が描かれている。**82** は肥前磁器の小碗で、コンニャク版で菊文を描いている。**83** は瀬戸産の腰錆湯呑で、体部から底部にかけては鉄釉、口縁部から内面にかけては灰釉を掛け分けている。**84** は瀬戸産の京焼碗で、高台周辺を除いて明るい光沢のある灰釉が施されている。**85** は、肥前磁器の染付小瓶の体部片である。**86** は肥前磁器の小瓶の口縁部片で、透明釉が施されている。

87 ～ **89** は、遺構外出である。**87** は瀬戸産の鉄釉丸碗で、高台周辺を除いて鉄釉が施される。**88** はスリ鉢口縁部片で、口縁は受け口状を呈す。**89** は瀬戸・美濃産のスリ鉢底部片で、内面の櫛目は粗い。底部の磨滅が著しいことから、何らかの転用も考えられる。

4. まとめ

今回の発掘調査では、調査面積は小規模ながら、いくつかの成果を上げることができた。以下、その成果と課題をもってまとめとしたい。

(1) 布掘りの掘立柱建物跡について

布掘りの掘立柱建物跡について、市内での確認例は、平成9年に調査された溝ノ口遺跡と平成19年に調査された今坂遺跡を加え3例目となった。規模を比較してみると、高田遺跡では1間×3間、柱穴間の距離は3.1×5.1m、溝ノ口遺跡では1間×4間、柱穴間の距離は3.1×4.5m、今坂遺跡では1間×4間、柱穴間の距離は3.9×7.1mである。高田遺跡と溝ノ口遺跡では、梁間3.1mは共通するが、桁間は高田遺跡が平均1.6mであるのに対し、溝ノ口遺跡ではばらつきがあり平均1.2mと狭い。今坂遺跡では、梁間3.9m、桁間平均1.7mで、高田遺跡・溝ノ口遺跡よりも大きい。わずか3例の事例をもって、その規格等に言及できるものではないが、今坂遺跡では建物規模とともに柱穴の規模も大きいことから、高田遺跡・溝ノ口遺跡とは機能を異にしていた可能性がある。

布掘り部分では、砂利層・炭化層・黄褐色粘土層の3層から成る非常によくしまった、版築状の堆積が確認された。布堀り部分が版築されている事例は、磐田市匂坂中下4遺跡にあるが、少々違いがみられる。高田遺跡のものと比較すると、匂坂中下4遺跡では布掘りの掘り方が深く、版築が柱痕周囲にも及ぶことから柱の根固めを意識した所産と考えられる。高田遺跡では、布掘りと柱穴の深さを比較した場合、明らかに布掘りは浅く、しかも柱穴内では布掘りのような堅牢な版築は確認されなかった。布掘り掘立建物跡の布掘りについては、未だ確固たる構造解明がなされていない。今回の調査例のように、版築の有無などが、同じ布掘り掘立建物跡でも建物構造の違いを示唆するものなのかもしれない。

(2) 近世遺構・遺物について

和田岡原における近世遺跡の調査例は、これまで皆無ではないものの、土坑墓、火葬遺構などの葬送関連遺構が散見的に知られる程度であった。単独、もしくは数基程度がまとまって確認される事例が多いことから、これら葬送関連遺構の多くは、当時の居住区域からやや離れた場所で造営されていたと考えられる。今回の調査においては、18世紀後半から19世紀中頃にかけての近世期の遺構が検出され、葬送関連以外の当時の集落の一旦を窺い知ることができた。

出土遺物である陶磁器類の多くは、18世紀後半から幕末期にかけての時期に比定され、遺構の時期

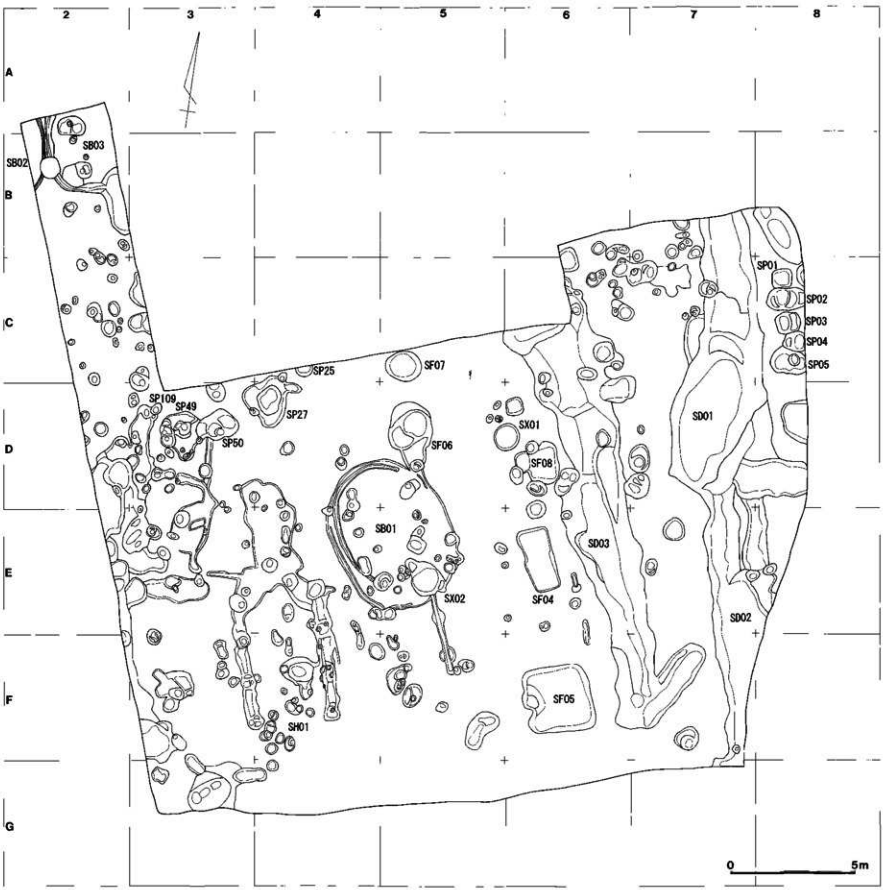
を反映するものであるが、それらに混じって17世紀後半代の陶器類が少なからず出土している。和田岡原の古代、中世の様相については、現段階においては考古資料から窺い知ることはできないが、今回の17世紀後半を遡る遺物の出土により、遅くとも17世紀後半には集落が存在したことは間違いなかろう。近世から現代へ通じる和田岡原の本格的な開村の時期を反映する遺物だと考えられる。

出土陶磁器の産地、器種等の詳細な分析を行ってはいないが、産地については瀬戸産が大半を占め、肥前産と志戸呂焼が続き、同時期の原川遺跡・永井遺跡・清水遺跡などと同様な傾向が窺える。器種についても同時期の原川遺跡・清水遺跡と比較してもその構成に差異は認められない。甕類については、掲載しなかったが、常滑産の甕胴部片が出土している。よって、農村集落である高田遺跡と、在郷町である原川遺跡・永井遺跡・清水遺跡と比較した場合、陶磁器類に見る限り著しい差異はないと言ってよいだろう。もちろん、今回の調査例が該期の農村集落を代言しているわけではないので、これらの傾向の検証は今後の調査事例の増加に期するところ大である。

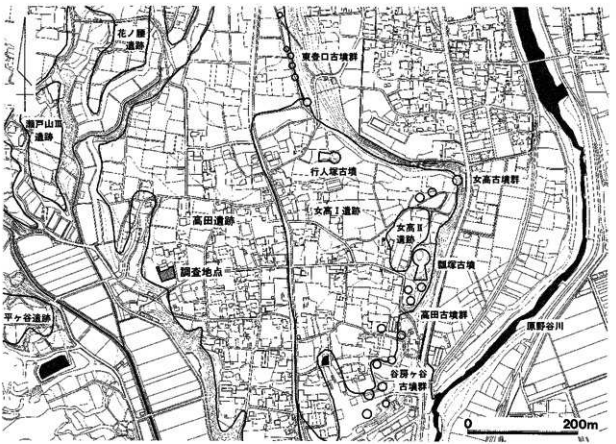
今回発見された近世遺構の中でもSD01は、大型の土坑と考えられる特殊な遺構である。その床面は踏み固められたように硬化しており、土坑の北に取り付く階段状の段差の存在を勘案すると、単に坑を掘って何らかの物を埋めたと言うより、土坑内の空間利用を目的とする比較的頻繁な出入りがあったことが示唆される。半地下であることを勘案すると、地下室(ムロ)としての機能が考えられよう。地下室と考えた場合、掘り方は露天になっているため、室として機能させるためには上屋が存在しなければならない。しかし、今回の調査ではそれを裏付ける遺構は検出されなかった。したがって、地下室の具体相の言及はおろか、単に規模と若干の状況証拠のみの判断であることから早計の感は否めない。類例を待って検討したい。

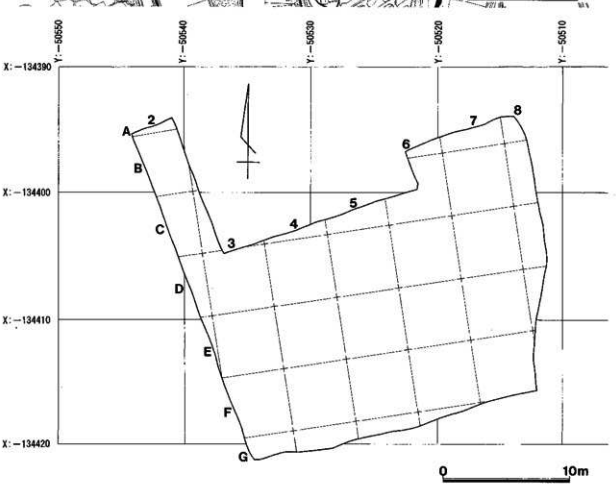
(参考文献)

磐田市教育委員会　1995『梵天古墳群・匂坂中下4遺跡』
掛川市教育委員会　1990『藤六3号墳・高田遺跡』
掛川市教育委員会　2003『清ノ口遺跡』
掛川市教育委員会　2006『女高1遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991『原川遺跡Ⅳ』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996『永井遺跡・清水遺跡』

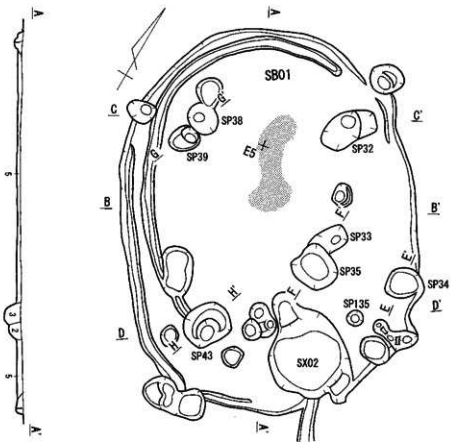

2
3
4
5
6
7
8
A
B
C
D
E
F
G
SB03
SB02
SP25
SF07
SP109
SP49
SP27
SP50
SF06
SX01
SF08
SB01
SD03
SX02
SF04
SD02
SF05
SH01
SP01
SP02
SP03
SP04
SP05
SD01
0
5m

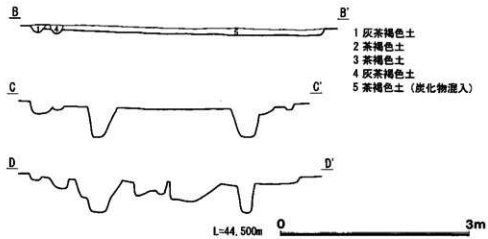
第 71 図 遺構全体図

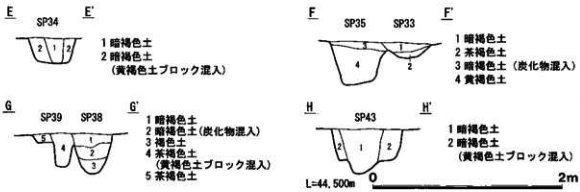




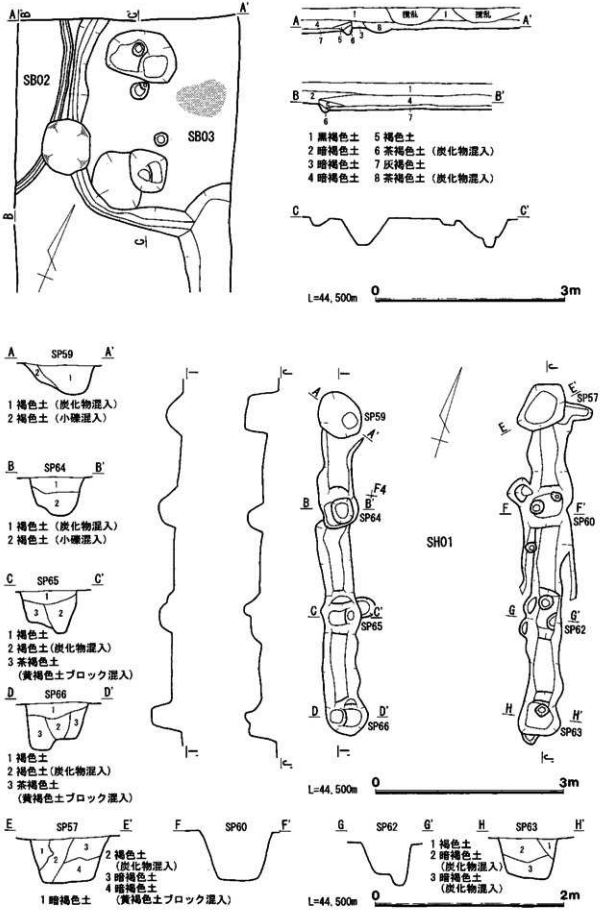
第72図 遺跡位置図・グリッド配置図



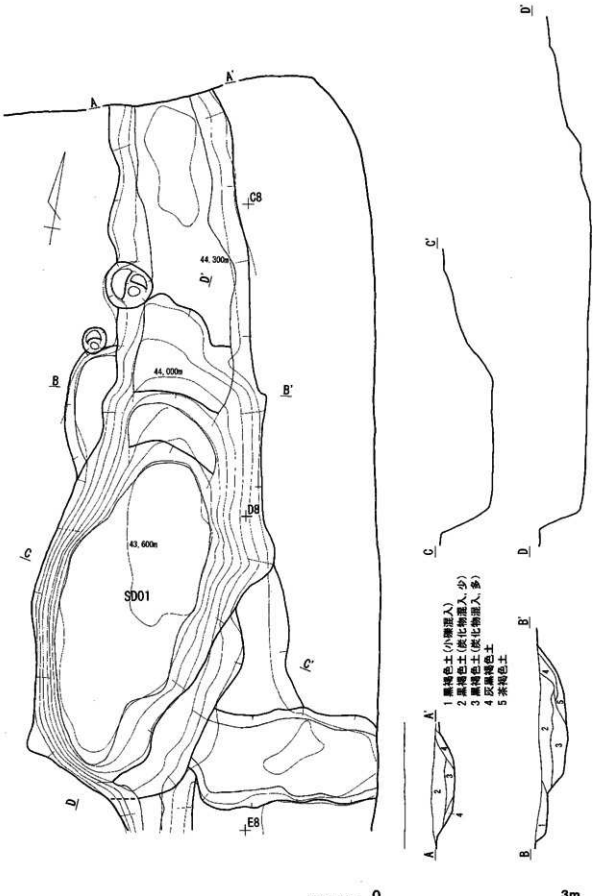




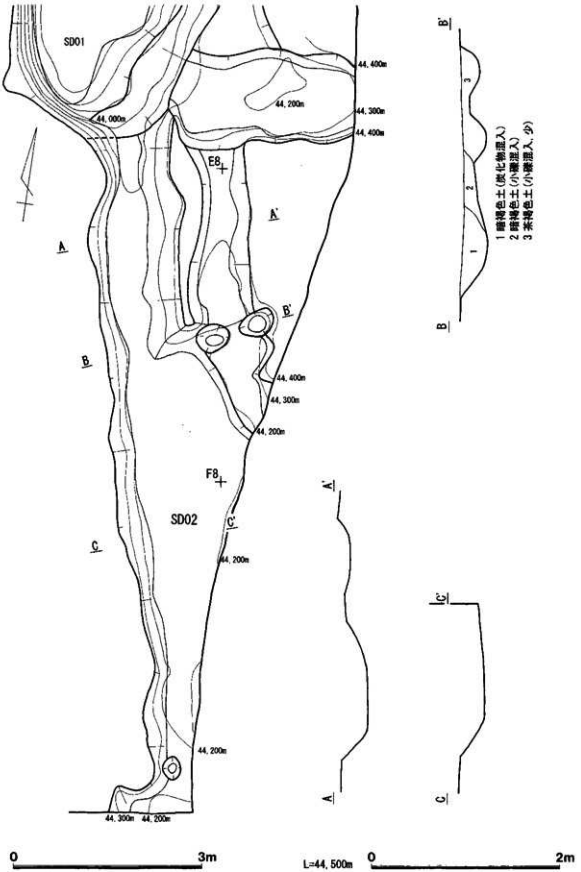
第73図　SB01実測図



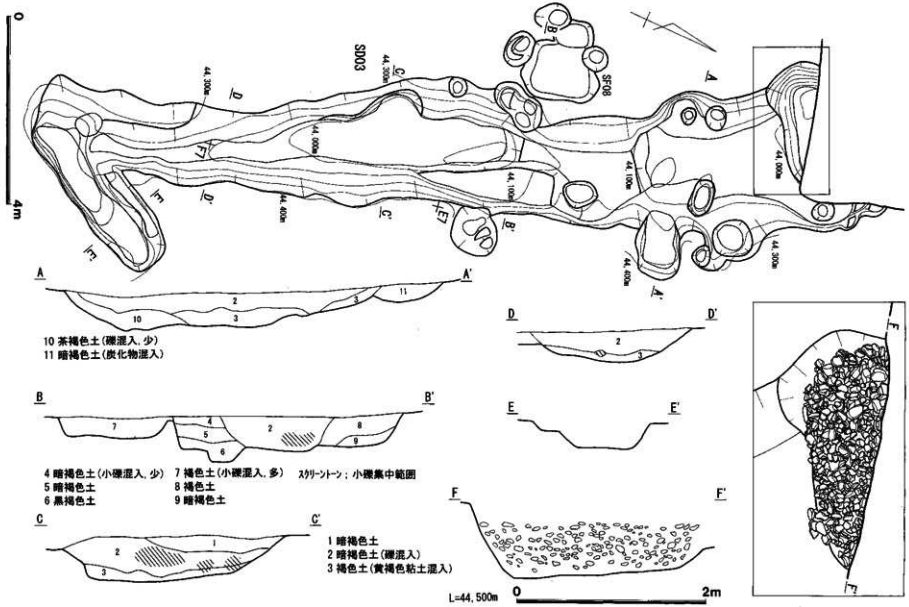
第74図　SB02・03、SH01 実測図



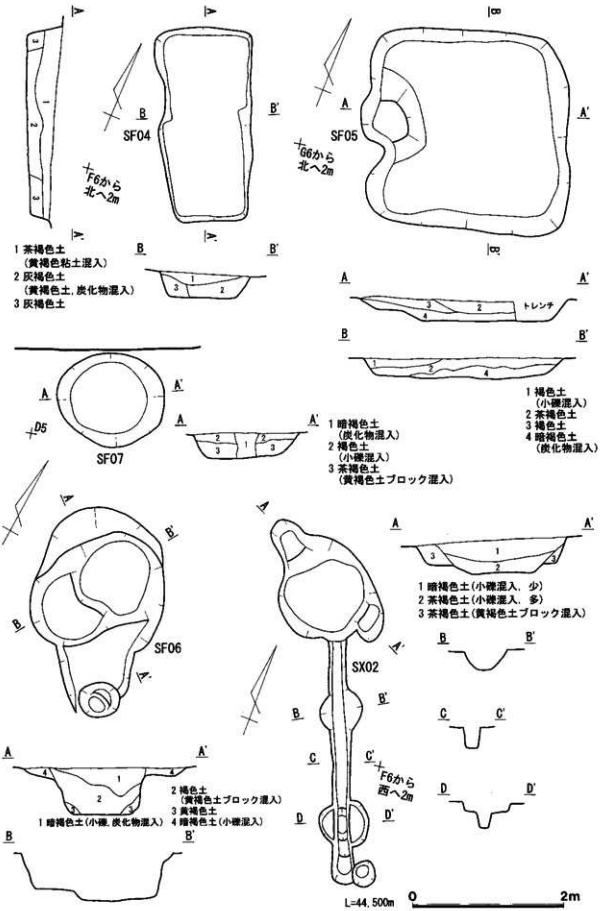
第 75 図　SD01 実測図



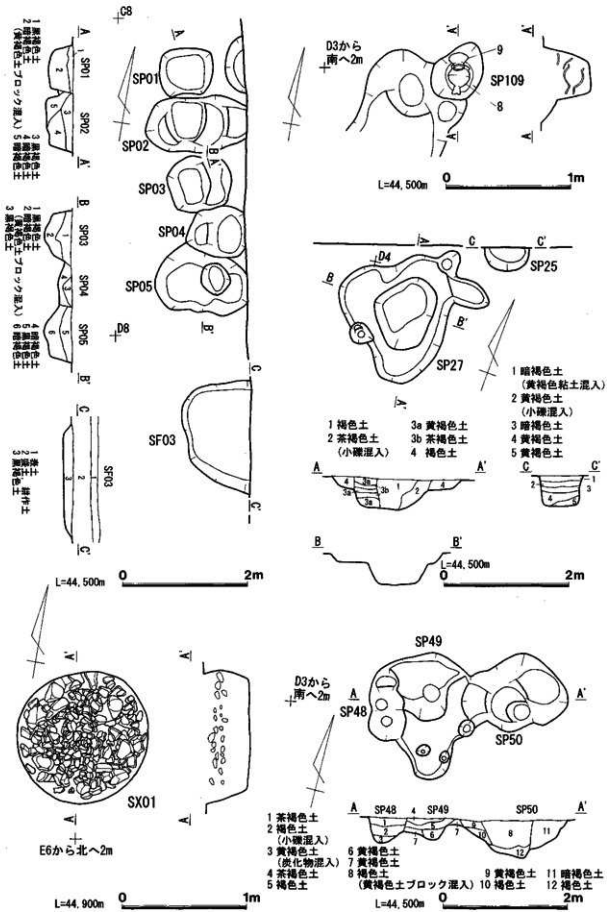
第 76 図　SD02 実測図



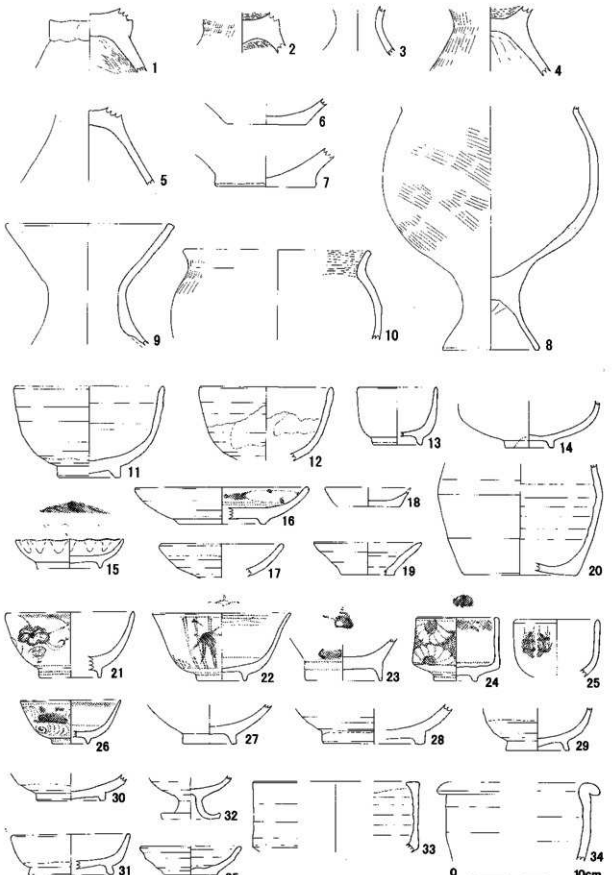
第77図 SD03実測図



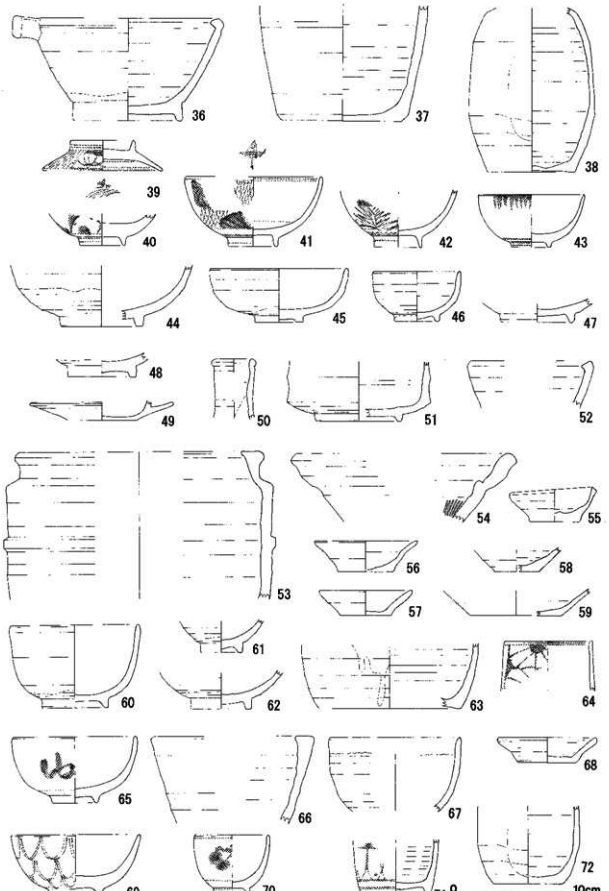
第 78 図 SF04 ～ 07、SX02 実測図



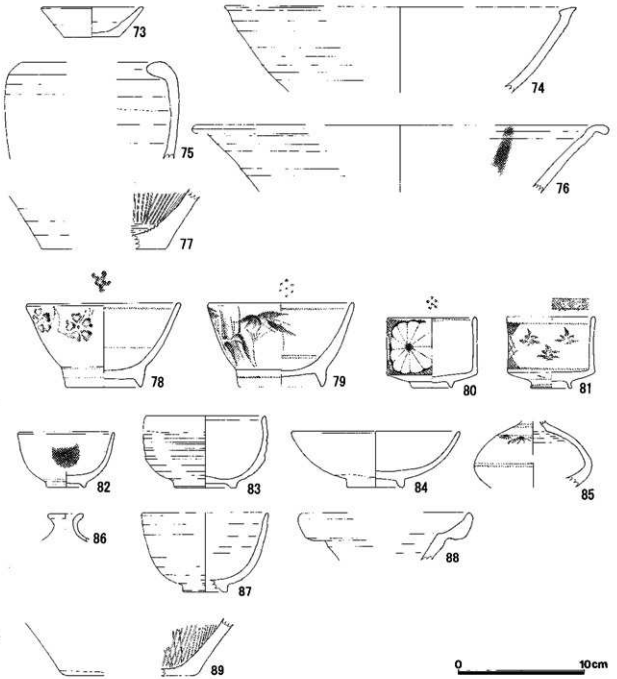
第79図 SF03、SX01、ピット実測図



第80図 出土遺物実測図（1）



第 81 図　出土遺物実測図（2）



第82図 出土遺物実測図 (3)

瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定

1. はじめに

ここでは、瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材について樹種同定結果を報告する。瀬戸山Ⅱ遺跡は、縄文時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。試料は、古墳時代の住居跡である北SB06・SB09から出土した炭化材10点で、出土状況より建築材と考えられている。

2. 試料と方法

試料は、北SB06・SB09から出土した炭化材である。北SB06は3点、北SB09は7点の試料について同定を行った。炭化材の同定方法は、炭化材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料を作製した。この後金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡で同定および写真撮影を行った。なお、分析試料は、掛川市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のクリ、ムクノキ、クワ属、サクラ属、ネムノキの5分類群、単子葉のタケ亜科1分類群の計6分類群が産出した。クリが5点と最も多く、ムクノキ、クワ属、サクラ属、ネムノキ、タケ亜科が1点ずつ産出した。表1に遺構別の樹種同定結果を、表2に樹種同定結果一覧を記す。

以下に同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1)クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版82　1a-1c（417-28）

大型の道管が年輪に数列で並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。放射組織は、単列同性である。道管の穿孔は、単穿孔を有する。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性、耐水性が高い。

(2)ムクノキ　Aphananthe aspera Planch.　ニレ科　図版82　2a-2c（417-2）

やや大きめな道管が単独ないし放射状に2～3個複合する散孔材である。道管は晩材部にかけて径を減じ、放射柔細胞が接線状にみられる。道管の穿孔は、単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～3列となる。

ムクノキは、暖帯から亜熱帯の山地などに分布する落葉高木の広葉樹である。材の強さはほぼ中庸であるが靭性があり、割裂しにくい。

(3)クワ属　Morus　クワ科　図版82　3a-3c（515-4）

大型の道管が年輪に数列並び、晩材部では径を減じた道管が2～4個複合する環孔材である。軸方向柔細胞は、周囲型である。道管は単穿孔を有し、小道管の内腔にはらせん肥厚がみられる。放射組織は、異性で1～6列である。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

(4)サクラ属　Prunus　バラ科　図版83　4a-4c（417-38）

小型の道管が、単独または2～7個不定方向に複合する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内腔にはらせん肥厚が明瞭にみられる。放射組織は異性である。

サクラ属にはヤマザクラ、オオシマザクラなどがある落葉高木の広葉樹である。材は中庸からやや重硬で、粘りがあり強靭である。切削加工も困難でない。

(5)ネムノキ　Albizia julibrissin Durazz. マメ科　図版83　5a-5c（417-22）

大型の道管が年輪にそって1～2列配列し、晩材にかけて径を減じる環孔材である。道管は、単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～3列である。

ネムノキは温帯下部から熱帯に分布し、日本では陽性の二次林に多い落葉高木の広葉樹である。材はやや軽量であまり強くないが、切削加工は容易である。

(6)タケ亜科　Subfam. Bambusoideae　イネ科　図版83　6a-6c（515-9）

向軸側に原生木部、その左右に2個の後生木部と背軸に篩部で構成される維管束が散在する単子葉植物の茎である。繊維鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間で、日本列島には12属ある。

3. 考察

住居跡出土炭化材を同定した結果、クリが最も多く産出した。クリは重硬で耐朽性の高い材である。またクワ属やサクラ属も、耐朽性が高い。当遺跡の古墳時代の住居跡には、建築材として耐朽性の高い樹種の材を利用していたと考えられる。

東海地方の4世紀以前から5～7世紀の建築材の集成では、縄文時代から主要建築材として利用されてきたクリ、トネリコなどの建築材が、ヒノキ属、スギ属、アカマツやクロマツ等の二葉松類に変化する傾向が示唆されている（山田，1993）。

今回の分析では、針葉樹の利用は確認されていない。今回の分析で産出されなかった可能性の他に、遺跡周辺の森林から針葉樹を建築材として利用しなかったなどの要因が考えられる。

〈引用文献〉

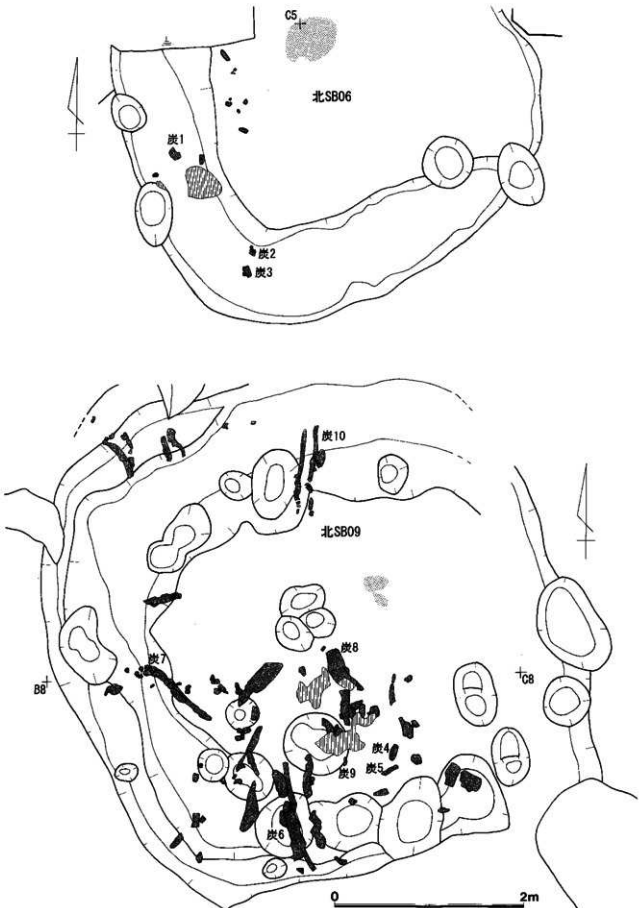
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史
植生史研究　特別第1号，242p.

表1　瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の住居跡別樹種同定結果

樹　種	北SB06	北SB09	合　計
クリ	1	4	5
ムクノキ		1	1
クワ属	1		1
サクラ属		1	1
ネムノキ		1	1
タケ亜科	1		1
合　計	3	7	10

表2　瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

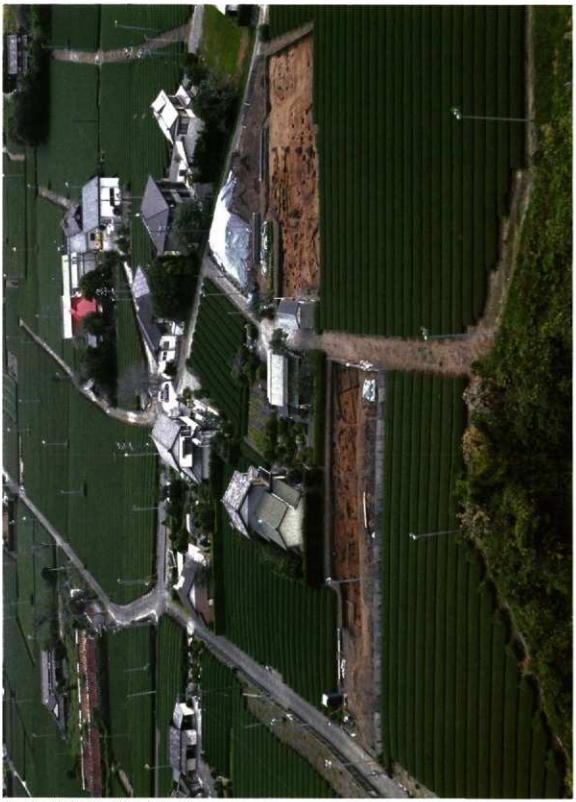
No.	ラベル番号	遺構名	樹種	出土地点
1	515-4	北SB06	クワ属	北西半
2	515-9	北SB06	タケ亜科	北西半
3	515-10	北SB06	クリ	北西半
4	417-2	北SB09	ムクノキ	B-8
5	417-5	北SB09	クリ	B-8
6	417-22	北SB09	ネムノキ	北西半
7	417-28	北SB09	クリ	北西半
8	417-38	北SB09	サクラ属	北西半
9	417-48	北SB09	クリ	北西半
10	417-10	北SB09	クリ	北西半



第83図　北SB06・09炭化材出土状況図

今坂遺跡第６次調査区北半全景（東から）

今坂遺跡第６次調査区南半全景



瀬戸山Ⅱ遺跡調査区遠景（西から）

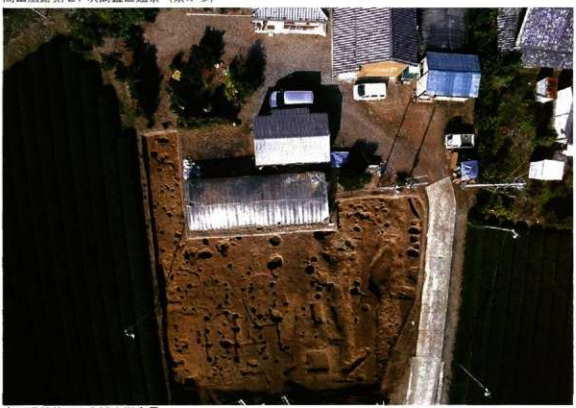
瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区全景（東半）

瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区全景（西半）

瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区全景（東半）

瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区全景（西半）

高田遺跡第 21 次調査区遠景（東から）

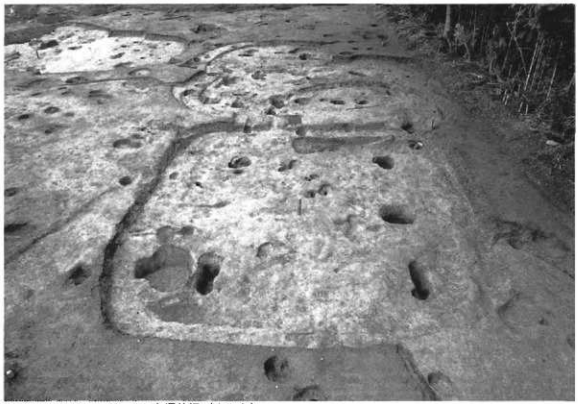


高田遺跡第 21 次調査区全景

今坂遺跡第6次調査区北半（東から）

今坂遺跡第6次調査区南半（北から）

SB01・02・03・10・11 床面検出状況（東から）



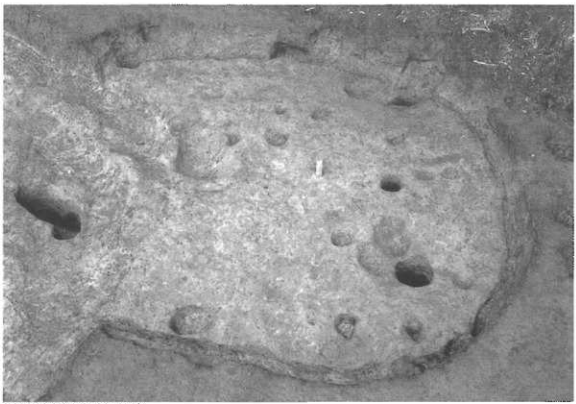
SB01・02・03・10・11 完掘状況（東から）

SB02・03・10・11 完掘状況（西から）

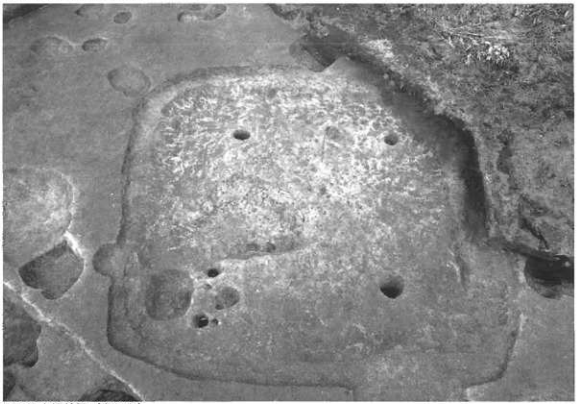
SB04・05 完掘状況（東から）

SB06 完掘状況（北から）

SB09 床面検出状況（東から）



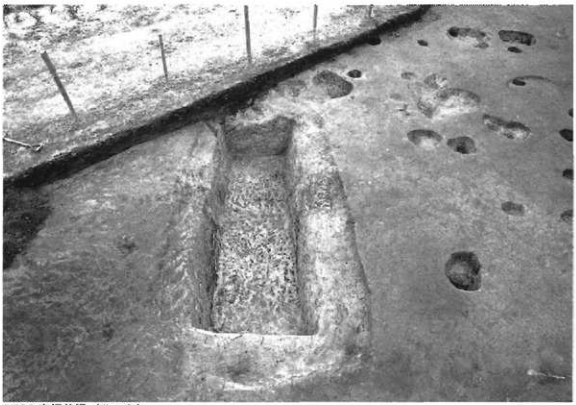
SB09 完掘状況（東から）



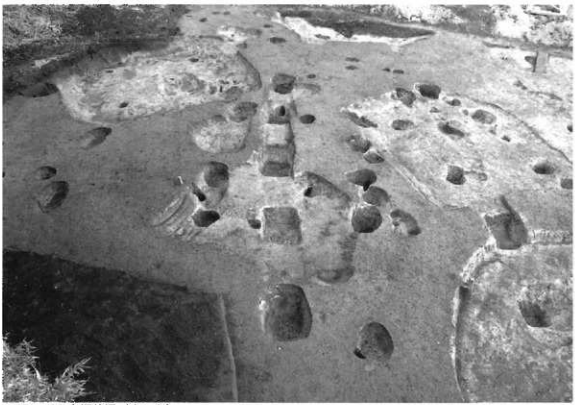
SB13 完掘状況（東から）

SB14 完掘状況（東から）

SB15 完掘状況（東から）

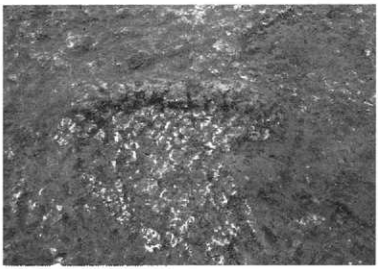


SF06 完掘状況（北から）

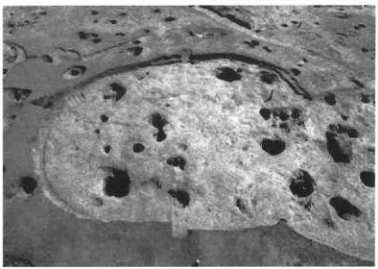


SH01・02 完掘状況（南から）

SB01 焼土・黄褐色土ブロック
検出状況（北から）

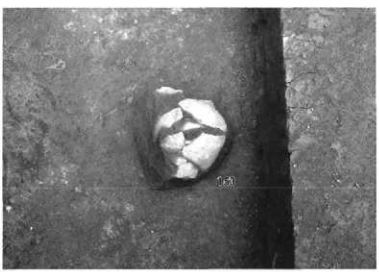


SB02 炉跡検出状況（北から）



SB04 完掘状況（西から）

SB04 土器出土状況(1)



SB04 土器出土状況(2)

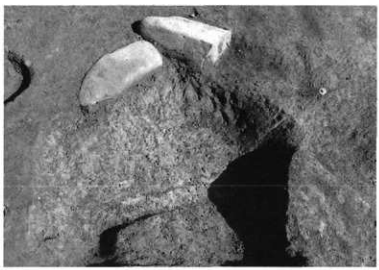
SB06 土器出土状況(1)

SB06 土器出土状況(2)

SB06 地下炉粘版岩ブロック出土状況

SB08 完掘状況（西から）

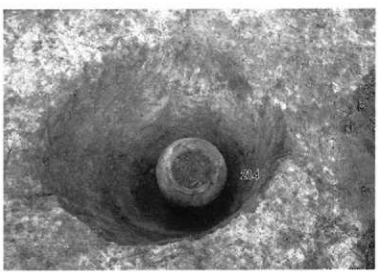
SB08 土器出土状況



SB09 炉跡検出状況

SB09 大型石出土状況

SB14 土器出土状況(1)

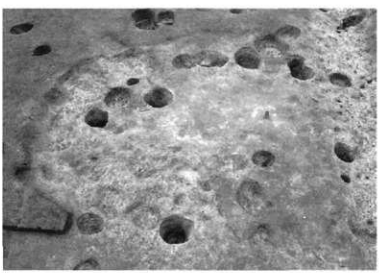


SB14 土器出土状況(2)

SP524（SB15 内）土層

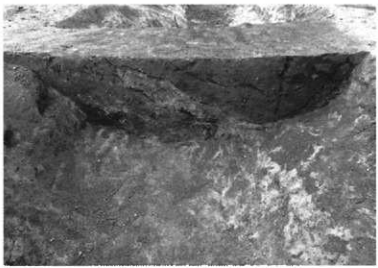
SB16 完掘状況（西から）

SB17 完掘状況（北から）



SB18 完掘状況（西から）

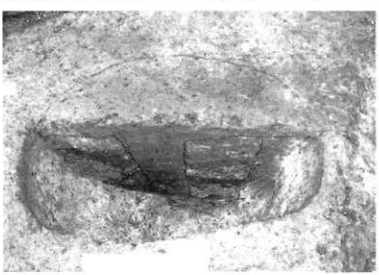
SD01・03 完掘状況（北西から）



SD01・03 土層断面

SD02 完掘状況（南西から）

SD04 完掘状況（南西から）

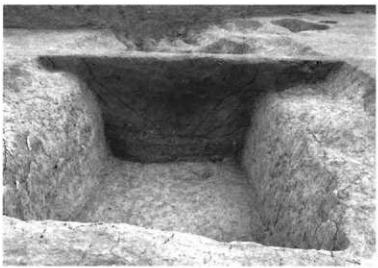


SP236（SH01 内）土層断面

SF01 完掘状況（北東から）

SF01 土層断面・土器出土状況(1)

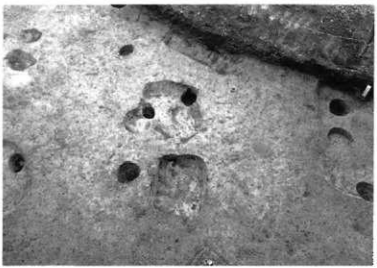
SF01 土層断面・土器出土状況(2)



SF06 土層断面

SF06 鉄剣出土状況（遠景）

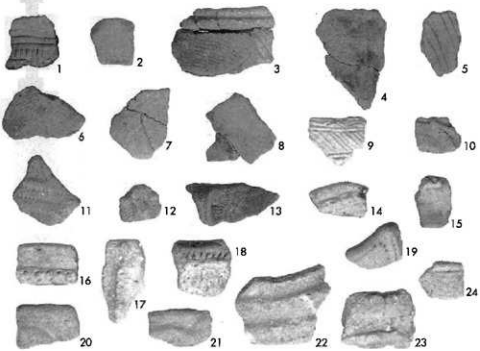
SF06 鉄剣出土状況（近景）

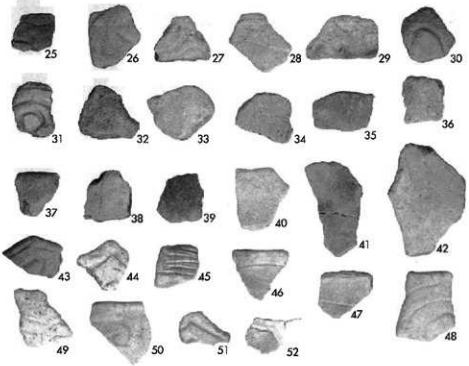


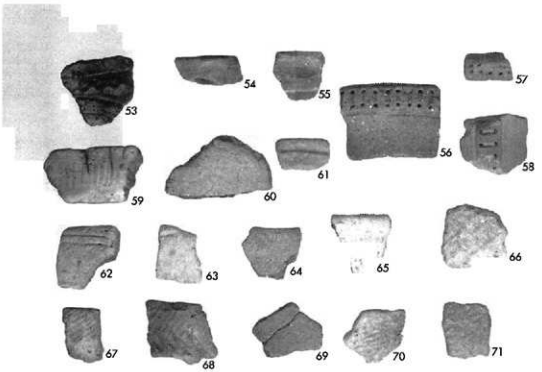
SF10～12 完掘状況（西から）

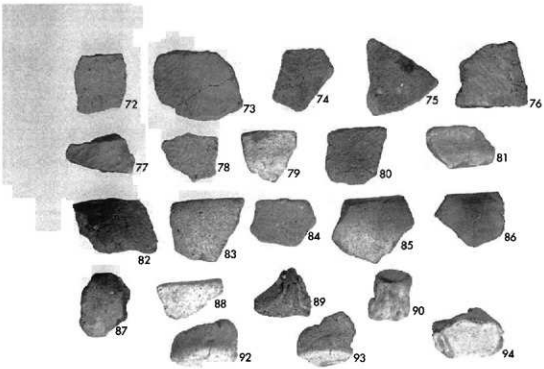
SF11 小刀出土状況（西から）

柱列 1 完掘状況（南から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

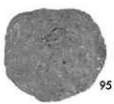

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52

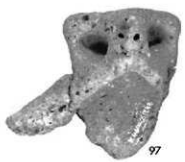

53
54
55
57
56
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71


72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
92
93
94

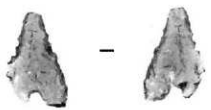
91

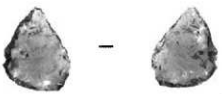
96

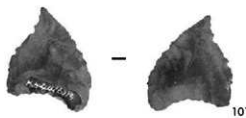

95

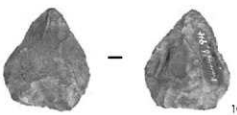

97

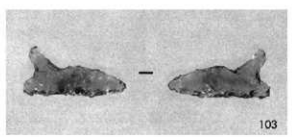
98


99


100


101


102


103

104

105 106

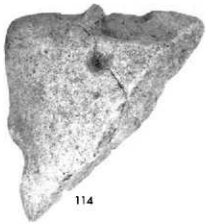
107 108

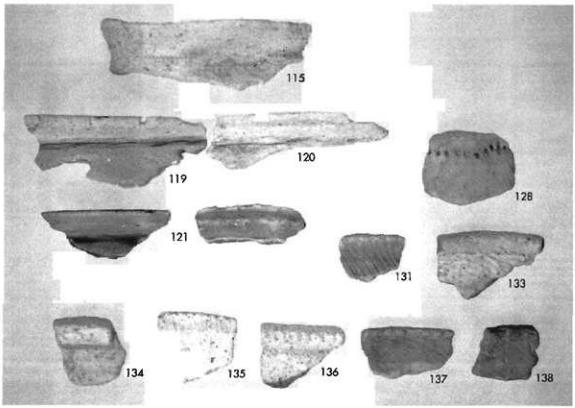
109 110

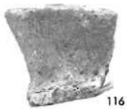
111

112

113

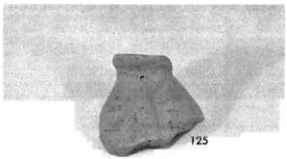

114


115
119
120
128
121
131
133
134
135
136
137
138


116

122

124

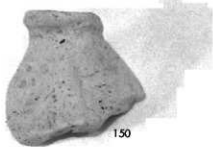

125

126

127

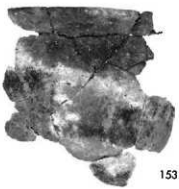
132

139


150

151

152

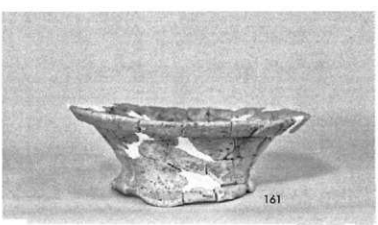

153

154

156

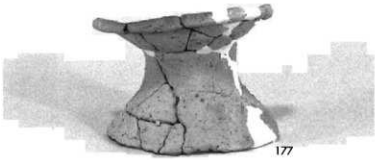
160

164


161

170

171


177

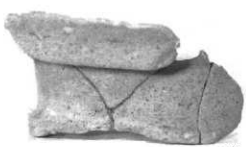
178

192

182

193

194

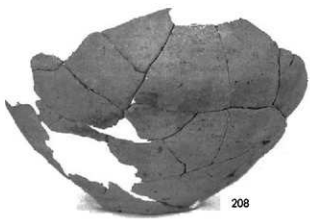

196

195

205

202

204

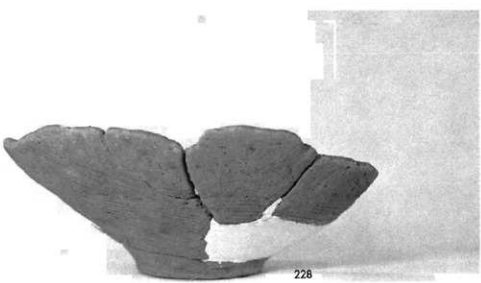

208

213

214

217

229



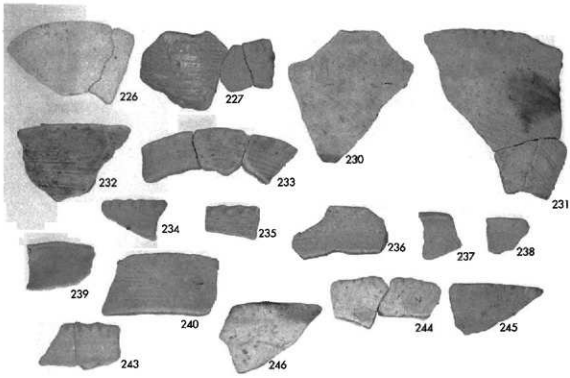
228

212

225

223

241

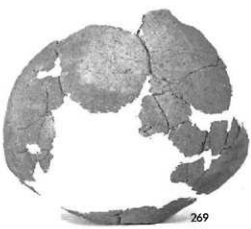

226
227
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
243
244
245
246

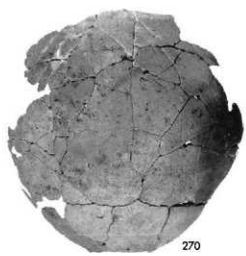
247

263

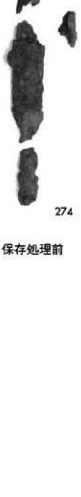
265

264


269


270

271



X線写真

274

保存処理前

275

保存処理前

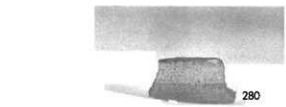
X線写真

目貫：表

目貫：裏

279

276


280

283

281

277

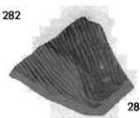
278

287

289

282

288


286

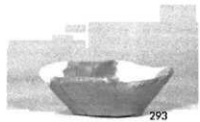
290

284

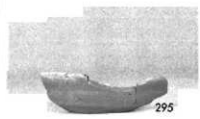
285

291

292


293

294

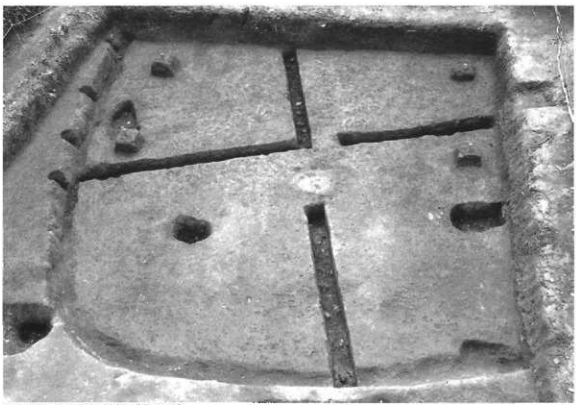

295

瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区東半（西から）

瀬戸山Ⅱ遺跡北調査区西半（西から）

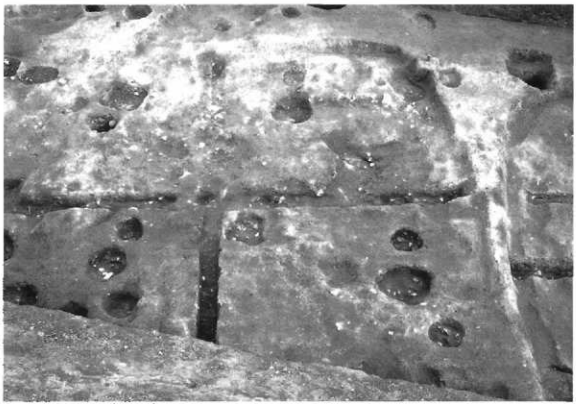
瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区東半（南から）

瀬戸山Ⅱ遺跡南調査区西半（西から）

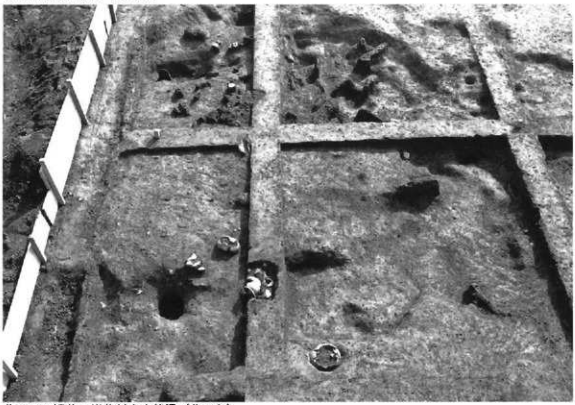


北 SB01 床面検出状況（北から）

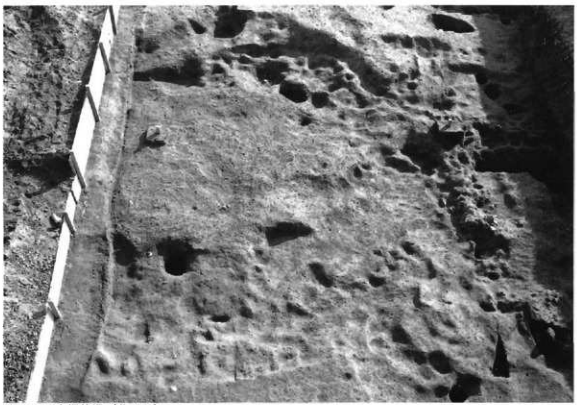
北 SB01 完掘状況（西から）



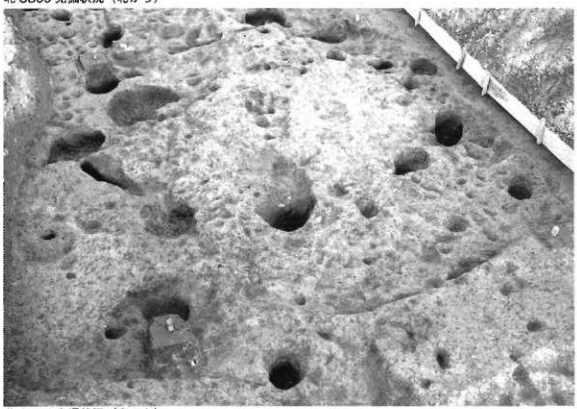
北 SB02 完掘状況（西から）



北 SB09 遺物・炭化材出土状況（北から）

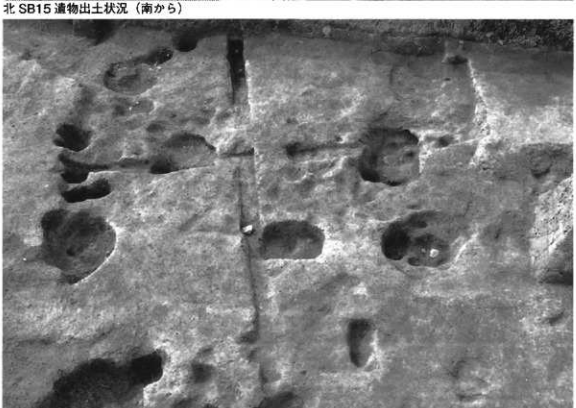


北 SB09 完掘状況（北から）

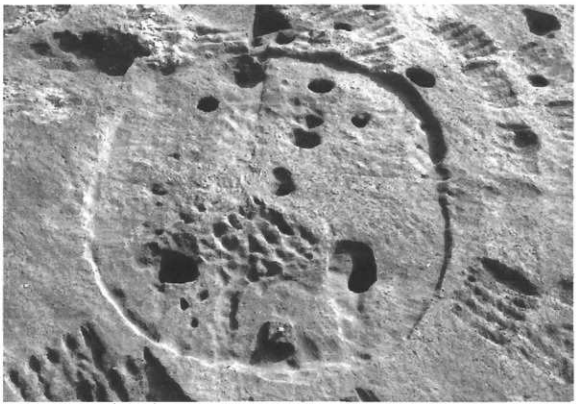


北 SB14 完掘状況（南から）

北 SB15 遺物出土状況（南から）



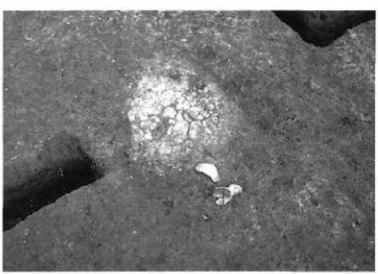
南 SB01 完掘状況（東から）



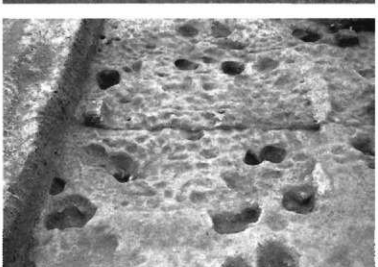
南 SB13 完掘状況（北から）

南 SH01 完掘状況（東から）

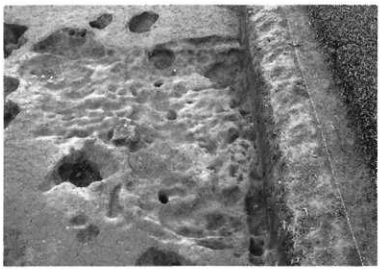
調査風景



北 SB01 炉跡検出状況（北から）

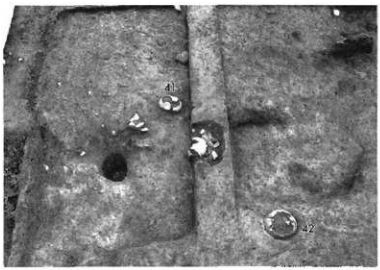


北 SB05 完掘状況（南から）

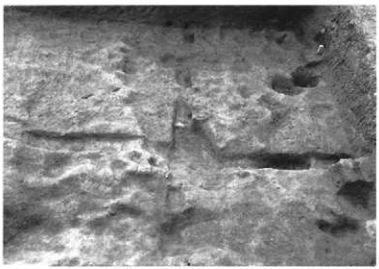


北 SB08 完掘状況（北から）

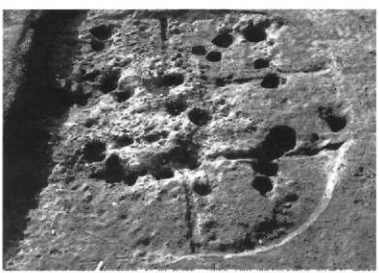
北 SB09 遺物・炭化材出土状況（西から）



北 SB09 遺物出土状況（北から）



南 SB02 完掘状況（北から）

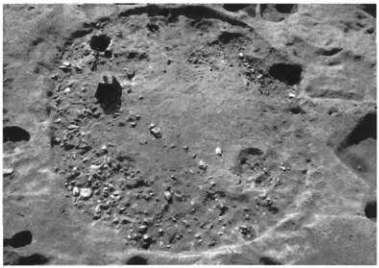


南 SB03 完掘状況（東から）

南 SB05 遺物出土状況（南から）

南 SB05 ～ 07 完掘状況状況
（南から）

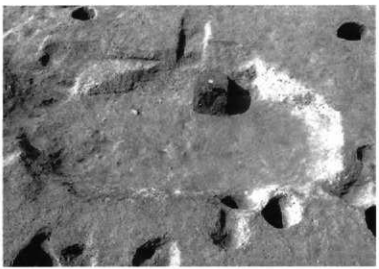
南 SB09 床面検出状況（北から）



南 SB09 完掘状況（北から）

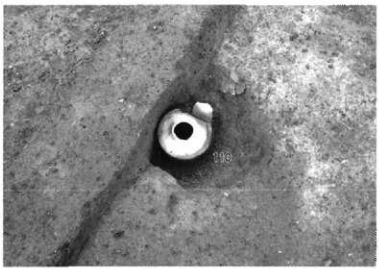
南 SB13 遺物出土状況（東から）

南 SH02 完掘状況（南から）



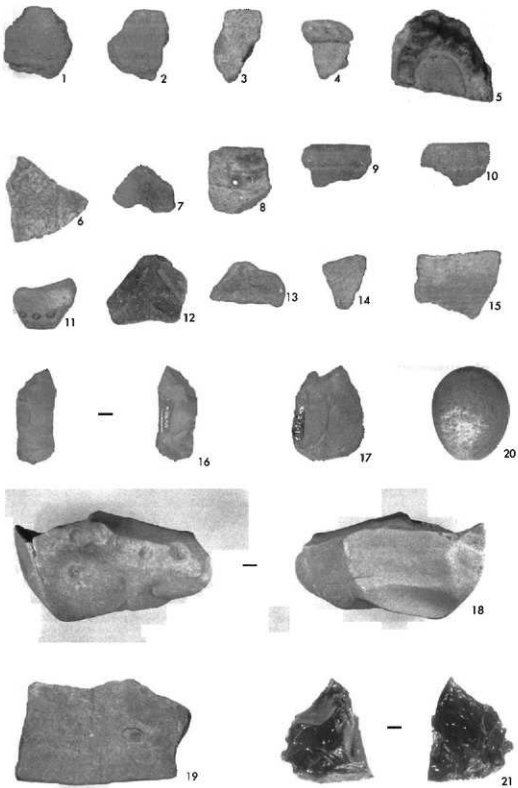
南 SF01 完掘状況（東から）

南 SX01 遺物出土状況（1）
（東から）

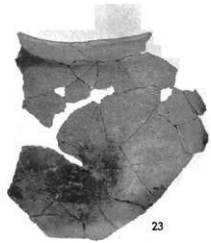


南 SX01 遺物出土状況（2）
（南から）

南調査区 G16 区遺構外（北から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
20
18
19
21

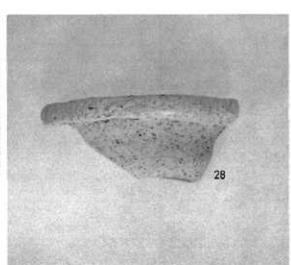
22


23

24

25

27


28

31

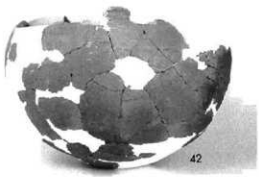
32

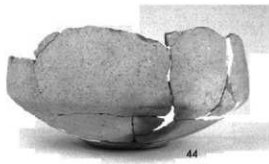
33

34

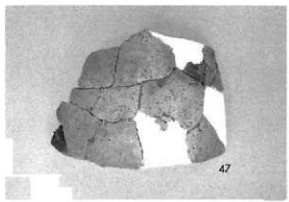
39

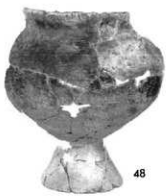
41

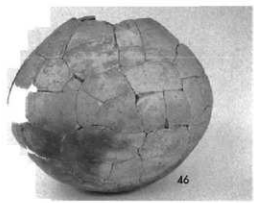

42


44

45

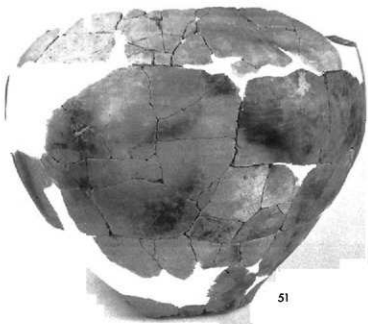

47


48


46

49

50

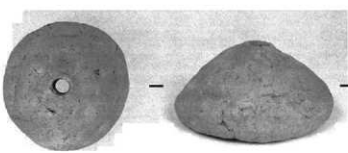


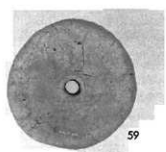
51

52

55

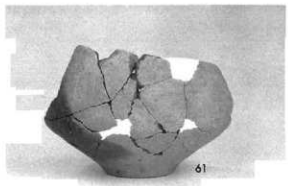
53



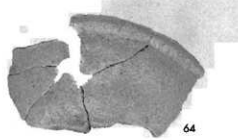


59

60


61

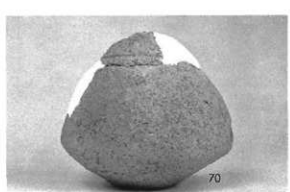
62


64

67

68

69


70

75

76

77

78

79

80

81

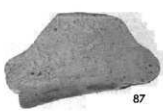
82

83

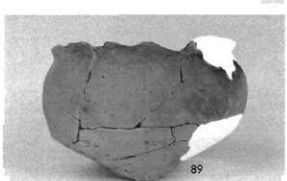
84

85

86


87

88


89

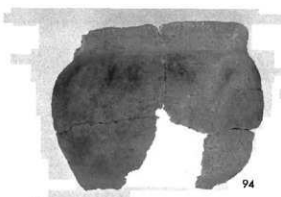
90

91

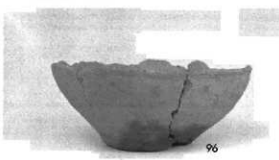
92

93 (上半)

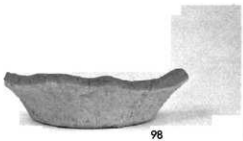
93 (下半)


94

95


96

97

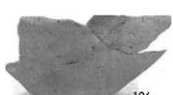

98

101

102

103

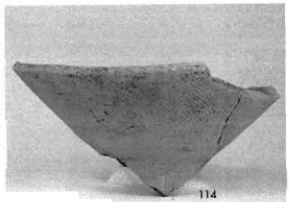
105


106

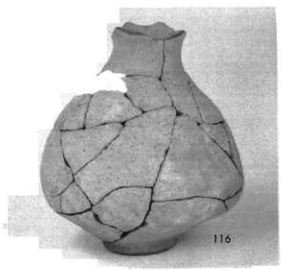
107

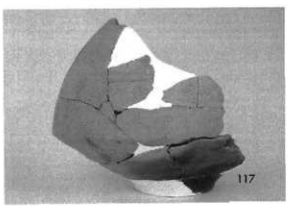
109

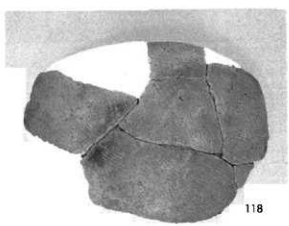
110


114

113


116


117


118

115

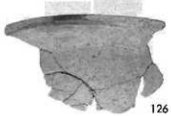
119

123

124

125

130


126

127

128

133

高田遺跡第 21 次調査区全景（東から）

SB01 完掘状況（南から）

SH01 完掘状況（南から）

SD01 完掘状況（東から）

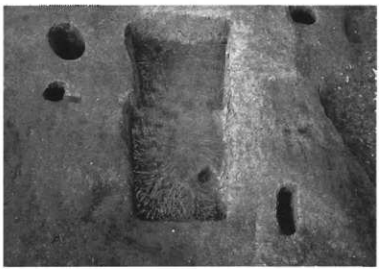
SD02 完掘状況（南から）

SD03 完掘状況（南から）

調査風景

SB02・03 完掘状況（北から）

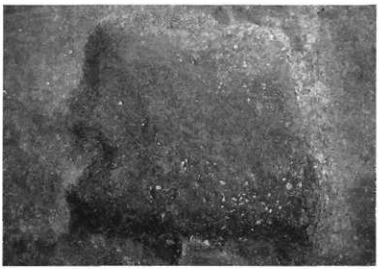
SD03 集石検出状況（西から）



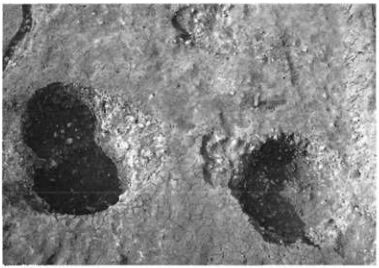
SF04 完掘状況（南から）

SF04 土層断面（1）

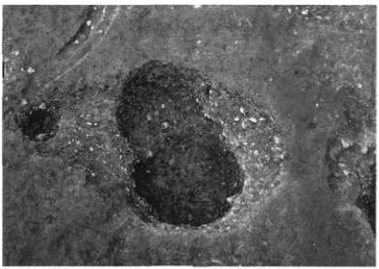
SF04 土層断面(2)



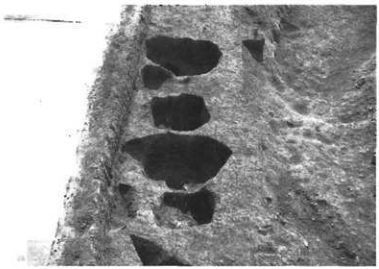
SF05 完掘状況（南から）



SF06・07 完掘状況（西から）



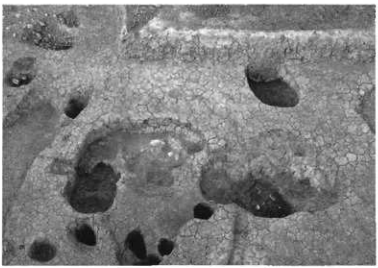
SF06 完掘状況（西から）



P01 ～ 05 完掘状況（西から）

SP27 土層断面

SP109 土器出土状況（西から）



SP48 ～ 50 完掘状況（南から）

SP48 ～ 50 土層断面

SX01 集石検出状況（南から）

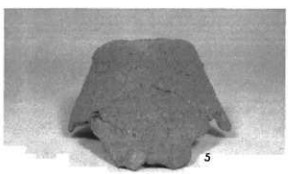
1

2

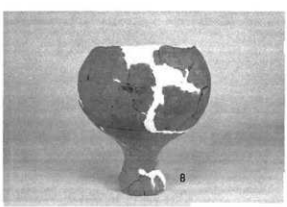
3

4

6


5

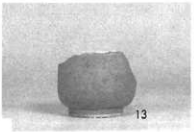
7


8

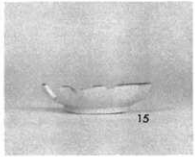
9

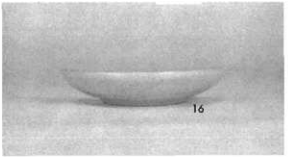
11

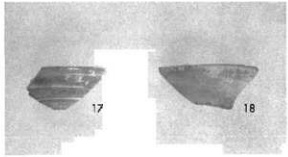
12

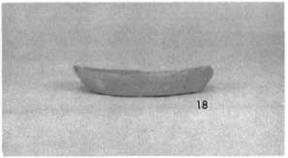

13

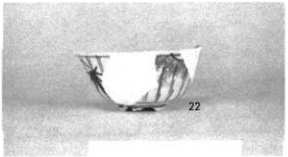
14


15

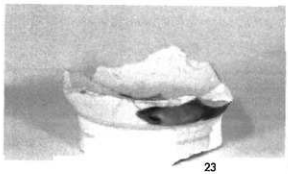

16

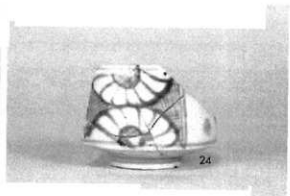

17 18

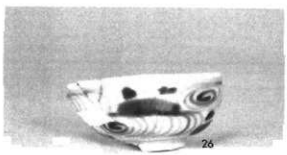

18

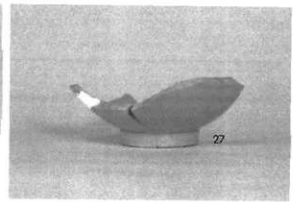

22

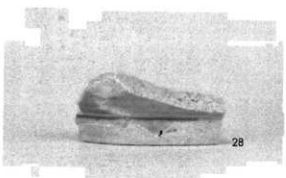
20

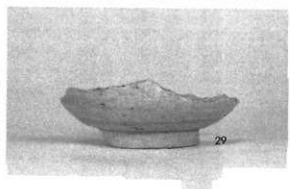

23


24


26


27


28


29

30

31

32

21
33

25
34

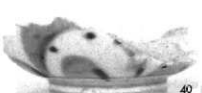
35

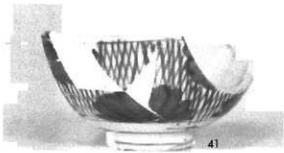
37

36

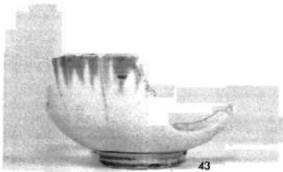
39

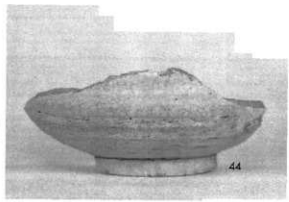
38


40


41

42


43


44

46

48

47

49

55

51

56

50

52

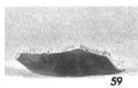
53

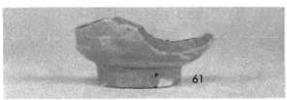
54

57

60

58


59


61

63

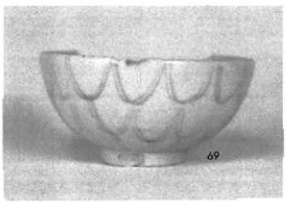
62

64

66

67

65


69

68

70

71

72

73

74

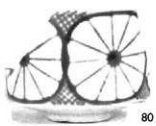
75

76

77

78

79

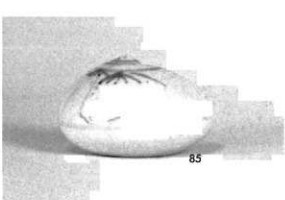

80

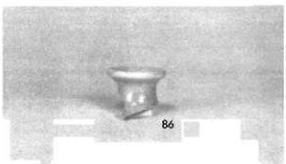
81

82

83

84


85

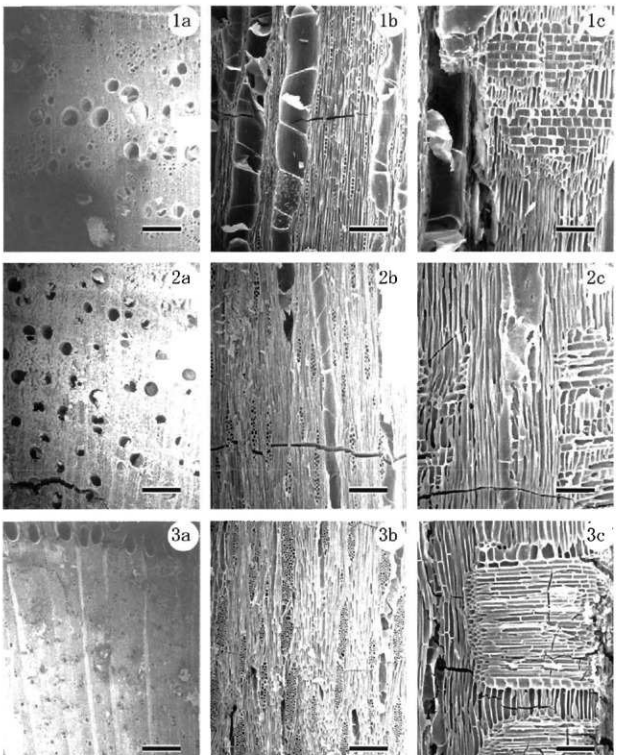


86

87

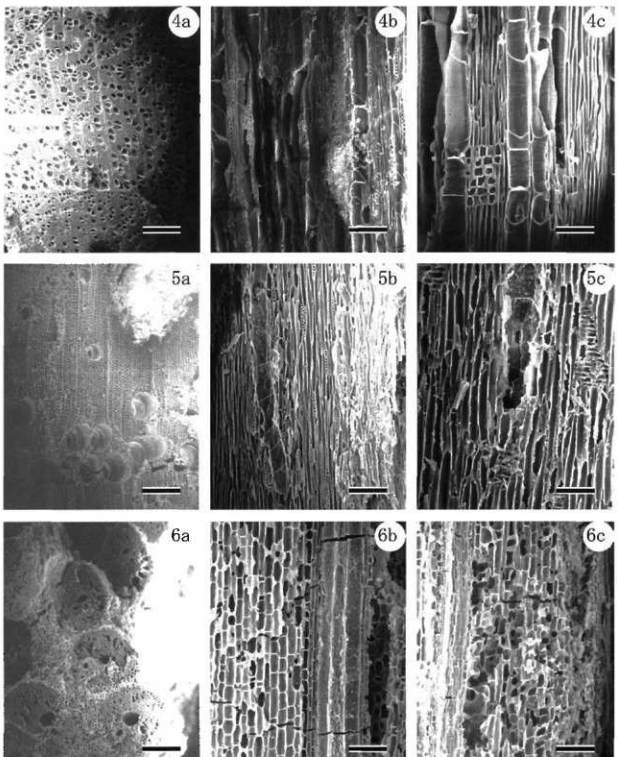
88

89



1a-1c. クリ（417-28） 2a-2c. ムクノキ（417-2） 3a-3c. ヤマグワ（515-4）
a：横断面（スケール＝200 μm） b：接線断面（スケール＝100 μm） c：放射断面（スケール＝50 μm）

瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)



4a-4c. サクラ属 (417-38)　5a-5c. ネムノキ (417-22)　6a. タケ亜科 (515-9)
a: 横断面 (スケール=250 μm)　b: 接線断面 (スケール=100 μm)　c: 放射断面 (スケール=50 μm)

瀬戸山Ⅱ遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)

ふりがな	いまさかいせきだい6じちょうさ・せどやまⅡいせき・たかだいせきだい21じちょうさ
書　名	今坂遺跡第6次調査　瀬戸山Ⅱ遺跡　高田遺跡第21次調査
副書名	
著者名	木佐森道弘・戸塚和美
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650　静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いまさかいせきだい6じちょうさ 今坂遺跡第6次調査	静岡県掛川市吉岡	22213	137度 56分 23秒	2007年6月～ 2007年10月	1,500㎡	茶園改植
せどやまⅡいせき 瀬戸山Ⅱ遺跡	静岡県掛川市高田		137度 56分 33秒	2007年8月～ 2007年12月	1,206㎡	茶園改植
たかだいせきだい21じちょうさ 高田遺跡第21次調査	静岡県掛川市吉岡		137度 56分 52秒	2007年11～ 2007年12月	525㎡	茶園改植

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今坂遺跡第6次調査	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	土器 石器	段丘縁辺部に展開する集落。 弥生時代中期の土器棺墓、古墳時代中期の大型土坑墓。
		弥生時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土器棺墓	土器	
		古墳時代	竪穴住居跡	土器 鉄剣	
		近世	溝跡、土坑墓	陶磁器 鉄刀	
瀬戸山Ⅱ遺跡	集落跡	旧石器		石器	段丘縁辺部に展開する集落。 弥生時代後期の焼失家屋。 旧石器（スクレーパー）の出土。
		縄文時代		土器 石器	
		弥生時代 ～ 古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土器	
高田遺跡第21次調査	集落跡	弥生時代 ～ 古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土器	弥生時代後期の布掘り掘立柱建物跡。 江戸時代の溝跡。
		近世	溝跡、土坑墓	陶磁器	

今坂遺跡第6次調査
瀬戸山Ⅱ遺跡
高田遺跡第21次調査

発掘調査報告書

2009年3月31日

発行　掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
TEL 0537-21-1158

印刷　㈱幸栄グラフィック
静岡県掛川市弥生町21
TEL 0537-24-4341㈹